

E292.25-Ma447



1200500760982

E292.25
A44
⑦



外2151 ✓

E.29225
M444



滿蒙地理風俗寫真大觀



題字

內閣總理大臣

齋藤實閣下

題字

陸軍大臣

荒木貞夫閣下

題字

滿洲國々務總理

鄭孝胥閣下

題字

滿洲國外交總長

謝介石閣下

題字

滿洲國總務廳長

遠藤柳作閣下

強志力行

崇德業廣

奉水



至誠貫之

貞夫

王道與

滿洲國

鄭孝督

景運方啓
獻歲發春
王道立國
其命維新

滿洲建國第三年

謝介石



利
害
共
通

水

450/203

緒言

滿洲國が建邦されてより茲に滿貳年に垂んとする。而して其の建國以來の經過は頗る順調を辿り、益々良好の成績を示して居る。是れとともに我國と滿洲國との關係は愈々緊密接運を保ちて、殆んど不可分のな關係を有し居り、又有せざるを得ない運命であることは何人も知悉する所である。然り、それ斯くの如き運命である以上、我國民が滿蒙に對する認識を深むることの、又最も喫緊必須なることは言ふまでもない。

由來、滿蒙の地域は、我が日本の總面積の約二倍に近く、七萬七千三百余方里の面積を有し、昭和六年の事變以前は、所謂支那の東北四省であつたが、大同元年（昭和七年）三月、支那政府を離脱し、斷然獨立を决行して、堂々たる新國家滿洲國を建設した。而して其の直後に於て興安省また滿洲國に合流したので、滿洲國は更に尠大なる地域を示すことゝなつた。

斯くの如き尠大なる地域を有する滿蒙に於ける詳細なる事情は、素より少數頁の一冊子が克く叙述し盡すべきところではない。然かも先づ以て其の地理風俗の實景一斑を實寫し、之に對する解説を施して以て、廣く知らしむることは、滿蒙の認識上、極めて有効切實な便法であると信ずる。素より是れ九牛の一毛を點描したるに過ぎざるも、然かも本書は、能ふ限り努力の下に睨めて卷舒繁簡の宜しきを得ることを期した。幸に本書「滿蒙地理風俗寫真大觀」に由りて滿蒙の面貌一斑を窺ひ得れば本懐である。

本書編纂に際しては、時日の乏きが上に、參考資料また充分ならざりし爲め、印刷後に至りて遺憾の點に氣注きたるもの亦尠くはない。且つ寫眞の配合、記事の順序解説等にも往々にして誤謬なきを保し難い。此點特に讀者諸彦の諒恕を冀ふ。

昭和八年十二月

編者 識す

記事の部

日本の特殊權益……………一
 特殊權益の獲得……………一
 所謂二十一箇條條約……………一
 決定項目……………一
 鐵道諸問題及商租權問題……………二
 條約上の權利の空文化……………三
 滿洲國の成立……………三
 序說……………三
 新國家樹立に至るまで……………三
 錦州陥落と新國家創建の機運……………四
 新國家建設さる……………四
 建國宣言の發表……………五
 建國式舉行……………六
 執政宣言……………六
 建國成立を列國に通告……………七
 滿洲國の國號、滿洲國の語源に就て……………七
 政治、軍事……………七
 政府組織法……………七
 人權保障條例……………八
 版圖(滿洲國版圖領域地圖挿入)……………九
 滿洲國政府組織表……………一〇
 滿洲國政府の首腦部……………一一
 在滿蒙日本領事館……………一二
 滿蒙に於ける日本の軍事……………一二
 地勢、面積、人口……………一二
 滿蒙の境域と其地勢(滿蒙地區用圖挿入)……………一二
 滿蒙の氣候……………一三
 面積及び人口……………一三
 人口の分布(滿蒙人口分布圖挿入)……………一四
 土着住民の人類別……………一四
 滿洲に於ける戰蹟一覽……………一四
 經濟……………一五
 滿洲の貿易狀況……………一五
 國別對滿貿易表……………一五
 重要な輸移出品……………一六
 三港の貿易近狀……………一六
 滿洲に於ける各國の投資……………一七
 各國の鐵道勢力關係……………一七
 滿蒙鐵道概況一覽表……………一八

商工業概況……………一八
 商工會場所及實業機關——各種の組合——發達せる滿洲の工業
 ——油房業——纖維工業——製麻業——毛織業——製紙業……………二〇
 產 業……………二〇
 最も有望な農業……………二〇
 滿洲の特用作物……………二一
 豊富なる礦産……………二二
 農業に伴ふ重要な畜産業……………二三
 滿洲の林業概況……………二四
 前途を期待さるゝ水産業……………二六
 製鹽業況……………二七
 交 通……………二六
 滿蒙に於ける鐵道……………二六
 南滿鐵道外各支線——安奉鐵道各支線各鐵道……………二六
 水運及各港の狀況……………二七
 大連港——旅順港——安東港——營口外各港、各江、各河……………二七
 教 育……………二八
 滿蒙の教育……………二八
 教育制度……………二九
 各學校の經營種別……………三〇
 社會教育施設……………三一
 宗 教……………三二
 支那人間に行はるゝ三教……………三二
 佛 教……………三二
 道 教……………三三
 儒 教……………三三
 回々教……………三三
 喇嘛教……………三三
 基督教……………三三
 儒教に屬する神廟の所在地……………三三
 道教に屬する神廟の所在地……………三三
 佛教に屬する神廟の所在地……………三三
 風 俗……………三三
 滿洲住民の衣食住……………三三
 土俗に現れた興味……………三三
 滿洲の言語……………三三
 滿洲年行事……………三三
 滿蒙地理風俗寫真大觀記事目次終……………三三

日本の特殊權益

特殊權益の獲得

滿蒙に於ける日本の有する特殊權益とは、抑も何であるか、それは日清、日露の兩大戦役を経て、幾萬の人命を犠牲とし、幾十億の國帑を費して獲得したるものである。而して其の獲得した權益は、日支兩國が動かすべからざる明確な條約に依つて定められたものであることは言ふまでもない。

日露戦役に於て日本は海に陸に大捷を奏し、三十八年九月米國大統領ルーズヴェルト氏の斡旋の下にポーツマスに於て日露講和條約は結ばれ、滿洲に關しては左の如く取決められた。

- 一、滿洲に於ける清國の主權を認める事。
- 二、ロシアは旅順、大連及び其附近の領土の租借權並に之に附帶する權利、特權、財産を清國の承諾を得て日本に讓渡する事。
- 三、ロシアは長春より旅順、大連に至る鐵道及び其支線並に之に關聯する一切の權利、特權、財産を同じく清國の承諾を得て日本に讓渡する事。

此の年の十二月、日本は支那と談判を開いて日清滿洲善後條約を結び、此の條約によつて上記の權利、特權並に財産を支那の承諾を得てロシアから讓渡されたのである。即ち之に依て日本の滿蒙に於ける權益は遂に日清役當時の發因は暫く措き、直接にはポーツマス條約及び日清滿洲善後條約の結果、之を獲得したものである。

而して此の權益の内容に關する具體的問題は、其後に於ける日支交渉によつて決定され、尙其後數年に亘りて交渉が行はれ、明治四十二年の九月に至つて大體重要問題の決定を見たのであつた。

所謂二十一箇條條約

其後歐洲大戰は開始され、日本は東洋の平和を確保する目的と、同時に日英同盟條約の趣旨に副はんが爲め、獨逸に對して戰を宣し、英國と共に兵を山東に進めて、獨逸の膠州灣租借地及び膠濟鐵道を占領した。然るに支那は其後間もなく日本に對し該地域の返還を迫つて來たので、日本としては其不條理なる要求には断じて應ぜざる旨を回答した。日本政府は此時歐洲戰爭が果して何時終結するやも豫測し難く、且つ日露講和會議の後、日清善後條約を結びし不利益を思ひ、豫め支那との間に協商を遂げ置く必要を痛感し、茲に愈よ山東問題解決の急務を感じ、同時に滿蒙に於ける日本の特殊權益を明確に爲しおく必要を覺り、一九一五年一月十八日所謂二十一箇條の要求を提出するに至つた。即ち右の要求は次の五項目に分れて居る。

- 第一、山東省に於てドイツの有する利權の處分に關する件（四箇條）
- 第二、南滿洲及び東部内蒙古に於ける日本の特殊地位及び利益の承認に關する件（七箇條）
- 第三、漢冶萍公司に關する件（二箇條）
- 第四、支那沿岸の港灣及び島嶼の不割讓の解決に關する件（一箇條）
- 第五、多年日支間に懸案となれる諸問題の解決に關する件（七箇條）

此の日本の要求の提出に對して、支那は最初より耳を藉さず、交渉三ヶ月に亘り、會議を開くこと二十五回に及ぶも其議が纏らないので、日本は幾たびか讓歩を爲し修正を加へて提出し支那政府の考慮を促したが、支那政府は却て日本の到底承認し得ざる變更を加へて提出し來り、且つ膠州灣の無條件還附及び日獨戰爭より生じたる損害の全部を日本政府に於て負擔すべき旨並に同地方の軍事的施設の即時撤廢及び占領地守備兵の至急撤退を要求するに至つたので、日本としては是れ以上交渉を重ねるの無益なるを知り、最後の修正案を支那政府に交附すると共に第五項全部を引離して後日の交渉に譲り五月九日午後六時迄支那政府の回答を期待した。茲に於て支那政府は遂に要求全部を承認するに至つた。

決定項目

依て其年即ち大正四年五月二十五日北京に於て同條約は調印された。茲に於て我國は滿蒙關係に於て次の如き權益を明確に獲得した。
即ち是れ動かすべからざる決定項目である。

- (一) 關東州租借期間及び安奉鐵道の期間を九十九箇年迄に延長された。即ち關東州租借期間は一九九七年迄延長され、南滿洲鐵道及び安奉線の期間は各々二〇〇二年、二〇〇七年まで延長された。

- (二) 南滿洲及び東部內蒙古に於ける日本人の經濟的發展の必要條件

(イ) 土地商租權

「日本臣民は南滿洲に於て各種商工業上の建物を建設するため又は農業を經營するに必要な土地を商租」する權利を得商租の期限を得、商租の期限は三十箇年、無條件更新の規定がある。

(ロ) 自由に居住性來し、各種の商工業その他の業務に従事する權

(ハ) 東部內蒙古に於て支那國民と合辦により農業及び附屬工業の經營を爲す權

(ニ) 東部內蒙古諸都の開放

- (三) 南滿洲及び東部內蒙古に於ける鐵道借款に關する優先權

此の權利は華府會議に於て帝國全權より條件付にて對支新借款團の共同事業に提供する旨聲明した

- (四) 南滿洲に於ける政治、財政、軍事、警察に關する日本人顧問、警官僱聘の權

此の權利も日本は華府會議で拋棄した

- (五) 南滿洲に於ける鑛山試掘採掘權

この規定に基き我國は大正十四年五月二十五日の日支交換文書により牛心臺、田付溝杉松崗、鐵廠、暖池塘、鞍山站、紅廟、爽波溝、九鐵山の試掘採掘權を得た

- (六) 吉長鐵道に關する諸協約及び契約の根本的改訂

これに基き、一九一七年十月支那政府と滿鐵間に「吉長鐵道借款契約」が締結され、建設資金全額六百五十萬圓を滿鐵より提供し、滿鐵は三十箇年間吉長鐵道の委任經營に任ずる事となつた

尙以上の外

- (一) 滿蒙四鐵道に關する件。四洮鐵道に關する件(借款總額三千七百萬圓延滯利子約五百萬圓)。洮昂鐵道に關する件(借款千八百萬圓)。

吉會線に關する權利。吉敦鐵道に關する權利。

- (二) 吉黑森林金鑛借款。これは一九一八年支那政府と日支合辦中華實業銀行との間に成立した吉林及び黑龍江兩省に於ける森林及び金鑛事業に對する借款で、借款總額三千萬圓。

是等は日本が滿蒙に對して有する既得權である。

鐵道諸問題及商租權問題

滿蒙に於ける我が特殊權益中の中樞を爲すものは言ふまでもなく南滿洲鐵道である。日清滿洲善後條約の秘密議定書中に、支那は滿鐵を自國に回收する以前にありては、同鐵道に隣接または併行して其の利益を害すべし本線又は支線を建設せざることを約束したにも拘らず、支那は日本の此の權益を侵して、滿鐵並行線たる吉海鐵道及び北寧鐵道打通線の敷設を完成した。此の兩線は我國が之れを買収するか、少くとも我國が其の支配權を有する日支合辦經營に改めらるべきものである。

次に吉會鐵道の敷設權も、前後三回に亘つた日支協約によつて我國の利權となつたものであるが、支那は今日まで其の實現を拒んでゐる。此の鐵道は日本海と滿洲の中心を結び、裏日本の經濟に重大な關係を有するのみならず、其の沿線には幾十萬の同胞朝鮮人が居住してゐるのであるから、之れを保護する上から見ても、極めて必要なるものである。吉會鐵道以外に我國が敷設權を獲得せるものにして、未だ實現を見ないものは、前舉諸鐵道の他に左の諸線がある。

- 一、開 吉 線(開原、吉林間)
- 二、長 洮 線(長春、洮南間)
- 三、洮 熱 線(洮南、熱河間)
- 四、臨 海 線(洮熱線上の一點より海港に至る線)
- 五、溪城鐵道の牛心臺、城廠間

六、天圖鐵道の延長

土地商租は我が同胞が、滿洲に於ける經濟的發展を試むべき根本的條件であるにも拘らず、支那は頑強に之れを拒否し續けて來たのである。又、朝鮮人の問題に就ては、滿洲に於ける百萬の朝鮮人は萬寶山事件に於て知悉するゝ如き狀態にて、彼等は實に其の生存權を拒まれて、言ふべからざる悲惨のどん底に彷徨して居る。

六、天圖鐵道の延長

土地商租は我が同胞が、滿洲に於ける經濟的發展を試むべき根本的條件であるにも拘らず、支那は頑強に之れを拒否し續けて來たのである。又、朝鮮人の問題に就ては、滿洲に於ける百萬の朝鮮人は萬寶山事件に於て知悉さるゝ如き状態にて、彼等は實に其の生存權を拒まれて、言ふべからざる悲惨のどん底に彷徨して居る。

已上は明らかに支那が蹂躪して居るのであつた。是等の權益は、此の機會に於て正當に確定せられなければならない。

條約上の權利の空文化

動かすべからざる日支條約によつて確定せられたる條約上の我が權益が、事實的に空文化し、又殆んど空文化せんとしつゝあるものを舉ぐれば左の諸項である。

- 一、營口、安東及び奉天の日本居留地設定（鐵道附屬地の市街經營に由り實際は不要）
 - 二、特定吏員の傭聘
 - 三、滿鐵併行線不敷設の約束
 - 四、吉會線敷設の約束
 - 五、大正四年の日支條約にて認められたる鑛山採掘權の大部分
 - 六、南滿洲の土地商租
 - 七、支那の警察法令及び課税に對する關與
 - 八、中部内蒙古諸都市開放の約束
 - 九、間島を含む在滿朝鮮人の不動産其の他の保護
- 如上の諸項は、條約上の權利が、事實に於て空文化し、又は殆んど空文化せんとしつゝあるものであるが、是等の諸項は極めて重要な權益を含んで居るものである。

滿洲國の成立

序 說

苛斂誅求、暴戾飽くなき支那舊軍閥たる張氏の惡政に苦みつゝあつた滿蒙三千萬民衆は、昭和七年三月一日（即ち滿洲國大同元年三月一日）を以て、支那本土より離脱獨立し、堂々として建國を宣言し、茲に世界に於ける一獨立國としての滿洲國は力強く呱呱の聲を擧げたのであつた。是れ滿蒙三千萬民衆の爲め祝福すべきは勿論、又我が東洋平和確保の爲め、且つ世界の一大平和郷としての一樂土を現出したることを、祝さなければならぬ。正に是れ世界の歴史に於ける一エポックを劃した壯舉である。

然かも、語に曰ふ「物の成るは、成るの日に成るにあらず、必ず因て來る所あり」と、寔に然り。滿蒙の新國家成立に漕ぎ付くるまでには、多大の苦心慘情を要したることは言ふまでも無い。左に其の成立の由來、即ちの概要を記す。

新國家樹立に至るまで

● 滿洲事變の勃發 ● 昭和六年九月十八日午後十時半、突如として支那將校の率ゆる支那兵約二百名は我南滿洲鐵道たる北大營西南方柳條溝の線路を爆破したので、當時線路巡邏中の我が守備兵と衝突し遂に日支の衝突は開始され、茲に滿洲事變の勃發を見るに至つた。斯て激戦の後、我軍は北大營を占據し、次で東大營、奉天城内は翌十九日完全に我軍によつて陥落し、支那兵は敗走し、一方長春方面に於て我軍は十九日午後三時宣城子及南嶺の支那兵を掃蕩して、事變當初の軍事行動は一とまづ終局を告げた。

● 治安維持活動 ● 此の事變によつて奉天は、其統治者を失つたので、我軍は民衆の懇請を容れて治安維持の爲め直ちに奉天臨時市政執行の布告を發し同月二十日土肥原大佐を市長とし、其他在奉天民間の有力者を課長に任命し秩序の回復に努力し廿一日武裝解除せる元公安局員を以て自衛警察局を組織し、局長に李毅を任命、巡警六百名を憲兵隊の補助機關とし、奉天城内外の治安維持に當らしめた。而して二十四日には衆議によつて資金鑑、于沖漢、關朝應氏等は市政公所の諮問機關特に市政の金融維持機關として遼寧地方維持委員會を組織した。翌廿五日關朝應、祖憲

庭兩氏及び世界紅十字會その他二十餘の慈善團體を糾合して四民維持會及び東北紳民時局解決方會が組織された。又一方吉林では吉林軍參謀長張治氏は我軍の吉林入城と共に、吉林省獨立を宣言し、治安維持に任ずると共に、省政府組織の準備を爲し、ハルビンに在りたる張景惠も又獨立を宣言し、十月中旬に至つて洮南に在つた張海鵬軍は洮昂線によつて北進し、其の一部は江橋附近に進出したが、嫩江北岸に在る馬占山軍と衝突し十五日嫩江の鐵橋は馬占山軍の爲めに燒却破壊されたので、十一月四日我軍の鐵橋修理部隊に對し、馬占山軍は突如戰闘行爲を開始した、依て我軍は之に應戰して激戦となり、苦戦の後十九日我軍は馬占山軍の敗走するを追撃して遂に齊々哈爾濱を占據した。斯くて北滿も平定に歸し漸次時局の進展に伴ひ、各地の民心は漸く平定に向ひ奉天にては市政公所を地方維持委員會に引續ぎ、土匪原市長以下の邦人職員は辭職し、新たに趙欣伯氏を市長とする市政公所の陣容は完成を見たのである。

十一月七日地方維持委員會は張學良との關係離脱を宣し、省政府の組織に着手し、陣容を備へて同時に遼東省を奉天省と改稱した。是れと共に一時避難民救済に盡瘁して大連に居居中であつた恭親王を迎へ、政治的に地方維持委員會と對立の立場に在つた四民維持會は解消し、恭親王は大連に歸り、首腦者は省政府の各機關に包含され同十三日鐵道城內某所に隱棲中であつた前省長臧式毅は迎へられて新政權に參與し十五日奉天省長に就いた。又東北交通委員會は全滿各地に於ける鐵道運輸の圓滑と管理とを計る目的の下に、十一月一日成立を告げ、之が委員長には丁鑑修が任命され、地方各縣民政の改革を指導の爲め新たに自治指導部を設定し十一月十日于沖漢氏は之が部長に任命された。

錦州陷落と新國家創建の機運 茲に奉天が陥落したので張學良は錦州に據り兵匪を唆唆して全滿洲各地に亘りて擾亂し以て東三省の奪回を企てたるゆゑ我が關東軍は錦州攻略を決意し、十二月二十六日之が行動を開始した。斯くて昭和七年一月二日我が關東軍は錦州に入城し、其一部は山海關に達して、かの萬里の長城以東の地は、完全に平穩に歸し、茲に軍事行動は終了を見るを得た。一方奉天省政府の基礎は漸次鞏固を示し、當事者は専ら内政に盡力し、管下各縣省長の更迭を行ひ憲政を更新し、減稅の布告を發して民治に努めた。即ち三省官銀號の準備を圖り財政の基礎を確立して善政を布くと共に、奉天城下の各商店は開店營業し、商況は日に増し活潑となり、市民は漸く安堵して各自の業務に専心するを得るに至つた。

茲に於て齊々哈爾濱に入城せる張景惠、吉林の熙洽、奉天の臧式毅三氏の間、新國家組織の内議は進拂し、いよ／＼滿蒙新國家建設の氣運は濃厚を呈し、張海鵬、于芷山の兩氏は先づ奉天に相會して滿蒙の準備會議を開催し、各鎮守司令に任命され、各省首腦者は互に意見の交換を行ひ、東北各省を統一する新國家の成立に向つて邁進努力を傾けたる結果、各自意見の一致を見るを得て、一月十五日より具體的に國家組織の作成に着手し同月二十九日まで奉天に諮問會議を開催して各方面の意見を綜合して、國家組織の根本策を協議するところあつた。

其間、ハルビンを中心に反吉林軍の暴舉があつたが、我が精銳なる多聞○團は之を撃つてハルビンを奪回した。其他局部的戰闘は各所に續行されたるも、大局には何等の影響なく、新國家成立の準備會議は、各省代表使者の手によつて着々として非公式に協議を續行された結果、奉天に於て聯省長頭會議開催の氣運は到来し、熙洽氏を先頭に、張景惠氏、次で馬占山氏來奉し、各省代表者は相次いで奉天に集合し、愈々新國家成立準備の巨頭會議は開催さるゝ事となつた。着奉せる三氏は連日奉天省首腦者と相會し、省政府、ヤマトホテル、趙欣伯氏邸に於て國家組織の内容に關し密議を凝し資金證氏の委員長たる最高政務委員會を解消して臧式毅、張景惠、熙洽、馬占山、湯玉麟、蒙古齊王、凌陞諸氏を委員として、新たに東北行政委員會を組織し、張景惠氏を之が委員長に推舉した。

新國家建設のさる

滿洲國の機構 斯て主腦部各氏は新國組織政體、國號、諸法令等につき連日各委員代表と協議を重ねた結果、各委員連名を以て三千萬民衆の福利をモットーとし、完全に舊張學良政權の離脱を標榜する獨立宣言を公布し茲に新國家組織は具體化し三省を統轄して聯省共和國とし、執政には前清宣統皇帝溥儀を推戴することとなり、いよ／＼民本主義たる滿洲國の機構は左の如く決定を見た。

- 一、國 名 滿 洲 國
- 二、國 體 聯 省 自 治 立 憲 共 和 國
- 三、元 首 執 政 (溥儀氏)
- 四、首 都 新 京 (舊長春)
- 五、國 旗 五 色 旗 (黃、赤、青、白、黑)
- 六、年 號 大 同

三大使命 是より先、東北行政委員會では滿蒙獨立と共に、委員長張景惠氏外六委員連名を以て二月十八日左の聲明を中外に發表した。

東北に事變發生以來、瞬逝の間に既に數月を経たり、人民は平和の地を望むの情熾なること飢渴に食水を求むるに同じ、この更始一新の際に當

り、いよ／＼復活蘇生の痛切なるものあり。張景惠等がかたじけなくも推舉せられ省區の領袖となる、舊を改め新を洗ふ責任は他に貸す能はず、此處に大計を協議するたの一隅に合同せるが故曰く「鞏固なる國體有るに非ざれば以て全局を計るに足らず、人民の公意に基くに非ざれば以て新猷を建つるに足らず」と此處に於て東北四省と一特別區及び蒙古各王侯より一機關を組織し、東北行政委員會と命名したる本會の成立と共に、内外に通電を發し、之より當國政府の官

『三大使命署名』はより先、東北行政委員会では滿蒙獨立と共に、委員長張景惠氏外六委員連署を以て二月十八日左の聲明を中外に發表した。

東北に事變發生以來、瞬速の間に既に數月を経たり、人民は平和の地を望むの情熾なること飢渴に食水を求むるに同じ、この更始一新の際に當

り、いよく復活蘇生の痛切なるものあり。

景惠等はかたじけなくも推舉せられ省區の領袖となる、舊を改め新を洗ふ責任は他に貸す能はず、此處に大計を協議するたの一團に合同せるが皆曰く「鞏固なる國體有るに非ざれば以て全局を計るに足らず、人民の公意に基くに非ざれば以て新猷を建つるに足らず」と此處に於て東北四省と一特別區及び蒙古各王侯より一機關を組織し、東北行政委員会と命名したる本會の成立と共に、内外に通電を發し、之より黨國政府の官制を離脱し、東北省區は完全に獨立せり、更に獨立の精神を以て努めて行政改善を計るべし、先に軍閥を布き横暴にも誅求これ努む、民衆は熱火浸水の中に在るが如く、殆ど生命さへ保持し得ざる状態にて、鄉村の嘗めし痛苦の涙未だ乾かず、虎狼に等しき爪牙の餘力は尙存在せり。之は正に徹底的に排除すべき處にして再度一節を生じて延延せしむる勿れ、古語に曰く「民を撫する者之を皇と云ひ、民を保んずる者之を王といふ」と在り、一般民衆が蘇生して安息を得ば吾皇の政治は即ち完成するものとす、これ本會の第一使命なり。

近來良民を虐ぐる專制政治は利を恣にし、咀みを集め社會の道徳は日に漸く消耗せんとす、社會は即ち國家の基礎なり、道徳は政治の本源に繋れり、古書にも「忠信篤敬ならば蕃殖の邦と雖も行はるべき」とあり、排外政策を持たず、此處に國際の戰爭を取め、更に門戸開放と機會均等主義を以て世界の民族と共に共存共榮を計らん。これ本會第二の使命なり。

内を安んじ睦まじくするは政治の根本なり、既に根本の鞏固を謀り、宜しく枝幹の繁榮を講すべし、随つて職業を獎勵歡迎し農商を發展せしめ利を生ずる者をして日に多からしめ、業を失ふ者をして日に少なからしめば、社會の利益はすでに均富され、階級の争鬭は自ら滅びん、かくの如くんば赤化は行はれず、民政は明して得らるべし、これ本會の第三使命なり。

景惠等には以上の三大使命を完成するため、即ちこの命をつくり我が東北各省部の人民のために幸福を求めんとす、これ一面に我が東西各種族人民のために幸福を求むるものなり、天日は上にあり、この宣言を照鑑する邦人君子興起してわれらを助けよ。

二月十八日

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |
| 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 | 張景惠 |

建國宣言の發表

大同元年三月一日（即ち我が昭和七年三月一日）午前十時十五分、滿洲國政府の名に於て建國宣言を發し、其國是と對外政策を中外に宣明することとなり奉天商埠地張景惠氏公館に於て左の建國宣言書は發表された。

建國宣言

我が滿蒙の地は邊陲に屬し開國縣遠なり、これを往昔に徵するに分併積ふべし、地質膏腴にして民風は樸茂なり、開放を経るに及んで生業日に盛く物産豊穡實に輿府となす。

然るに辛亥革命共和民國成立して以來、東省の軍閥は中原變亂の機に乗じて權を攫取し、三省擁りて己の有となし、貌執相繼いで正に二十二年に成らんとす、眞厲貪婪、傲者淫佚にして人生休戚を顧みることなく、唯々私利を是れ圖る、内は暴政、横征意を擅にして揮霍し、その結果幣制紊亂し、百案凋零するに至れり、且又時に野心を逞うして、兵を關内に進め、地方を擾害し民命を傷殘す、一再敗壞するも尙後悔せず、外は信義を蔑棄して聲を隣邦に聞き、悉く親仁の規に味く。専ら排外を事とし、加ふるに警政修らざるを以て盜匪横行して四境普く、到る處虜掠焚殺して村里は一空となり、老弱は溝壑に陥り餓殍は途に載す。我三千萬民衆が命を此の殘暴不法なる區域に託するは日を持たんのみ、何ぞよく自ら脱せんや、今や何の幸ぞ手を隣市に假りて此醜類を驅りて積年軍閥蟻居し批政の萃衆せる地を一旦にして廓清する、これ天、我滿蒙の民に蘇息の良機を與へしなり、吾人の當に奮然として興起し適往勇進以て更始を圖るべき處なり、唯々これ内中府を顧みれば改革以來初めは群雄角逐して頻年戰爭を起し、近くは一黨專横して國政を把持す。何をか民生といふ、實にこれを死に置くなり、何をか民權といふ、唯々利を専らにするなり、何をか民族といふ、唯々黨あるを知るのみ、既に天下を公となすといひ、又黨を以て國を治むといふ、矛盾乖謬にして自ら欺き人を欺く、種々なる詐偽は究詰するに堪えず、近年内閣屢次起り境土分崩し、黨すら自ら存すること能はず、何ぞよく國を顧みんや、此處に於て赤匪

は横行し、災變は海りに起る、毒は海内を痛ましめ民無涕懸し政體の不良に痛心疾首して兼昔における政治清明の時代を追思し、唐武三代之遠きは殆んど及ぶべからずとせり、これ我友邦人共に目睹し同じく感嘆を深くする所なり。

夫れ二十年試験の得るところをもつてすれば、其結果、こゝに至る亦曠然として返るべきなり、然るに尙疾を諱み醫を忌み、その舊惡を怙み、民意を抑壓すべからざるに詞を藉らんか、しからば其往く所は縦にすれば危く共産にいたり、自ら亡國滅種の地に陥るにあらざれば已まらん、今にしてわが滿蒙の民衆の天賦の機縁に於て萬惡なる政治國家の範圍外に擧拔して自ら脱することを求めざれば、勢ひ必ずみな漏れ、同じく盡くるにいたらんとす、數月來しば／＼奉天、吉林、黑龍江、熱河、東省特別區、蒙古各旗盟の官紳士民の集合を経て詳に検討を加へたる結果、意志すでに一致し、惟へらく爲政は多言を取らず唯だ實行如何を見るのみ、政體は何等を分たす、唯だ安居集團を主となす、滿蒙は舊時本國と別に一國たり、今や時局の必要により自ら樹立を謀らざることを能はずと、即ち三千萬民衆の意向を以て即日中華民國と關係を離脱して滿洲國を創立することを宣言し、こゝに特に建設要項を中外に昭布し咸に聞知せしむ。

竊かに惟ふに政は道に基づき、道は天に基づき、新國家建設の旨は、一に天に違ひ民を安んずるを主とす、施政は必ず信正の民意に俯ひ私見を存することを容さず、凡そ新國家は領土内に居住するものは皆種族の岐視尊卑の分別なき厚有の漢族、滿族、蒙族、および日本朝鮮の各族を除くほか、即ちその國人といへども長久に居住を願ふものはまた平等の待遇を受けることを得、その正に得べき權利を保護し、それをして糸毫の變損あらしめず、並びに力を極めて往日の黑暗政治を剷除し、法律の改良を求め、地方自治を勵行し廣く人材を修めて賢識を登用し、實業を獎勵し、金融を統一し、資源を開闢し、生活を維持し、警政を教練し、匪患を肅清す。並びに進んで云へば教育の普及は正に禮教を崇ぶべし、王道主義を實行し、境内一切の民族をして照々々々として春臺に上るが如くならしめ、東西永久の光榮を保ちて議會政治の模型となさんとす。

その對外政策は信義を尊重して努めて親睦を求め、凡そ國際間の舊有の通例は謹みて遵守せざることなく、其の中華民國以外の各國と定むるところの條約上債務を滿洲新國領土内に屬するものは皆國際慣例に照して繼承承認す、商業を創行し資源を開拓する爲め、我が新國家に投資を希望するものあらば何國に論なく一律に之れを歡迎し以て門戸開放、機會均等の實をあげんとす。

以上宣布せる各節は新國家の立國に關する主要なる大綱なり、新國家成立の日より始め新に組織せる政府に於て其の責任を負ひ極めて誠懇なる表示をもつて三千萬民衆の前に向ひ其の實行を宣誓す。

天地照鑑す、この言を渝ることなし。

大同元年三月一日

滿洲國政府

建國式舉行

滿蒙新國家の創建は敎上の熱心なる活動努力によつて成功の域に到達し、基礎全く確立することを得たので、豫て出處を快諾せる溥儀氏は満洲子の假寓を出で、新都長春に向ひ三月九日を卜して午後三時より新滿洲國の建國式典は華やかに而して嚴肅の裡に滯りなく舉行された。

左に當日盛儀の光景一斑を記さんに、式場は市政公署の大禮堂を以て充られた。此日參列の光榮に浴した内外の大官名士は、南面せる正座の前の執政の通路を挟み東西に分れて着席す。正座直前の西側には支那盛裝の參禮官二名と鄭孝胥、羅振玉、高錕扶等、清朝老臣代表者十名直立し、東側には本庄關東軍司令官、内田滿鐵總裁、森獨立守備隊司令官、板垣關東軍高級參謀、駒井關東軍事務部長を始め、外人側の來賓は相對して着席し、之に次で呼倫貝爾王凌陞、哲里木盟長齊王を始め、蒙古王公の四名が第二列に並び、第三列は各省區文武官代表二十名、第四列は各省區民衆代表二十名、何れも東西に分れて着席し、其後方には内外新聞代表が着席した。

着席するや蒼重なる樂音裡に、新元首溥儀氏は參禮官の先導で式場に入り、内外文武大官の敬禮の裡に中央の正座に進みて着座し、執政就任の儀が行はれた後、東北行政委員會委員長は桐箱に納めたる滿洲國々璽を恭しく新元首に捧呈し、次で同委員斌式毅氏は滿洲國執政印璽を捧呈した。茲に於て執政溥儀氏は左の執政宣言を讀み上げた。

執政宣言

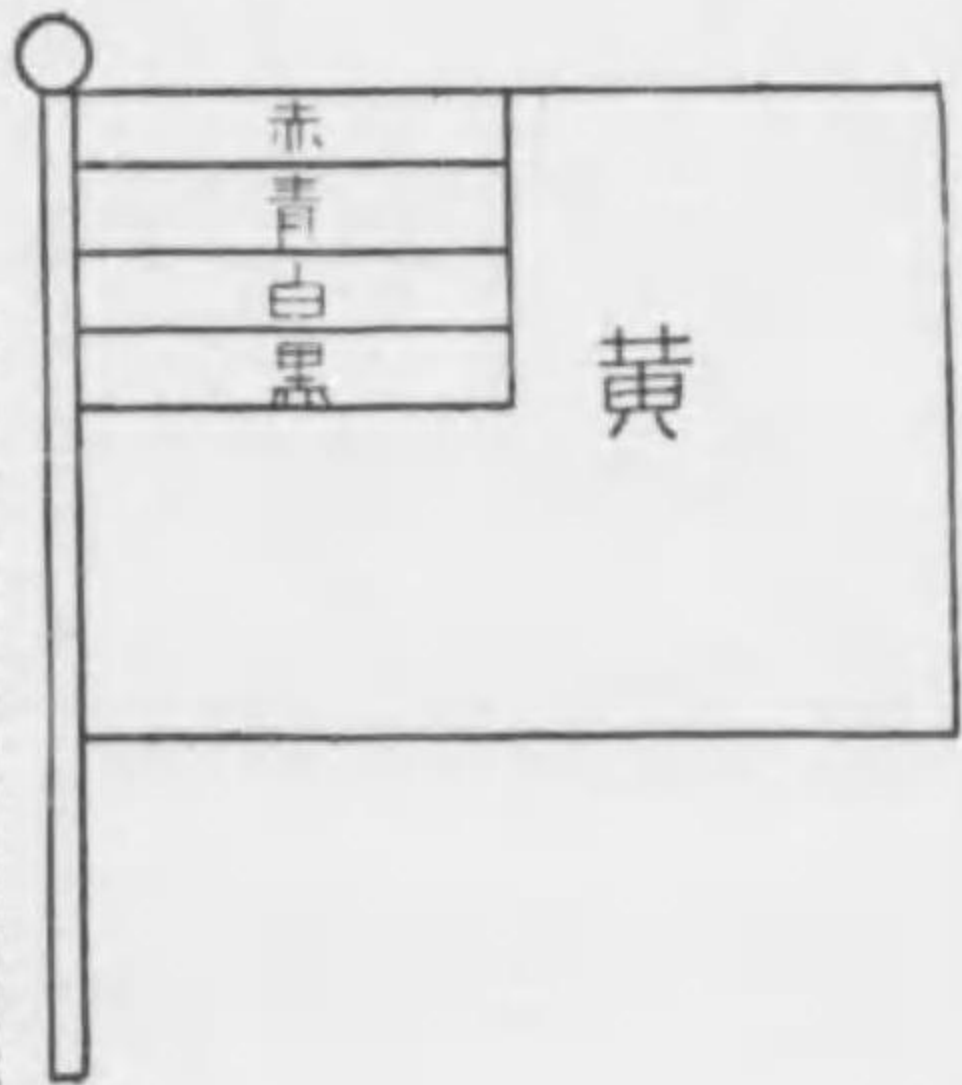
人類は須らく道德を重んずべきに種族の別あり、即ち他を抑制し己を稱揚す、その道德たるや甚だ薄し、人類は須らく仁愛を重んずべきに國際間の争あり、即ち人を損じ己れを利す、その仁愛たるや甚だ薄し、今我が國を建立するにあたり、道德仁愛をもつて主となし、種族の別および國際間の争を除くせば、まさに王道樂土の實現をみるべし、およそ我が國民たるもの努めてこれを勉勵せよ。

斯くて侍從武官始め參列一同「執政謁見の禮」が行はれ、之に對して執政の答禮ありて後、内田滿鐵總裁は外人を代表して祝詞を朗讀し、一同敬禮を行ひ、樂樂裡に溥儀氏退席、午後四時十分を以て茲に滿洲國建國の盛儀は終了を告げた。

建國成立を列國に通告

滿洲國外交總長謝介石氏は建國式の翌十日滿洲國の外交方針に關する聲明書を發し、是と同時に日、英、米、佛、伊、葡、白、和、支那のワシントン九國條約關係國及び獨、露の十一ヶ國の外務大臣及び國際聯盟事務總長ドラモンド氏に對して左の四項より成る新國家成立通告を打電すると共に、新京（長春）、奉天、ハルビン、滿洲里に駐在する右十一ヶ國代表者たる總領事、領事に對して、それ／＼右通告の寫を手交した。

- (一) 滿洲國が新たに成立せること
- (二) 滿洲國は國際法並に國際慣例に照し誠意を以て國際關係の處理にあたること
- (三) 中華民國と諸外國との間に締結せる條約、協約、協定などに基く權利義務は國際法、國際慣例に照しかつ滿洲國の地的關係を考慮して一切の權利義務を繼承すること
- (四) 門戸開放、機會均等主義を採用すること



滿洲國の國旗は日本の日の丸國旗と同じく方形で、上圖の如く五色旗で、四分の一を赤、青、白、黒とし四分の三を黄とし、其の寸法は縦五横七の割合によるものである。

因に、五色は滿洲國在住民族の主位を爲す漢、滿、蒙、日、鮮の五族を意味するものであるといふ。

滿洲國の語源に就て

滿蒙新國家が其國號を「滿洲國」と決定するまでには、相當協議研究を重ね、「大同國」、「大中國」、「滿蒙自由國」、「滿蒙自治國」、「明光國」等種々の候補名稱もあつたが、結局「滿洲國」と率直に呼稱する事に確定を見たのであつた。而して此の滿洲といふ文字の由來に就ては、概要左の文獻に依つたものであると云ふ。

乾隆四十二年八月十九日上諭に「我朝肇興時、舊稱滿珠所屬曰珠甲後改稱滿珠而漢字相沿爲滿洲とあり、大祖實錄には「布庫里雅順居長白山東俄漢惠之野俄榮里城國號曰滿洲、是爲滿洲開基之始」と記され、また開國方略および東華錄卷一にも同様の事が載つて居る。

政治、軍事

政府組織法

第一章 臨時執政

- 第一條 臨時執政は滿洲國を統治す
- 第二條 臨時執政は滿洲國を代表す
- 第三條 臨時執政は全人民に對し責任を負ふ
- 第四條 臨時執政は立法院の翼賛により立法權を行ふ
- 第五條 臨時執政は國務院を統督して行政權を行ふ

滿蒙新國家は別項「滿洲國の成立」に於て詳細敘述したる如く大同元年（昭和七年）三月一日を以て完全に其の成立を告げ、同月九日其建國式を舉行し、其翌十日を以てワシントン九國條約關係國及び獨逸、露西亞の十一ヶ國に對して新國家成立を通告した。此の事實に見て全く滿洲國は民國支那政府より離脱した獨立の一國家と云ふべく、依て本欄に收むる政治は之を滿洲國に於て新に發表せられたる政制を記載することとする。

第六條 臨時執政は法律により法院をして司法権を行はしむ

第七條 臨時執政は公共の安寧福利を維持増進しまたは法律を執行するため命令を發しまたは發せしむ、但し命令をもつて法律を變更するを得ず

第八條 臨時執政は公共を維持しまたは非常の災害を防遏するため立法院を招集することを得ざる場合には參議府の同意を得て法律と同一の効力ある緊急命令を發布することを得、但しその命令は次の會期において立法院に報告すべし

第九條 臨時執政は官制を改め官吏を任命しその俸給を定む、但し本法その他の法律により特に定められたるものはこの限りにあらず

第十條 臨時執政は宣戰、講和および條約締結權を有す

第十一條 臨時執政は陸海軍を統率す

第十二條 臨時執政は大赦特赦減刑及び復権を命ず

第十三條 參議府は參議をもつて組織す

第十四條 參議府は左の事項につき臨時執政の諮詢を待つてその意見を提出する(一)法律(二)命令(三)豫算(四)列國との交渉條約約束並に臨時執政の名においてなす對外宣言(五)重要な官吏の任免(六)その他重要な國務

第十五條 參議府は重要な國務に關し臨時執政に意見を提出す

第十六條 立法院の組織は別に法律の定むるところによる

第十七條 凡て法律案および豫算案は立法院の翼賛を経るを要す

第十八條 立法院は國務に關し國務院に建議することを得

第十九條 立法院は人民の請願を受理することを得

第二十條 立法院は毎年これを召集し當會の會期は一月とす但し必要がある場合にはこれを延長することを得

第二十一條 立法院は總議員三分の一以上出席するにあらざれば開會することを得ず

第二十二條 立法院の議事は出席議員の過半数をもつてこれを決す、可否同數なる時は議長の決するところによる

第二十三條 立法院の會議はこれを公開す、但し國務院の要求または立法院の決議により秘密會とすることを得

第二十四條 立法院の議決せる法律案および豫算案は臨時執政これを裁可し公布施行せしむ、立法院法律案または豫算案を否決せる時は臨時執政理由を示してこれを再議に付しなほ改めざる時は參議府に諮りその可否を採決す

第二十五條 立法院議員は院内における言論および票決に關し院外において責任を負ふことなし

第二十六條 國務院は臨時執政の命をうけ諸般の行政を掌理す

第二十七條 國務院は民政、外交、軍政、財務、實業、交通、司法の各部を置く

第二十八條 國務院に國務總理各部總長を置く

第二十九條 國務總理および各部總長は何時たりとも立法院會議に出席しおよび發言することを得、但し表決に加はることを得ず

第三十條 法律命令および國務に關する教書は國務總理これに副署す

第五節 監察院

第三十一條 監察院は監察および審計を行ふ監察院の組織および職務に關しては法律を以てこれを定む

第三十二條 監察院に監察官及び審計官を置く

第三十三條 監察官及び審計官は刑事裁判若しくは懲戒處分によるの外その職を免ぜられることなし、またその意思に反して停職、轉官および減俸さるることなし

第六節 人權保障條例

(永久憲法制定前の約法なり)

全人民の信任により滿洲國の統治を行ふ執政は戰時若しくは非常事態を除く外左記の各項に準據して、人民の自由及び權利を保障し、並に義務を完ふすべきことを全人民に對して誓約す

一、滿洲國の人民は身體の自由を侵害せらるることなし、公の權力による制限は法律の定むる所に據る

二、滿洲國の人民は財産權を侵害せらるることなし、公益上必要な制限に法律の定むる所に據る

三、滿洲國の人民は種族宗教の如何を問はず、總て國家の平等なる保護を受く

四、滿洲國の人民は法律の定むる所に據り國又は地方團體の義務に參加せる權利を有す

- 三、滿洲國の人民は種族宗教の如何を問はず、總て國家の平等なる保護を受く
- 四、滿洲國の人民は法律の定むる所に據り國又は地方團體の義務に参加せる權利を有す
- 五、滿洲國の人民は法令の定むる所に據り等しく官公吏に任ぜらるゝ權利を有し、其の爲名譽職に就任するの義務を負ふ
- 六、滿洲國の人民は法令の定むる手續きに隨ひ請願を爲すことを得
- 七、滿洲國の人民は法律に定めたる法官の裁判を受ける權利を有す
- 八、滿洲國の人民は行政官署の違法處分に依り權利を侵害せられたる場合に於て法律の定むる所に從ひ救済を請求する事を得
- 九、滿洲國の人民は法令に據るに非ざれば如何なる名義に於ても課税徵發を命ぜらる事なし
- 一〇、滿洲國の人民は公益に反せざる限り共同の權利により其の經濟上の利益を保護増進する事を得
- 一一、滿洲國の人民は高利、暴利其の他凡ゆる不當なる經濟的壓迫より保護せらる
- 一二、滿洲國の人民は等しく國又は地方團體の公費による各種の施設を享用する權利を有す

版 圖

奉天、黒龍江、吉林、熱河四省、東蒙古、呼倫貝爾、東省特別區三區（興安省）

因に大同元年三月二十八日興安省設置を決定す

省 長
 東部分省長
 南部分省長
 北部分省長

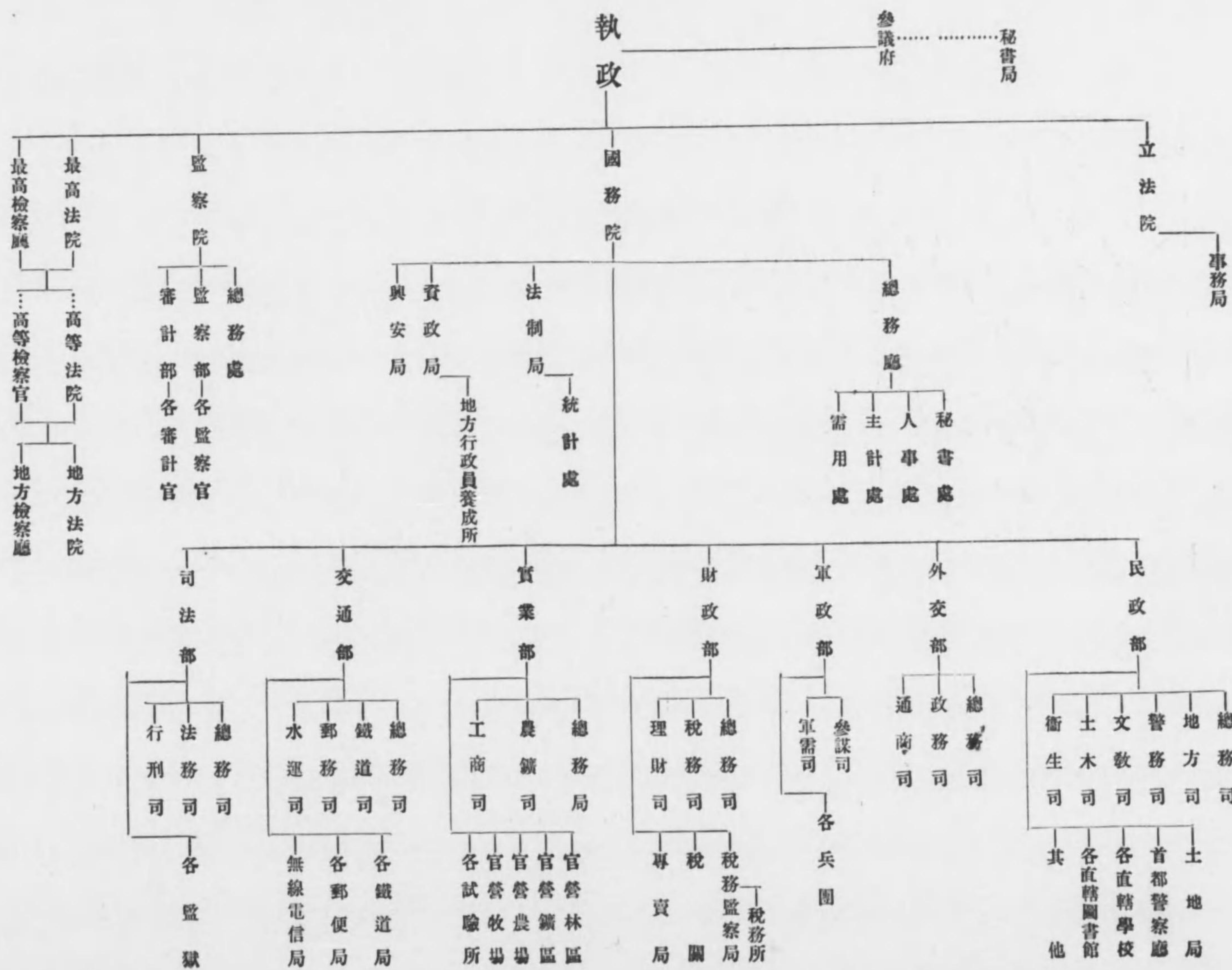
齊 王
 額 勒 春
 業 喜 順
 凌 海 王

滿洲國の版圖

左に參照便宜の爲め、新滿洲國の有する版圖領域地圖を掲ぐ



滿洲國政府組織表



滿洲國政府の首腦部

國務院次長
 郵
 宰
 新
 民政部次長
 菰
 康

滿洲國政府の首脳部

國務院總長
民政部總長
軍政部總長
外交部總長
財政部總長
實業部總長
交通部總長
司法部總長
監察院長
立法院長
軍政部長
財政部長

鄭 孝 晉 民政部長
戚 式 毅 參議院議長
馬 占 山 同 副議長
謝 介 石 同 議員
熙 洽 同 議員
張 燕 卿 同 議員
丁 鑑 修 同 議員
馮 漢 清 奉天省長
于 沖 漢 吉林省長
趙 欣 伯 黑龍江省長
王 靜 伯 熱河省長
孫 共 昌 興省省長

張 景 惠 康
湯 玉 景
張 海 玉
貴 發 玉
羅 金 玉
袁 式 毅
戚 洽 毅
馬 占 山
湯 玉 麟
齊 王 麟

在滿蒙日本領事館

哈爾濱總領事館
吉林總領事館
間島總領事館
琿春分館
百草溝分館
馬子街分館
頭道溝分館
奉天總領事館
同 通化分館
同 新民府分館
滿洲里領事館

總領事 大橋 忠一
總領事 石射 猪太郎
總領事 岡田 兼一
主任 毛利 此吉
主任 田中 繁三
主任 田中 繁三
主任 松原 久義
主任 林 久治郎
主任 興 津 良郎
主任 土屋 波平
事務代理 豐原 幸夫

齊々哈爾濱領事館
長春領事館
農安分館
安東領事館
鐵嶺領事館
洮鹿分館
海龍分館
鄭家屯領事館
遼陽領事館
牛莊領事館
赤峰領事館

領事 清水 八百一
領事 田代 重德
事務取扱 水野 長作
領事 米澤 菊二
領事代理 石塚 邦器
事務取扱 齋藤 孫治
主任 松 浦 興
領事 六和 久義
領事代理 山崎 恒四郎
領事 荒川 充雄
事務代理 牟田 哲二

滿蒙に於ける日本の軍事

●關東軍司令部● 以前は關東都督府内に陸軍部があつて都督は陸軍大中将を以て親補され、滿洲に於ける我民政及軍政の長官であつたが、大正八年四月都督制が廢せられて、關東廳及關東軍司令部が新たに設置せられ、軍政と民政とは獨立するに至つた。關東軍司令官は陸軍大中将を以て親補し、天皇に直屬し關東州及び南滿洲に在る帝國陸軍諸部隊を統率し、且つ關東州の防備及び南滿洲に在る鐵道線路の保護に任じて居る。軍司令部内には參謀部、副官部、兵器部、經理部、軍醫部、獸醫部、法務部がある。

軍司令部所在地 旅順

軍司令官 參謀長

中將 本 庄 繁
少將 三 宅 光 治

●駐劄師團● 師團司令部は遼陽に在つて長春、公主嶺、鐵嶺、奉天、遼陽、海城、旅順等に其兵力を分置して居る。此等の部隊は其の作戰上の任務と教育の便益とを考慮し概ね聯隊毎に集結せられて居る。尙駐劄師團は二年毎に内地師團と交代する事になつて居る。

●獨立守備隊● 獨立守備隊は明治三十年七月南滿鐵道守備の爲め豫備役の者を以て六箇大隊編成せられ、普蘭店長春間、及び奉天安東間、鐵道沿線各地に分屯し、専ら鐵道の警備並びに電線保護の任に當り、後四十二年四月獨立守備隊司令部を編成され、司令部を公主嶺に置き、全守備隊（六箇大隊）を統轄せしめた。大正五年六月豫備役制を廢して現役制に改め、同十二年三月軍備縮少の結果二箇大隊を撤退したので守備隊は四箇大隊となつたが、昭和四年四月十五日陸軍平時編制の改定に伴ひ再び二箇大隊を増設し、現在では六箇大隊となつた。其の配置は司令部を公

主領に置き軍隊は南滿鐵道沿線（關東州外）各要地に分割配置せられ、直接鐵道警備に任じて居る。

司令官 中 將 森 連

|| 旅順要塞司令部 || 司令官は關東軍司令官に隸し要塞の防禦計畫を擔任し、要塞備付の兵器々具材料及防禦營造物を管理し、軍需品の整備に任ずる。

|| 關東憲兵隊 || 本部を旅順に置き其の各分隊、分遣所（後、分遣所を分遣隊に改む）は鐵道沿線各地（分隊は旅順、大連、遼陽、奉天、四平街、長春、安東、分遣隊は大石橋、營口、海城、撫順、開原、鐵嶺、鞍山、公主嶺、連山關）に分駐し、軍司令官の指揮を受け主として軍事警察事務に服して居るが、尙關東長官の指揮を受け一般の行政司法の警察事務にも服して居る。

|| 衛戍病院 || 所在地陸軍部隊の患者を收容治療し、衛生材料を保管する所で、軍人軍屬の旅行途中發病したるものも亦收容治療することが出来る。滿洲に於ては本院を旅順、遼陽、鐵嶺に置き、分院を大連、柳樹屯、大石橋、海城、鞍山、奉天、公主嶺、長春、安東、連山關の各地に設けて在る。

|| 衛戍刑務所 || 軍法會議所在地に設く、滿洲では旅順に設置されて居る。

|| 海軍防備 || 日露戦役の際旅順開城と共に鎮守府が設定せられたが、大正三年四月一日鎮守府を廢して要港部に改め更に大正十一年十二月一日要港部を撤退し、防備隊のみ存置せらるゝ事となり大正十四年四月一日限り防備隊も撤退した。現今では單に駐在武官及び無線電信所を常置するのみであるが、第二遣外艦隊の警備區域内に在るため、絶へず該艦隊所屬の艦艇が碇泊して居る。

地勢、面積、人口

滿蒙の境域と其地勢

滿蒙とは滿洲、蒙古を合せた略稱であるも、茲に稱する滿蒙とは總ての滿蒙を指すのではなく、滿洲即ち舊東三省及び東部内蒙古の一部を合した所謂東北四省を稱するので、東北四省とは奉天、吉林、黑龍江、熱河の四省である。

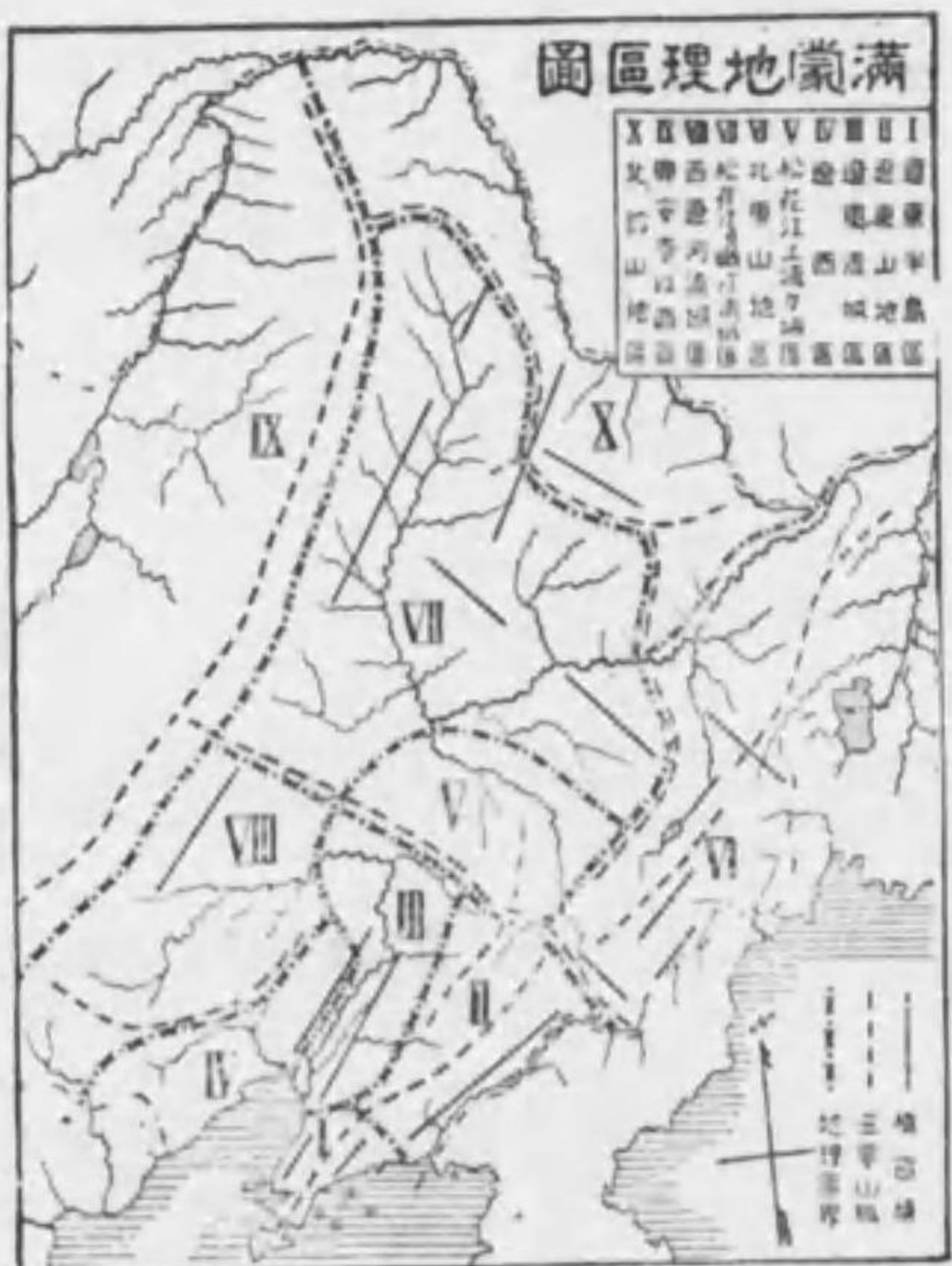
滿洲と蒙古とは其境界が明瞭ではないが、現在の滿洲の西の大部分が蒙古の地域に屬し、其地域は滿洲に編入されたもので、即ち今の熱河省である此地域は將來滿洲化の可能性を有するのであるから滿洲に編入されたのは極めて適當である。

滿蒙は、西は蒙古及び支那本土に、東北は露領西比利亞に、南は朝鮮及び黄海とに接して居る。東經百十七度より百三十五度二十分に及び北緯度は北緯三十八度四十五分（金州半島の南端）から五十三度三十分（黑龍江沿岸）に亘つて居る。緯度に於ては我が岩手縣乃至北海道と等しく、又歐洲大陸の南半と同一である。又大連と同緯度の地としては秋田、平壤、天津、アテネ、リスボン、桑港等であり、長春と同緯度の地としては、旭川、浦里斯德、馬耳寒、市耳古、ボストン等である。

地勢は大體に於て之れを二大別される、一は西部及び北部なる遼河、松花江流域に屬する平原部と、他は東部より南部に亘る山岳地である。而して其の中央部は地勢最も高く、略ぼ南北に兩分されて居る。南方の傾斜は長白山脈を起點として、遼東及び朝鮮南部に向ひ、北方の傾斜は大部分黑龍江に向つて延びて居る。

滿洲は山岳に富み、長大なる河川に潤ひ、廣大なる平野が到るところに在る。即ち東には長白山脈、西には陰山山脈及び大興安嶺、北には小興安嶺がある。而して廣大なる平野は、南方渤海に向つて展開されて居る。然かも滿洲には高山に乏しく僅に長白山脈中の白頭山が二千七百四十餘米で、其の他は何れも十米内外である。

河川の大なるものは、黑龍江及びその支流である松花江、嫩江、烏蘇里江、豆滿江、鴨綠江、遼河等である。是等の滿洲の大水系は廣袤七萬五千方里の滿蒙の地域を環流し、農耕の灌溉舟筏の利便を恵み、人文の發達に對して多大の寄與をなして居る。更に此他に湖沼の存在し其の湖



沼中には鹽湖と稱するものあり食用天然鹽を産するものがある。

大平原地方は、前記の河流に沿ふて展開し、其の主要なるものは、松花江及遼河流域、通背、齊々哈爾一帶及び興凱湖畔の平原等である。滿洲の平原は北部滿洲に於て五分の三以上を占め特に黒龍江の北部より起つて滿洲の中央部へ亘る平原は最も廣大である。更に南滿洲の遼河流域、東部の伊通河流域、北部の嫩江流域より蒙古平原へかけて、萬里の沃野が展開されてゐる。東部蒙古の一部の原野は沙漠性を帯びて居る。

滿蒙の氣候

滿蒙は其の地形が概して山地高原、又は廣漠たる平原であつて、海洋に面する部分が少く、南の一部沿海地帯と雖も海流の影響が弱く、境域の北は西比利亞の原野に、西は蒙古の高原に接するので、其れ等の影響を受けて、自ら大陸的の酷烈な氣候となるのは言ふまでもないのである。其の特徵は夏と冬の氣温の較差が極めて大で、冬期の寒威猛烈なるに對して夏期は亦頗る暑く、其の中間の季節である春と秋とが極めて短いことである。

斯くの如き氣候に特質を有して居ることは、主として滿蒙に近接せる四隣に於ける氣壓の配置關係によるもので、即ち冬期は概して北西の蒙古高原方面に高氣壓を生じ時としては七八〇耗以上に昇ることがある。此場合には南支那又は東支那海方面に低氣壓を生ずるのが常で斯る状態が毎年凡そ十月下旬頃から翌年の四月上旬頃まで續き、此の期間は概して低濕乾燥の北西風が吹き、殊に十二、一、二、の三箇月は高低兩氣壓部の傾度が頗る大となるから寒さが最も酷しく、遼河、鴨綠江、松花江等の結氷期は略ぼ此の期間と一致し、重い貨物を積んだ車馬が自由に河上を往來することが出来、南部地方を除いては海面まで結氷し、大連灣の如きも輕微な流水があり、其の防波堤内には薄氷を見ることがある。

然るに四月中旬以後になると、氣壓の配置が轉換して蒙古高原方面に低氣壓、南支那方面に高氣壓が発生し易く、濕氣を帯びた南風又は南東風が吹き、氣温は高まり温度も亦大となり、降水量も増加し、草木が急に發芽繁茂して花を開くのである。八月中旬となると、氣温稍々低下し、九月に入ると既に冷涼を覺える、次で同月の下旬には北滿地方にては早くも霜を結び、十月以後に再び冬期の氣候の特徵を示すのである。

又一日中の變化を見るに晝夜の氣温較差が大であることも、大陸的氣候の一特徴である。尙寒波と濕波との轉換が稍々規則正しく、殊に冬期に於ては凡そ一週間に於ける所謂三寒四濕の變化を生ずるのも、高低兩氣壓部位の交替轉換に起因するに外ならない。

降水量は一般に少量で、平均して全年六〇〇耗内外であるから、日本内地の同緯度の地方に比べて二分の一乃至三分の一に過ぎない、一年中では七、八、九の三ヶ月が最も多く、此期間には全量の六〇乃至七〇%を降らし就中八月を最多とし、二月を最少とする。

其他、風速が平均して内地よりも大なること、暴風日数の多きこと、結霜降雨が早く來り遅くまで續くこと、流氷、結氷の期間が長いこと、雨期は日本内地の雨期よりも一ヶ月後れること、春の三、四、五月の頃蒙古高原方面からの西風によつて細塵が盛んに吹き送られ、所謂黃塵萬丈、天日爲めに暗し」を文字通りに現出することが多いことなど、是等は何れも滿蒙氣候の特色といふべきである。

面積及び人口

滿蒙の面積は約七萬五千方里と言はれて居る、尤も支那の行政機關が不備である爲め、正確な數字を得ることは不可能であるが、最近の調査によると、東北四省の各面積は左の如くである。

| | |
|------------------------------------------|-------------|
| 奉天省 | 一一、八六九方里 |
| 吉林省 | 一五、五八〇方里 |
| 黑龍江省 | 三七、七七五方里 |
| 熱河省 | 一〇、一六八方里 |
| 已上を日本の總面積(朝鮮等の他の領土を含む)に比較すると一、七倍に相當する。 | |
| 而して其の人口は三千三百六十九萬七千人であつて、之れを省別すると左の如くである。 | |
| 奉天省 | 一四、九八八、五六〇人 |
| 吉林省 | 九、〇七五、六三〇人 |
| 黑龍江省 | 五、一三三、七三〇人 |
| 熱河省 | 四、五〇〇、〇〇〇人 |

右の内、熱河を除く三省の人口を、東三省の總面積に比すると、奉天省は一方里につき一千二百四十三人、吉林省は五百二十三人、黑龍江省は百三十六人を有する事となる。更に之れを三省の總面積に對比するに一方里の平均人口数は四百三十六人となる。

因に滿蒙在住者の大部分は支那人であつて、之に次ぐものは朝鮮である。已上の人口を日本の總人口に比すると、三割七分に相當する。

人口の分布

滿蒙に於ける人口分布の状態を見るに、北滿洲よりも南滿洲に密である。殊に奉天省の南部地方及び關東州等に密度を加へ居るは、是れ氣候が比較的良好であつて、且つ文化經濟が進んでゐることに原因するは言ふまでもない事である。而て鐵道殊に南滿洲鐵道、北寧鐵道、奉海鐵道、吉長鐵道、東支鐵道の各沿線、遼河、松花江等の可航區域の沿岸等に密集してゐるのは主として交通の關係により、又大豆を始め農産物の大なる地方に比較的密度の高いことは、此の地域の主産業と、人口分布とが大體において一致することを物語るものである。

(挿入滿蒙人口分布圖參照)



土着住民の人類別

滿洲の土着住民は總數三千三百内外と言はれて居るが、其の人類はツングース、蒙古及び支那の三種類である。而して右の内、ツングース人中には、滿洲人、ダウール、オロチヨン、マネーグル、ピラル、ゴリト、朝鮮人等を含み、蒙古人種には、ブリヤード、ケプチン、オーロイト人を含んで居る。けれども是等三種の中、支那人が最大多數を占め、全體の六割以上に及ぶものと見られて居る。

滿洲に於ける戰蹟一覽

| (戰蹟) | (所在驛名) |
|----------|--------|
| 大連忠靈塔 | 大連 |
| 乃木將軍駐營地 | 周水子 |
| 伏見宮殿下駐營地 | 同 |
| 伏見宮殿下駐營地 | 夏家河子 |
| 白玉山納骨祠 | 旅順 |
| 南利寺 | 金州 |
| 大石橋 | 得利寺 |
| 營口防營紀念 | 營口 |
| 岫巖 | 海城 |
| 遼陽會戰第二軍 | 首陽山 |
| 遼陽會戰第四軍 | 遼陽 |
| 黑溝臺 | 同 |
| 遼陽納骨祠 | 同 |
| 總司令部駐營地 | 同 |
| 遼陽會戰第一軍 | 同 |
| 沙河會戰第四軍 | 同 |
| 沙河會戰第二軍 | 同 |
| 戰役紀念 | 奉天 |

奉天會戰第二軍 同
 奉天會戰第三軍 同

| | |
|----------|------|
| 奉天會戰第二軍 | 同 |
| 奉天會戰第三軍 | 同 |
| 奉天會戰第四軍 | 同 |
| 奉天會戰第一軍 | 吳家屯 |
| 奉天會戰第一軍 | 桃千戶屯 |
| 奉天會戰第一軍 | 石橋子 |
| 沙河會戰第一軍 | 本溪湖 |
| 橋頭 | 橋頭 |
| 檜林子 | 同 |
| 宮ノ原 | 連山關 |
| 摩天嶺 | 蛤蟆塔 |
| 鴨綠江 | 安東 |
| 鴨綠江 | 同 |
| 安東納骨祠 | 撫順 |
| 奉天會戰鴨綠江軍 | 昌圖 |
| 最終陣地 | 泉頭 |
| 休戰訂約地 | |

經濟

滿洲の貿易狀況

滿洲貿易の始めて開放されたのは、今より七十五年前、即ち一千八百五十八年に於ける英支條約所謂愛琿條約の成立されてからである。然し其後數十年間、滿洲の貿易は一向に振はなかつたが、日露戦争の結果日本によつて滿洲の國土は安住の地として資源が開發され、千九百〇七年に大連の開港と前後して安東、大東溝、滿洲里、三姓、ハルビン、綏芬河、愛琿、琿春、龍井村等が引き續いて開放されたので、滿洲の外國貿易は茲に前途有望の基礎を築き上げたのであつた。斯くして其の貿易額は年々益々増大し、非常なる急速の發達を示して今日に及んだものである。

|| 税關及び三大港 || 現今滿洲の税關所在地は大連、牛莊、安東、ハルビン、愛琿、龍井村、琿春等で、安東税關は大東溝を含有し、ハルビン税關は滿洲里、綏芬河を管轄して居る。滿洲物資の吞吐港としては大連、牛莊、安東の三大港で所謂南滿の三港と稱せられて居る。北滿物資の吞吐港としては滿洲以外の浦鹽が其の重要港とされて居る。上記七箇所の海關に就て其の貿易額を見るに、大連は全滿洲貿易額の六〇%以上であつて最も重要な地位を占めて居る。之に次いで牛莊、安東の兩港で、此の兩港は大體同様の状態を示して居る。次いでハルビンである。愛琿、龍井村、琿春等に至つては何れも極めて少額にて、全滿洲貿易額の一%にも達しない程である。

|| 對滿貿易に於る日本の優勢 || 滿洲の重要貿易國として、何れの國が最も取引が多いかと言へば、言ふまでもなく日本内地との取引が其の第一位を占めて殆んど滿洲貿易全部の半に達して居る。日本に次いで露西亞である。左に最近各國の對滿貿易表を掲ぐ。

國別對滿貿易表 (單位海關千兩)

| 國 | 滿洲へ輸出 | 百分率 | 滿洲より輸入 | 百分率 |
|----|----------|------|----------|------|
| 日本 | 一一、〇四〇、九 | 三九、六 | 一五、八三三、二 | 四〇、六 |
| 露國 | 一、五七七、二 | 五、六 | 五、〇七九、五 | 一二、九 |
| 米國 | 二、〇七二、九 | 六、九 | 六九、九、〇 | 一、八 |
| 英國 | 一、〇四八、四 | 三、五 | 一、〇三八、五 | 二、六 |

而して日滿貿易の貨物の内容は如何であるかと言ふに左の如くである。

| 滿洲より | | 滿洲へ | |
|------|--------|------|--------|
| 大豆類 | 二九、五九二 | 綿織物 | 三〇、三三二 |
| 高粱 | 一、九三一 | 綿絲類 | 二、三二一 |
| 豆 | 二八、八九一 | 麥粉 | 二、七一三 |
| 石炭 | 一六、一六〇 | 砂糖 | 四、〇八二 |
| 皮革 | 二、一八八 | 酒類 | 二、六六二 |
| 藥子 | 二、一二〇 | 藥類 | 三、二一八 |
| 鐵 | 六、五七〇 | 鐵銅 | 七、〇九七 |
| 榨蠶絲 | 二、一一九 | 電氣材料 | 三、四〇二 |
| | | 紙類 | 三、四三二 |

因に、他國が滿洲より輸入する主なるものは豆類であるも、日本は全滿洲の九八%の鐵、五八%の石炭を輸入する點は頗る注意に値ひするものである。

日本全貿易に對する日支貿易の%は
日本より 二四% 日本へ 一八%
日支貿易に對する日滿貿易の%は
日本より 三五% 日本へ 五六%

であつて日支、日滿貿易の關係は次の如くである。

原料品の産出は………滿洲
加工製造は………日本
消費地は………支那本土

是に依るも日本の滿洲に對する期待の大なるものあるを知らるゝのである。

重要な輸移出品 滿洲の重要な輸移出品は左表の如くである。

| 品名 | 數量 | 價 | | 割合 |
|---------|--------|---------|--------|----|
| | | 實數 | 格 | |
| 大豆 | 三一、五九四 | 一四、二五六 | 二九、一% | |
| 其他豆類 | 二、一八六 | 九、六八一 | 二、五% | |
| 高粱 | 二、三五九 | 六、三九三 | 一、六% | |
| 粟 | 四、〇九二 | 二四、三六五 | 六、一% | |
| 種子 | 二、七九八 | 一七、四四六 | 四、四% | |
| 豆油 | 二五、一三〇 | 六、一三五 | 一、六% | |
| 豆粕 | 二、二二九 | 二六、五〇九 | 六、七% | |
| 榨蠶絲 | 一五、六一九 | 九、四一五 | 二、四% | |
| 石炭及コークス | 四、三八九 | 三七、五八八 | 九、六% | |
| 鐵及同製品 | 三、七九二 | 八、五二六 | 二、二% | |
| 其他 | 三、七九二 | 七二、五五四 | 一八、五% | |
| 合計 | | 三九二、八七四 | 一〇〇、〇% | |

備考、數量單位のピク(擔)は支那の百斤で、我が一六、一二八貫餘に相當する。

三港の貿易近況 昭和五年度に於ける南滿三港の貿易に就て見るに、大連は衰退し、安東及び牛莊は躍進した。大連は逐年増加の趨勢にあつたが五年度に於ては逆轉し、輸移入額は前年に比し一割一分三厘減の一八、二八四萬海關兩、輸移出額は前年に比し二割六厘減の二四、〇〇四萬海關兩、輸移出入總額は前年に比し約一割七分減の四二、二八八萬海關兩であつた。しかも輸移出減少の度合が甚だしかつた爲め、出超額は前年に比し約四千萬海關兩減の五七、二〇萬海關兩であつた。而て之が原因は輸入に於て安東陸境減稅廢止が連絡運賃の選減に依つて期待程に綿絲布の大連通過が行はれなかつた事、更に奥地行の貨物が營口に陸上げせられ、支那鐵道に依つて運送された爲に、綿絲、綿布小麦粉等が激減した事に依つてゐる。輸出に於ても歐洲筋の買氣薄のため大豆、高粱、玉蜀黍、粟等の農産物及び石炭の減少等に觸されて全體の減少を見たが、此

の間に在つて豆油および豆粕の増加は注目すべきである。前者は大豆輸出の停頓に原因し、後者は大豆及び銀安により内地農村の買氣を刺戟した事に起因してゐる。次に安東に就いて見るに、輸移入額は支那品に就て三五五萬海關兩を増加したるに拘らず、外國品(主として日本品)に於て

の間に在つて豆油および豆粕の増加は注目すべきである。前者は大豆輸出の停頓に原因し、後者は大豆及び銀安により内地農村の買氣を刺戟した事に起因してゐる。次に安東に就いて見るに、輸移入額は支那品に就て三五五萬海關兩を増加したるに拘らず、外國品（主として日本品）に於ては綿絲布、セメント、水産物、燐寸、砂糖等重要輸入品の減少を招き、約二〇萬海關兩を減少し差引五六五萬海關兩の減少を來たしてゐる。之に反して輸移出に於ては豆粕及び榨蠶が僅かに減少を示してゐる他、粟、大豆、高粱、等の穀物及び其他輸移出品の多くは増加を呈し、全體に於て約九六四萬海關兩の増加となつてゐる。斯くて總額に於て三一二萬海關兩の膨脹を示し、出超額は八七六萬海關兩を來たし、従前の状態に轉じた、更に牛莊に就て見るに、輸移入額五、七七七萬海關兩、輸移出額四、六一三萬海關兩、輸移出入總額一〇、三九一萬海關兩、入超額一、一六四萬海關兩で、輸移出入共に増加を見せ、總額に於て約一、七〇〇萬海關兩の著増である。輸移出に於ては豆粕其他二三の減少を見たる他大豆、高粱、豆油、鉄鐵、石炭等何れも増加を示してゐるが、之等は採算の關係上大連よりも營口積出を撰んだのに原因してゐる。又輸移入に於ては砂糖及び石油を除けば外國品は一般に減少を見せてゐるが、支那品は綿絲布、麥粉等が増加し、總額に於て一億萬海關兩を突破するの大増額を呈するに至つた。

之を要するに、昭和五年に於ける南滿洲三港の貿易は、安東の好調、牛莊の昂騰があつたに拘らず、大連に於て八、五〇〇萬海關兩の慘落に逢つた爲、全體的には六千四百萬海關兩の減少であつた。然し乍ら此の間にあつて、支那側の鐵道政策が牛莊に大いなる効果を以つて反映し、その貿易額は安東をよく凌駕し、更に大連にも急激にして且つ其大なる影響を與へたことは注目すべきことである。

滿洲に於ける各國の投資

滿洲に於ける各國の投資状態に就ては、之れを一昨昭和五年度末の調査に見るに、依然として日本は其の筆頭の地位を占め、之に次いで露國である。左に各國の投資額並に其の事業別を示す。

| 國別 | 投資額 | 百分率 | 主要投資事業別 |
|-------|------------|------|---------|
| 日本 | 一四・六、八四〇、五 | 七三、二 | 鐵道、金融 |
| 露國 | 四・六、五〇一、五 | 二二、五 | 鐵道、工業 |
| 米國 | 三、九五九、〇 | 一、九 | 商工業 |
| 英國 | 二、六四〇、〇 | 一、三 | 鐵道 |
| 佛國 | 二、一〇八、六 | 一、〇 | 鐵道 |
| 瑞典、丁抹 | 一〇〇、七 | 〇、一 | 商工業 |

(一九三〇年末)

右の表によつて見るも、滿洲に對する投資は日本及び露國が斷然他の諸國を擯んで居つて、滿洲とは特殊關係を有することを窺ひ知らるゝのである。

一九三一年の日本公稱投資總額は十七億餘であつて、逐年投資増加の傾向を示して居る。而して日本投資の事業別内容は左の通りである。

| 事業 | 投資額 |
|-----|---------------|
| 運輸 | 八二二、三〇三、九九九 |
| 商業 | 一一七、七五二、九八七 |
| 金融 | 二〇四、三三八、八二六 |
| 農林業 | 二三、三一〇、八二二 |
| 其他 | 五一、九一三、一四七 |
| 合計 | 一、四六八、四〇五、八三一 |

|| 各國の鐵道勢力關係 || 滿洲に於ける各國の鐵道勢力關係は現在に於て日本の關係は合計二、三四七軒にして其線名は左の如くである。

| 鐵道線名 | 軒数 | 鐵道線名 | 軒数 |
|-----------------|-------|--------|-----|
| 滿鐵本枝線 | 一、一二三 | 金福線 | 一〇二 |
| 吉長線 | 一二七 | 四洮線 | 四二六 |
| 洮昂線 | 二二四 | 溪城線(輕) | 二四 |
| 天圖線(輕) | 一一一 | | |
| 支那關係は合計一、五三〇軒にて | | | |
| 滿海線 | 三二六 | 吉海線 | 一八三 |
| 呼海伊 | 二二一 | 齊克線 | 二五五 |

| | | | |
|---------------|-------|--------|----|
| 沈宋線 | 八四 | 鶴立線 | 五六 |
| 齊昂線(輕) | 二九 | 開農線(輕) | 六四 |
| 奉山線 | 三一二 | | |
| 露國關係は一、七九〇杆にて | | | |
| 東支線 | 一、七二七 | 穆稜線 | 六三 |

英國關係は五六二杆の奉山線にて。交通網の分布状態により日本投資の交通網に見ても、滿洲に於ける日本が特殊の經濟地位に在ることが容易に窺はれるのである。

|| 滿蒙に鐵道概況 || 滿蒙に於ける鐵道は南滿鐵道を始め合計十九にして六千七百七十八キロメートルである。左に其の起工、竣工、資本等に就て其の概況一覽表を掲ぐ。

滿蒙鐵道概況一覽表

| 鐵道名 | 區 | 起工年月 | 竣工年月 | キロメートル數 | 性質 | 資本 |
|-------|--------------------------|-------|-------|---------|--------|-------------|
| 南滿洲鐵道 | 長春、大連其他支線 | 明四〇・五 | 明四四・一 | 一、一〇八 | 日本經營 | 四四〇、〇〇〇千圓 |
| 東支鐵道 | 滿洲里、ボグラニー、チナヤール、ハルビン、宣城子 | 明三一・五 | 明三四・一 | 一、七二六 | 露支合辦 | 五、〇〇〇千ルーブル |
| 北支鐵道 | 北京、奉天、遼寧 | 明一〇・〇 | 明四〇・〇 | 八七五 | 英國借款官辦 | 一一一、三四一、千ドル |
| 四長鐵道 | 四平、街、洗、遼、南 | 大五四・〇 | 大一一・二 | 四三七 | 日本借款官辦 | 三七、〇〇〇千圓 |
| 吉長鐵道 | 長春、吉林、林 | 明四二・〇 | 大一一・〇 | 一二七 | 日本借款官辦 | 六、五〇〇千圓 |
| 洗昂鐵道 | 洗、昂、南、昂、々、溪 | 大一一・三 | 大一一・七 | 二二四 | 日本借款官辦 | 一、二〇〇千圓 |
| 金福鐵道 | 金、州、城、子、曠 | 大一一・五 | 昭二・九 | 一〇二 | 日支合辦 | 四、〇〇〇千圓 |
| 奉天鐵道 | 奉、天、海、龍 | 大一一・七 | 昭二・九 | 三一九 | 支那官有 | 二〇、〇〇〇千圓 |
| 呼海鐵道 | 呼、海、龍 | 大一一・五 | 昭二・〇 | 二二一 | 支那官商合辦 | 一〇、〇〇〇千圓 |
| 吉海鐵道 | 吉、林、海、龍 | 昭二・五 | 昭四・八 | 一八三 | 支那官辦 | 不詳 |
| 吉敦鐵道 | 吉、林、敦、化 | 大一一・六 | 昭三・〇 | 二二〇 | 日本借款官辦 | 二四、〇〇〇千圓 |
| 齊克鐵道 | 昂、々、溪、克、山、鎮 | 昭三・六 | 昭三・〇 | 二二一 | 支那官辦 | 不詳 |
| 洗宋鐵道 | 洗、安、宋、倫 | 昭四・八 | 昭四・八 | 八四 | 支那官辦 | 不詳 |
| 穆稜鐵道 | 小、城、子、梨、樹、溝 | 大一一・三 | 大一一・三 | 六三 | 露支合辦 | 三、〇〇〇千圓 |
| 鶴立崗鐵道 | 蓮、花、泡、興、山、鎮 | 大一一・三 | 大一一・二 | 五六 | 支那官商合辦 | 不詳 |
| 溪城鐵道 | 太、子、河、牛、心、臺 | 大一一・〇 | 大一一・二 | 二四 | 日支合辦 | 五七〇千圓 |
| 開豐鐵道 | 開、原、西、豐 | 大一一・四 | 大一一・五 | 六三 | 日支商辦 | 三、六四三、千圓 |
| 天圖鐵道 | 圖、們、江、岸、老、頭、溝 | 大一一・八 | 大一一・〇 | 一一一 | 日支合辦 | 三、三〇〇、千圓 |
| 齊昂鐵道 | 昂、々、溪、チ、チ、ハ、ル | 明四二・〇 | 明四三・〇 | 二九 | 支那官商合辦 | 不詳 |
| 合計 | | | | 六、一七八 | | |

商工業概況

滿洲に於ける商工業は、其の國土が急激なる發達を示したるだけに、鐵道沿線地は、商工業ともに概して新式の組織を有しつゝあるも、鐵道に遠ざかり居る地方に在りては、今尚ほ依然たる舊態を脱せず、傳統的に古き慣習を墨守して居るのである。滿洲の商業地として條約その他に依つて開放された市場は左の各地である。

| | | | | |
|-----|-----|----|-----|-----|
| 牛莊 | 奉天省 | 安東 | 奉天省 | 遼陽 |
| 鳳凰城 | 新民屯 | 鐵嶺 | 通江口 | 法庫門 |

吉林省

吉林 新京(長春)(附寬城子) 哈爾濱 寧古塔 三姓
 綏芬河 龍井村 局子街 頭道溝 百草溝

黑龍江省

齊々哈爾 海拉爾 琿 琿 滿洲里

而して是等市場に於ける主なる商品は、穀類その他の原産品若しくは粗生産品であつて、特に大豆、及びその加工品は世界的商品化し、滿洲に於ける運輸、倉庫、金融其他各種の經濟機關は、之れを中心として施設經營せられ居る實狀である。その他の商品としては綿絲布、砂糖、煙草、石油等である。

|| 商工會議所及實業機關 || 關東州及び鐵道附屬地に於ける商工會議所は現在、大連、奉天、鐵嶺、長春、營口、安東、哈爾濱の七ヶ所に在り、其内、口を除きて他の六ヶ所は何れも民法の規定によつて社團法人である。關東廳は此等の會議所に對して年々經費の一部を補助し、其の實績の見るべきものがある。其他商工會議所の設置なき、鐵道の沿線附屬地には、略ぼ是れに類似する機關がある。昭和六年八月現在に於ける是等の機關所在地を擧ぐると、

鞍山實業協會、遼陽實業會、撫順實業協會、開原實業會、四平街市民協會、公主嶺商工會、旅順商工會、本溪湖實業會、吉林商工會等である。又、外人の商業會議所としては大連及營口に英國商業會議所ある外、ハルビンには佛、獨、米、英及び露の五商業會議所がある。尙最近米國は奉天に國際商業會議所を組織せんとして各國の商業會議所に參加を勧誘してゐるとの事である。

|| 各種の組合 || 滿洲に於ける各種組合事業は近時資本的に、又企業的に漸次發達しつつあるが、此の内滿鐵社員消費組合及び滿洲輸入組合を除くの外は資金の需給生産の施設、原料製品並びに生活必需品の供給制度に於て未だ大なる活動を爲すに至らない。組合として主なるものは滿洲輸入組合、大連連領商店で、前者は昭和二年の末奉天に創立され、現在では全滿十七主要都市に其成立を見て居る。因に昭和六年五月末現在に於ける出資積立金は二百六萬圓に達し、現在の組合員數は一千三百十六名である。後者は合資會社組織で大連市の中央常盤橋畔に所在し、組織は代表社員一名、常務執行社員三名、無限責任社員九名と有限責任社員八十二名とを以て組織され、社員は各自各一戸の店舗を營業し他は貸店舗として借家人に營業せしめて居る。連領商店の店舗數は百八十五軒、營業種別は八十七種である。

|| 發達せる滿洲の工業 || 滿洲の工業は天與の物資と豊富なる燃料と、低廉な勞力利用とに因つて、短年月の間に異常なる發展を爲し、其の生産額に於て始政當時の約三十倍を示し、滿洲全體に於ける日支人の工業投資は三億圓を超過して居ると言はれて居る。而して新式の工業は鐵道沿線に集注し、製油、製粉、醸造の三大主要工業を始めとし、製鐵、製材、炸薬製絲、セメント、鑄造、鐵工業、皮革、製紙、織物、石鹼、硝子、耐久煉瓦製造、電氣、瓦斯、紡績、板硝子業、破安製造工業、油母頁岩工業の如き世界的工業も興り、曹達灰工業會社並びに製鋼會社設立計畫ある等將來多大の期待をかけられて居るのである。左に滿洲工業の主なるもの二三について記す。

|| 油房業 || 油房業即ち油脂工業である。是は大豆から豆粕及び豆油を製造する工業で、滿洲に於ける斯業の創始は今より約百年以前である。元來支那人は大豆を搾取して其油を食料に供する風習が古くから存在し、且つ食料や燈火用にも之を供しつゝあつたが、最近豆粕が肥料として日本内地の農業に利用されるに及び急激に其販路を擴張し更に豆油も食料以外に工業原料として用ひらるゝに至り益々發達し從來の油房業は面目を一新して多くは機械化するに至つた。然も搾油工業は今尙は油房(ユーファイ)と稱し其の事業の大部分は支那人によつて營まれて居る。左に油房の現勢を示す。

| 工場數 | 資本金 | 豆油 斤 | 豆 粕 |
|------|-----|------------|------------|
| 大 連 | 五九 | 二二、五二八、〇〇〇 | 二二、五七五、二三〇 |
| 營 口 | 二二 | 一、九二五、六〇〇 | 五、四五一、三二八 |
| 安 東 | 二六 | 八七一、五〇〇 | 四、一一四、〇八〇 |
| 哈爾濱 | 四〇 | 四、八九五、〇〇〇 | 一〇、九一六、四〇〇 |
| 北滿沿線 | 二八 | 一、九五〇、〇〇〇 | 三、四七〇、〇〇〇 |
| 南滿沿線 | 二九七 | 九、一二三、五〇〇 | 七、〇七三、七〇五 |
| 計 | 四七二 | 四一、二九三、六〇〇 | 五三、六〇〇、七四三 |

|| 纖維工業 || 炸豆餅は滿洲物産中最も重要な地位を占め、現在の炸豆餅は大豆に次ぐ滿洲輸出品の一で世界に重きを爲して居る、殊に歐洲

大戦後、歐米に於ける絹織の需要増加し、我農業者中斯業に従事するもの甚出し、爲めに滿洲榨蠶界は之に刺激せられて著しき發達を示した、之に伴ふて産蠶量も一年平均八十數億粒の多きに上り價格一千數百萬海關兩に及ぶ。而して其の主なる輸出先は日本で、本邦に於ける絹織機業地福井、岐阜、京都は其大部分を滿洲榨蠶絹の供給を仰ぎて之を製織加工して日本絹織の名の下に於て歐洲及び滿洲等に輸出して居る。其の價格も近年二千萬圓に達し、既に世界商品となつて居る。

製麻業 近年産業交通の發達と資源の開發に伴れて、その運搬包装用としての麻袋を始め、帆布、繩類の需要は年々夥しいものがある。然しながらその生産は専ら舊來の手工業に依るものでその産額も需要を充たすに至らず之を海外に求めざるを得ない事情にあつた。滿洲は製品の需要に於て有望なるのみならず、氣候風土の關係上麻の栽培に適してゐる爲に、夙に製麻工業を有望視し遂に大正六年五月大連に滿洲製麻株式會社を同八年二月に奉天に奉天製麻株式會社の設立を見、主として麻袋の生産に努め、近年は兩社の麻袋生産量約四百萬枚に及んでゐるが、未だ滿洲の總消費高の約一割にも達してゐない。殊に奉天製麻會社は世界的麻袋の本家印度製麻のゲンピングと銀塊暴落の影響を蒙つて經營困難に陥り、昭和五年三月遂に工場を閉鎖するに至つたので、滿洲に於ては現在操業中のものは滿洲製麻株式會社の一社となつてしまつた。

毛織業 滿洲の地は到る處に羊毛を産し、その年産約二千五百萬斤と稱せらる。即ち産額より推して滿洲は一見毛織工業地として有望なるかに思はれるが、羊毛の品質極めて粗悪で、他の支那産（四川、山東、直隸、南部）物にさへ劣り、毛布、毛糸及びカーペットヤーンの原料とするに足るのみにして、羅紗類の原料には適しない現在原毛のまゝ主として天津より米國を始めとする諸外國へ輸出されてゐる状態で、滿洲に於ては毛織工業の見るべきものなく、奉天の滿蒙毛織株式會社がその唯一のものである。

製紙業 滿洲における製紙工業は日本同様機械力を用ふる近代的なものと、在來の手工流法に據る家内工業的なものと二者併用してゐる。而して新式機械製紙工業は邦人の經營に依る所で、新式製紙業は支那人の經營に係り所謂紙場として各地に散在してゐるが、専ら毛頭紙を製造するに過ぎない。滿洲における紙の生産は最近約二五〇萬圓で、其中約一九〇萬圓が前者に屬する鴨綠江及び滿洲の兩製紙會社により、残り約六〇萬圓が後者によつて生産される。滿洲は豊富な木材及び高梁稈を有してゐるので製紙業は有望な事業と考へられる。高梁稈を以てするバルブ製造は現在の處經濟的に缺陷があつて營利事業としての價値に乏しい。而してその販路は新式製紙の一部が山東、天津方面に向けられ、其の他は大部分滿洲各地における地方消費である。

産 業

最も有望な農業

滿洲國の領域は之れを別項面積の篇に於て述べし如く、滿蒙四省の總面積は七萬七千三百餘方里であつて、之を日本の面積四萬三千餘方里に比すると、約二倍に近いのである此の甚大なる地域を有する滿洲國の是より生ずる生産の將來有望にして、如何に經濟的價値を有するかも、想像し得られて頗る期待せらるゝのである。而して先づ最も有望なるは何と言つても農業でなければならぬ。滿洲に於ける最近耕地面積は日本内地の耕地面積の四倍以上に當り一五、〇八七、三四二陌を示して居る。今これを各省別にすると左の通りである。

| (省 名) | (既耕地) | (未耕地 單位陌) | (可耕地合計) |
|-------|------------|------------|------------|
| 奉天省 | 四、七二〇、七〇〇 | 一、六八八、九五〇 | 六、三九九、六五〇 |
| 吉林省 | 四、九四五、六七〇 | 五、九二一、〇七〇 | 一〇、八六六、七四〇 |
| 黑龍江省 | 三、八五一、九七〇 | 八、九七二、五〇〇 | 一二、八三四、四七〇 |
| 熱河省 | 一、五七九、〇〇二 | 一、七〇八、七七八 | 三、二八七、七八〇 |
| 合 計 | 一五、〇八七、三四二 | 一八、三〇一、二九八 | 三三、三八八、六四〇 |

尙ほ年々二十萬町歩以上を開墾されつゝある。

農産物の年産額 現在に於ける滿洲國の農産物の年産額は一億五千萬石と言はれて居る。即ち一千八百七十萬町であつて、其の生産内容を詳別すると左の通りである。

| (種 類) | (單 位 石) | (種 類) | (單 位 石) |
|-------|------------|-------|-----------|
| 大 豆 | 四〇、六八七、二六〇 | 其他の豆類 | 二、五六六、四三〇 |

| | | | |
|------|------------|----|-------------|
| 高粱 | 三七、三二九、三八〇 | 粟 | 二八、〇七九、四三〇 |
| 玉蜀黍 | 二二、〇八二、八八〇 | 小麦 | 一〇、二六九、九二〇 |
| 水稻 | 一、六〇六、七八〇 | 陸稻 | 一、八〇五、六九〇 |
| 其他雜穀 | 一七、九一六、七〇〇 | 合計 | 一五二、三四四、四七〇 |

已上一億五千萬石の農産物の内、住民の食料、飼料、種子等を僅かに控除した剩餘の六七百萬石は之れを海外に向つて輸移されるのである。而して己上の産額を南北滿洲別に見る時は南滿洲は八千萬石にして、北滿洲は六千萬石の割合を示して居る。

農産物の將來 滿洲の重要物産として大豆、粟、小麦等は産額多く、且つ肥沃なる未墾地を多く將來に有し居れるが、殊に北滿地方は土壤の關係上、最も是等の農作に適し今後北滿は南滿よりも大なる期待をかけられて居るのであつて、滿鐵會社が北滿農貨策も主として茲に基くものであると言はれて居る。

特産物の輸移出内容 日本大豆總消費量は七百八十萬石で、之に對する國內供給不足高は其半額に達して居る。小豆も九割は輸入に仰いでゐる状態である。即ち昭和五年度に於ける滿洲特産物の輸移出内容は左の如くである。

| | | | |
|-------|----------------|--------|------------------|
| 大豆 | 四、三二七、五三〇(七〇%) | 内譯(大豆) | 二、四七六、六五〇 |
| 其他の豆類 | 二七、三九〇(一九%) | 其他の穀類 | 一、八五〇、八八〇 |
| 合計 | 四、六一七、九二〇 | 合計 | 一、七五一、三四〇(二八・一%) |

| | | | |
|------|-----------|---------|---------|
| 大豆の價 | (大豆の價) | (豆油として) | (豆油として) |
| 日本 | 四九八、五七八 | 日本 | 一一二八 |
| 歐洲 | 一、四五二、三一一 | 歐洲 | 七六、四三七 |
| 米國 | 一四一 | 米國 | 四、四〇五 |
| 南洋 | 八九、八四九 | 南洋 | 二八 |
| 支那 | 四二七、五六四 | 支那 | 六三、五二二 |
| 朝鮮 | 八、二二一 | 朝鮮 | 五七八 |
| 合計 | 二、四七六、六六四 | 合計 | 一四五、一一八 |

右の内、六〇%は歐洲に於ける製油の原料となり、豆粕は歐洲に於ては殆んど家畜の飼料として消費せられ、豆油は人造バター石鹼用として使用せられ、南支にては全部其儘食料として供せられて居る。

各種特産物の狀況 滿洲特産物の日本に對する總輸入額は

| | | | |
|------|-----------|------|-----------|
| 大豆 | 四九八、五七八 | 包米 | 二六、二二五 |
| 高粱 | 一、一五二、六八五 | 穀類 | 二二、一七五 |
| 其他雜穀 | 九三、五五二 | 混合飼料 | 三二、七七八 |
| 合計 | 一、七二一、九五四 | 合計 | 二、〇〇三、二五一 |

豆粕は日本に於ける需要は主として肥料であるが、肥料としては確安に壓迫せられ、其の販路の上に減退を示してゐるが、家畜飼料、醬油原料としての豆粕の販路を開拓しつゝあるは、豆粕の利用更生上當然の事である。

大豆、豆粕以外のものにも、悉く飼料に關係を有せるものゝみで、其産額の大量なるに鑑み、養鶏、畜産業發展上その需要を喚起すべき素質を有し且つ濃厚飼料としての日本の消費高は百萬石の内七〇%を輸入に仰ぎ居る現状から日本に取り滿洲特産物の役割は極めて重要なものである。小麦は國際的食料品たる關係上、比較的需給關係が容易であり、現在では世界小麦産額は供給過剩であるが、地理的關係からして日本に取りては安價に供給せられる、現在日本に於ける小麦の需給状態は年平均消費額一千萬石にして不足五百萬石が、悉く、外國産によりて之れを充たして居る状態である。併し現在は滿洲小麦は入超で、供給は望み難いが、氣候土地の關係上、北滿に適せるに鑑み、北滿の開拓が漸次進行され、松花江、嫩江流域、廣漠極まりなき黒土地帯が耕されるに於ては、累年著しく増加し來ることは明らかで、小麦産の將來は相當の期待をかけるのである。

米は現在に於ては約三百五十萬石(水陸稻)であつて、地方消費にも足らず、四十五萬石の輸入を示して居るが、最も有望なる水田開墾地百萬

町地歩千五百萬石の生産能力に先づ着眼せねばならぬ。今後短日月間に於て開田せんとするは困難であるも、邦人移民として水稻栽培に重きを置

くは必然であるから、現在の主産奉天地方、瀋海沿線、開島地方、東支東部沿線、松花江下流は充分開拓の餘地がある。又遼河流域の沃野は、邦人の二百萬人位の移民は容に收容し得るであらうから、當局の成案如何によつては將來の滿洲米は大に刮目に價するものがある。高粱は日本の米と同様滿洲農民の主要食料である。其年産額は三千六百萬石で大豆の次位を占めて居る。高粱はカオリヤンと稱し、又紅糖と呼ばれて居る。滿洲人は殆んど高粱と豚とで生きて居ると言つてもよい位である。其種類は硬と糯とに大別する、硬には赤と白とがあり、其用途としては食料以外に滿洲の地酒として需要多き高粱酒を醸造し、又豆素麵の材料とし、稗は建築材料、燃料、アンペラ原料等に使用される、高粱が支那本土及び日本に輸出される額は百萬石乃至四百萬石で、日本では高粱は主として製造原料、澱粉原料として使用され年々需要を増加して居る。粟は高粱と同じく滿洲住民の主要食料品の一つであり、又釀造原料としても重要な地位を占めて居る、粟の稗は家畜の飼料に充てられる支那人は粟を精白したものを小米(シヤオミー)と稱し高粱よりも上等の食物として居る。是より造つた酒を黄酒と呼び、高粱酒よりも上等である。粟の反當りの收穫は一石六、七斗で滿洲全體の産額は三千八百萬石に達し、滿洲特産物の第三位を占めて居る。近年その過剰分を朝鮮の内地に輸出し朝鮮人は此の粟を食して高價な朝鮮米を内地に輸入しつゝあるといふ。玉蜀黍は南滿洲の南部に多く産し、是れも高粱や粟に亞いで滿洲農民の常食物であつて、黄包米、紅包米、老米穀の三種があり、食物以外に釀造用その他に用途廣く且つ其莖は燃料とし、其葉は家畜の飼料となる、年産額は千二百萬石で其内約六十萬石は支那及日本に輸出される。收穫は反當り二石内外であると言はれて居る。

滿洲の特用作物

棉 滿洲に於ける特用作物は種々あるが就中最も發達を期待されて居るものは棉である。滿洲の棉に就ては關東廳農事試験場の多年の研究によると其だ好成績を挙げ得る見込が充分であるといふ。我國の工業中主要なる地位を占めて居る紡績業の原料たる棉は之を北米合衆國や印度から輸入を仰いで居つて其の輸入額は六億圓といふ巨額に達して居るのであるから滿洲の棉が將來發達の見込が充分であるとすれば大いに期待し得らるゝのである。

大麻 奉天省、吉林省の山嶽地方に多く栽培されて居る。支那名稱を線麻といひ、其纖維で綱、繩又は布類を製し、屑は製紙原料として使用され、其實は小麻子と稱して製油原料となる。

苧麻(チンマ) 青麻(チンマ)といふ。滿洲では到る處の低溫の地方に生育する、草丈二三尺から一丈七八尺に及ぶ、用途は主とし綱、繩、布等の製造用である。近來輸入苧麻と共に麻袋の製造に混用され需要ますます増加を示して居る生産地方としては遼陽、金州、牛莊等が有名である。

蓖麻 滿洲では大麻と云ふ。遼河、通遼、洮南、彰武等の各縣に栽培されるが、又畑の周圍や路傍に植えられる場合も多い。其種子からは蓖麻子油を造る。近來航空機の減壓油として重要なもので現に我國では年々多量の輸入を爲して居る。

煙草 吉林省の南部及東部が最も有名な煙草の産地であるが、奉天省の北部及び東部でも相當に栽培されて居る。其の産額は我が内地の半以上に達する、品質は良好でない爲め近時滿鐵では米國種黄色煙草の有望なるに着眼して其の獎勵の結果地方に急激に發達した。

果實 滿洲に於ける果樹は、其種類が乏しく葡萄と梨は稍々良好であるが、其の産額は少い、けれども奉天以南では、日本朝鮮の果樹栽培に適する地が多く、氣候状態も良好であると言はれて居り且つ土質も果樹に適して居るから、近年前岳城以南の地方では、長足の進歩を遂げ、其の栽培面積は關東州のみでも四千三百町歩に達して居る。就中苹果が最も多く之に次いで梨である。其他の特用作物としては、花、落花生、瓜子、胡麻、亞麻、ホップ等がある。

豊富な産

滿洲に於ける經濟的價値として有望な農業に亞いで、豊富な且つ資源として重要性を有するものは礦産物である。就中その重なるものは鐵と石炭であつて、其の金屬礦物では、鐵、金、砂金、銅、鉛、硫化鐵等、非金屬では石炭、マグネサイト、ドロマイド、滑石、石棉、長石等十餘種を數へられる。是等の生産額に就て最近の數字を示すと左の如くである。

| (種 類) | | (年 産 額)單位 | |
|-------|---|------------|----------|
| 鐵 | 鐵 | 八三三、二二八、四〇 | 三、〇八八、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |
| 鐵 | 鐵 | 三、〇八八、〇〇 | 六〇九、〇〇 |

| | | | | | |
|------|---|---------------|------|---|------------|
| 石 | 炭 | 一〇、〇四〇、六五二、〇〇 | 煤 | 炭 | 四八五、三二一、〇〇 |
| 油母頁岩 | | 九八一、〇〇四、〇〇 | 原 | 油 | 四七、八一四、六〇 |
| 菱苦土鑛 | | 二九、〇一六、〇〇 | 耐火土鑛 | | 五三、六六四、〇〇 |

| | | | | | |
|------|---|---------------|------|---|------------|
| 石 | 炭 | 一〇、〇四〇、六五二、〇〇 | 骸 | 炭 | 四八五、三二一、〇〇 |
| 油母頁岩 | | 九八一、〇〇四、〇〇 | 原 | 油 | 四七、八一四、六〇 |
| 菱苦土鑛 | | 二九、〇一六、〇〇 | 耐火土鑛 | | 五三、六六四、〇〇 |
| 滑 | 石 | 二五、七二六、〇〇 | 苦灰石 | | 一一六、九二五、〇〇 |
| 石灰石 | | 九八八、四八九、〇〇 | | | |

(以下關東州内)

| | | | | | |
|---|---|--------|----|---|------------|
| 石 | 綿 | 一〇〇、〇〇 | 硅 | 石 | 二〇〇、〇〇〇、〇〇 |
| 長 | 石 | 五〇〇、〇〇 | 方解 | 石 | 一、〇〇〇、〇〇 |

鐵鑛の産出額は前表にも記す如く八十三萬噸以上に達して居るのである。其の鐵鑛の現出状態を左に略敘せんに、脈狀或は塊狀を成し、割合小區域に産する場合と、層狀を爲して大區域に産する場合とある。前者は埋藏量は少いが、品質は良く五〇%以上が普通である。後者は埋藏量は極めて豊富であるけれど品質は餘り良好でなく四〇%以下である。然し之を經濟的見地より見れば後者の方が必要なので、少々品質は悪くも澤山の埋藏量を有して居る方が好い。先づ後者に就て記せば。

産地は滿鐵本線の鞍山驛附近の一區域、即ち鞍山と、安奉線南攻驛附近の一區域即ち廟兒溝と、それから遼陽、橋頭間の一區域、即ち弓張嶺との三區域である。

鞍山地方の鐵鑛は可なり昔から利用されて居つて、舊坑や、鐵滓や、工具等の遺跡を認むることが出来る、然しそれは良鑛の部分だけであつて一般の貧鑛に就ては、水い間知られなかつたのである。貧鑛が普通の石塊と區別に困難で、鐵鑛と云ふよりも寧ろ鐵石といふ方が適當かも知れぬ現に露人が南滿洲鐵道を新らしく敷設する時、鐵山の中央を横切りながら、其の存在を認め得なかつた位で、邦人が始めて發見したのは明治四十一年八月、滿洲第一の温泉場である湯崗子の西方に鐵石山といふ地名のところがあるので、其れを視察してからである。大正五年には日支合辦の鞍山鐵鑛振興会社が組織されて、附近十五軒の半圓區域に包含される鑛區が確定された。現時は此の鑛石を鞍山製鐵所に供給して居る。鐵鑛床は櫻桃崗、王家堡子、關面山、大孤山、東西の兩鞍山等の鑛區に別れて居る。地質は前カムプリア紀の變質岩であつて、千枚岩、綠泥片岩、絹雲母片岩等の綠色を呈せる片岩類と、各種の硅石等を主とし、火成岩には三種の花崗岩と輝綠岩々脈がある。赤鐵石英片岩たる鑛床と、花崗岩との接觸部に近い處では富鐵帯があつて、磁鐵鑛の量が多くなつて居る。其多年の風化によつて、二次富鐵帯もあるが、是等の富鐵帯の分布は寧ろ少い。普通鑛石の品位は、平均三十五%から三十六%の含鐵量であるが、其の埋藏量は三億噸以上と稱せられて居る。現在その探掘の中心となつて居るのは、製鐵所の東南十二軒の大孤山鑛區で、そこは滿鐵線の支線が通じ有名な千山の奇觀の登山口として知られて居る。大孤山は山全體が鐵鑛とも云ふべきであつて探掘法は専ら液體酸素によつて爆發し、山頂から數段の鉢臺式に段を設けて切り碎すといふ探掘法であつて其の探掘能力は、一日に二千五百噸と稱せられて居る。

鞍山附近の貧鑛中、屢々介在して居つた五〇%乃至六〇%の所謂富鑛は當初より先づ探掘されて居たが、昨今は殆んど掘り盡され、又有つても地下深くになると探掘費が高まるので、實際上經濟的には困難になり、茲に貧鑛處理の問題が起つて來る。鞍山の貧鑛處理は要するに大孤山の赤鐵鑛原鑛を適當なる大きさに破碎し且つ等級して八臺の還元爐によつて磁鐵化せしめ、漸次に之を碎粉してホートル、ミルチニープミルを通過せしめて後、之を五十四臺の電磁石装置によつて、精鑛と尾鑛とに分離し、精鑛は更に之を燒結せしめて高爐に送るのである。茲に大孤山の四〇%未滿の貧鑛が五五%前後の脫水燒結鑛に變じ、而かも其費用は相當一回前後に過ぎないと云ふ事である。一ヶ年の處理量は八十萬噸である鞍山の製鐵爐は合計三基あつて、其内二つは同型で年二十萬噸の製鐵量を有し、其の最も主要な第三爐は最新式で容量も又大きく二十八萬噸の出鉄を見るのも遠い事ではないと言はれて居る。鞍山製鐵所の都合のよいことは、製鐵に必要である石炭は、其の産地たる撫順や本溪湖に遠くはなし、其他石灰岩耐火粘土などの必要な原料の産地も便利な所に在る。

廟兒溝の鐵鑛は安奉線南攻驛の東方五哩の所に在つて中日合辦本溪湖煤鐵公司の製鐵所の原料鑛石として、同公司の手に依つて探掘せられて居る。廟兒溝の外本溪湖附近の鐵鑛は子西溝、八盤嶺集馬集等の鐵鑛は可なり以前から探掘されて、所謂土法製鐵の行はれ來つた證據がある。其の最盛期は、乾隆乃至咸豐、同治年間で、光緒の初年頃から坑内の通氣及び排水等の操作が困難となり、併せて外國製品や山西省の製鐵業に壓迫を受け、遂に事業が中止されるに至つた。大倉組は明治三十八年の末に、本溪湖の炭山に着手し、續いて製鐵所を設け、日支合辦の煤鐵有限公司を成立せしめたのは明治四十四年十月であつた。地質は鞍山のそれと同様で、前カムプリア紀の片岩層の中に居る。鐵床は雲母片岩及び花崗片麻岩中に層狀を呈して居る。鑛質は含鐵分六〇%から六五%の富鑛で主として磁鐵鑛より成り層々黃鐵鑛を含有して居る。鑛量は山麓地並以上で三百萬噸と稱せられる。然し品位三五%内外の貧鑛は、數億噸と稱せられて居る。現在は専ら富鑛のみを坑道によつて探掘して居る。選鑛場は南攻驛附近にあつて皆て廟兒溝の貧鑛を團鑛爐で燒結する作業が行はれたが今は中止して居る。製鐵所は二〇哩距つた本溪湖にあつて、百五十噸容量の熔

鐵爐二基、二十噸の小煉鐵二基が其の主なるものである。原料は刷兒溝の磁鐵礦を用ひ、石灰岩や、石灰等は本溪湖のすぐ傍に極めて豊富に産出する昭和四年の富鐵の採掘量は略ぼ十四萬九千噸、同五年には十四萬一千噸である。副産物としては硫安、硫黃、磷炭、磷滓、セメント、煉瓦等が出る。鐵礦は前記鞍山及び刷兒溝の外に、弓張嶺、帯を始め、其他安奉沿線及び鴨綠江の東北沿岸關東州等に廣く分布し、其品位は概して必ずしも良好とは言はれないが、鐵量は實に豊富で、加ふるに製鐵に必要な石灰を始め、其他の耐火材料も亦極めて豊富であるから滿家の將來は必ずや製鐵事業に面目を改むる時機が到来するであらう。

『石炭』 滿家の礦産物中、石炭は其の産額に於ても又金額に於ても第一位に屬するもので、最近の統計によると一ヶ年間に一千萬噸以上及びんで居る。滿家の鐵道沿線に於ける重要な産地を舉ると、奉天の東方に撫順炭礦、其の南方には煙臺炭礦がある。安奉線沿線には本溪湖牛心臺の兩炭礦がある。其他支那側の鐵道たる瀋海鐵道の支線上に大挖嶺の炭礦長春と吉林と敦化の中間には蛟河炭礦がある。更に北方の東支沿線では穆稜炭礦、遙かに滿洲里附近にはジャライノール炭礦がある。奉天と山海關との間には、北票、新邱、八道溝等の炭礦がある。以上は有名なものゝみであるが、其他の群小なるものを加算すると實に百個以上の數に達するのである。

撫順炭礦は奉天省撫順縣に屬し奉天の東二十哩大連を距る二百七十哩の地點に位し渾河を隔て、撫順城と相對して居る。礦區面積は一千八百二十萬坪(長東西約四里幅南北約一里)で渾河に向つて平均約三十度の傾斜を爲し、炭層の厚さ平均約百三十尺(最厚四百二十尺)炭層中の夾雜物の厚さ二十尺を超へず含有炭量約十噸噸に上る概算である。政府から引續當時は一日六百三十八噸の出炭を見たに過ぎなかつたが、昭和五年度に於ては、一日に平均二萬一千七百七十噸、年額七百四萬二千五百七十七噸の出炭を見るに至つた。古城子、東ヶ關、楊柏嶺の各露天掘を始めとし、大山坑、東郷坑、老虎臺坑等の採炭、運炭、貯炭の各種設備の充實を計り増進計畫の重心を各露天掘に置きスキップ、エキスペーター、スチームシヨベル電氣シヨベル等の増設を斷行し、尙諸作業能率増進の爲め、各坑に亘つて漸次電化、機械化の計劃中であるが、古城子露天掘の大スキップ揚装置は愈々完成し、昭和六年十月十九日に之が試掘を行つた。因に昭和六年度の採炭數量は七百四十萬噸と言はれて居る。

煙臺炭礦は撫順炭礦の支礦として滿鐵會社の經營に係り、奉天省遼陽縣に屬し煙臺停車場の東方約九哩の地點に在る。東西約十三町南北約五十町、二層石炭紀に屬し埋藏炭量は約四千萬噸である。明治四十三年十月營業坑と爲し、従来の塊柱式炭法を長壁法に改むる準備として一部に之を實施研究中である。昭和五年後の出炭高は一日平均五百七十八噸で、年額は十七萬五千噸、其の半數は無煙炭であつて特種の需要を有して居る。

本溪湖炭礦は奉天省本溪湖縣に屬し安奉線本溪湖驛に隣接し、奉天より七十四哩、安東より百二十四哩の地點に在る本炭礦は日支合辦本溪湖煤鐵公司の經營に係り、地質時代は二層石炭紀に屬し撫順炭礦に亞ぐ大炭層である炭層面積は一千三百五十四萬坪、炭層は十七層あつて摺曲によつて膨縮常ならず採行炭層と雖も、局部的に採炭の困難な箇所がある埋藏量は一億餘噸である。炭質は半無煙炭であつて粘結性強く煉炭の原料に適するけれども揮發性に乏しい缺點がある。最近二年間の出炭量は、昭和四年五十二萬噸同五年五十八萬二千噸である。

『マグネサイト』 鐵、石灰以外の礦物も種々あるも、有用礦物として擧ぐべきは菱苦土礦である。マグネサイトは滿鐵本線大石橋驛から東北方に向ひ連續せる礦床であつて其埋藏量の豊富なる點に於ては世界に比類がないと言はれて居る。炭酸苦土より成れる礦物で昭和五年中の産額は約三萬噸である。其の大部分は八幡製鐵所に送られ製鐵製鋼用として是非とも必要なものである。其用途は煉鐵爐の内壁に用ふる煉瓦として使用されて居る近時は金屬マグネシウムを是より抽出する實驗が成功して居るから、是れが工業的工業の起り來ることも遠くは有るまいとの事である。

農業に伴ふ重要な畜産業

滿家に於ける畜産業は、農業に伴ふて頗る注目すべき重要なものである。東部内蒙古一帶を始めとし熱河省の大部分、奉天省の奥地、黒龍江省の大部分は、農業本位と云ふよりも、寧ろ牧畜を本業とするものが多い。従つて農家としては毎戸家畜を有して居るの家は殆んど無い。農家では三四頭の豚馬等を有し、牛、馬、騾等は役用とし、廢物利用によつて飼育し、其の排泄物を唯一の肥料となし、其の馴致同化せしむる技能は實に巧妙を極め、犁耕、鋤、中耕、培土、脱穀、調製等あらゆるものに畜力を利用して居る。農耕を營む難い地方の住民は遊牧的で家畜は其の財産であつて且つ生活上の唯一の資料である。

然るにも拘らず滿家の畜産界は、世界文化の影響を受けること甚だ薄く、今尙は原始的である、而かも滿家の畜産は其の林業と共に將來は有望の事業たることは普く認められ居るのである。昭和七年度の滿洲國に於ける家畜の概數は左の如くである。

| 奉天省 | 吉林省 | 黒龍江省 | 熱河省(推定) | 合計 |
|-----|---------|---------|-----------|-----------|
| 牛 | 五一六、六七〇 | 四二九、九五〇 | 六五八、六五〇 | 一、一二〇、〇〇〇 |
| 馬 | 六六九、二二〇 | 七三五、〇七〇 | 一、〇三三、七〇〇 | 八一〇、〇〇〇 |
| 騾 | 三二一、五二〇 | 二六九、二五〇 | 一五一、九二〇 | 七〇、〇〇〇 |
| | | | | 二、七二五、二七〇 |
| | | | | 三、二四七、九九〇 |
| | | | | 八二二、七〇〇 |

| | | | | | |
|----|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 羊 | 三四九、三三〇 | 八三、四一〇 | 四五、〇〇〇 | 一〇〇、〇〇〇 | 五七八、七四〇 |
| 猪 | 五一八、二〇〇 | 一八二、四三〇 | 一、九三九、九三〇 | 二、〇〇〇、〇〇〇 | 四、六四〇、五六〇 |
| 豚 | 三、四四四、〇三〇 | 二、二七三、七六〇 | 一、七八九、四〇〇 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 八、五〇七、一九〇 |
| 合計 | 五、八一八、九八〇 | 三、九七三、八七〇 | 五、六一九、六〇〇 | 五、一〇〇、〇〇〇 | 二〇、五一二、四五〇 |

馬 滿洲の地は山來、良駝の産地として知られて居る。其産馬は全部蒙古系であつて體高四尺二寸五分體重七十貫が平均である。體軀は矮小であるが各部の均勢整ひ良好である。體質極めて強健で粗末な飼料に甘んじ、粗放な管理に耐へ、且つ持久力に富み、乗用鞍用ともに使用し得られて居る。

牛 滿洲の牛は朝鮮系、山東系、滿洲系及び蒙古系のものであるが、前二者は其數少く、大部分は蒙古系及び滿洲系である。滿洲牛は吉林奉天二省に跨る滿洲東部及南部の山地に産し殊に奉天省の南半に多い。蒙古牛は東部内蒙古、呼倫貝爾及び奉天、吉林、黑龍江三省の西方舊蒙古地帯若くは其接壤地帯に産し滿洲に於て屠殺消費されるものよりも遙かに多い。支那人は力役の爲めに、蒙古人は乳を絞る爲めに飼養し肉は副産物として居る。蒙古の牛は後軀の發育不良であつて各種經濟的能力は劣るが堅忍且つ從順で、粗飼料管理に堪へ、又疾病に對する抵抗力が強い。體重は最大百四十貫普通八十貫位で、從つて肉量少く乳量も甚だ少くて居る。

騾 牝馬と牡驢の交配による雜種で、騾の體軀は南滿一帶のものは體高四尺三寸乃至四尺四寸のもの最も多く、長春地方の産は大駝の交配による爲め體高四尺六寸内外である。騾は耕作運搬に使用され、能く勞役に服し使役期間長く粗飼料小食にして粗管理に堪へ、價格は馬よりも高い。

驢 支那産の驢は大驢と小驢とに分けられるが滿洲産は小驢である。體高三尺より三尺三寸位、體重三十五貫前後、體質強健粗食に堪へ力量體軀に比し大なる爲め、農耕用並びに家内勞役及駄用として適當である。

綿羊及山羊 共に蒙古種であつて從來は肉用、毛皮用として飼育せられ羊毛及絨毛は副産物として取扱はれて居つた。綿羊の體量は牝が七貫乃至十貫、牡が最大十五貫位で脂肪毛を持つて居るのが特徴である。山羊は綿羊よりも小さい、其産毛量は甚だ少く、綿羊の毛量は一頭三封度を越えない。毛質不良の爲め從來我國では顧る者もなく大部分は米國へ敷物絨原料として輸出されて居る。山羊の絨毛は品質良好であるが産毛量は一封度餘に過ぎない。近時我邦毛織工業の發達に伴ひ日本向輸出を見るに至つたことは注目し値ひする。

豚 豚肉は支那人の最も重用する嗜好物である。農家は肥料と畜産收入を目的とし毎戸五頭乃至十頭を飼養して仔豚の生を計産り其糞尿を肥料とする。從つて其頭數は甚だ多い。豚の鬃毛は粗剛で長く、之を刷毛用として優良である爲め大部分大阪へ輸出せられて居る。

駱駝 駱駝は蒙古に産するのみである。多くは雙峰種で、體高は五尺五寸餘を普通とする。寒氣に抗する力強く、力役騎乘に適するため蒙古に於ける重要な旅行機關である。蒙古に於ける其頭數は約四千頭を算する。

滿洲の林業概況

滿洲に於ける森林地帯として其の主なるものは、松花江、牡丹江及び豆滿江の上流一帯、並びに鴨綠江右岸及び渾江上流の一圓地と、東支鐵道東部線に於ける小嶺西林河に至る地域、西部線に於ける布哈爾以西興安嶺山脈に屬する地域及び吉林三姓地方である。之等の森林面積は現在の處區々として一定しないが、滿鐵會社の調査によると三千萬町歩と言はれ、實に滿蒙總面積の三割四分を占め、其の見込立木蓄積量は一四、九九一、八〇八、五三〇石と計上されて居る。

鴨綠江及渾江の森林 此地帯は渾江より鴨綠江の水源に至る延長約百五十餘里の間である。此の内最も有望なる森林は大江（鴨綠江本流及右岸頭道溝より二十四道溝に至る各道溝の上流域である。而して朝見山下流域は主として潤葉樹林で、之に僅少な針葉樹を交へて居る。由來鴨綠江の森林は長白山脈の基部にあつて滿洲の東南隅に偏在し遠く南部の平野と隔絶せるため久しく原生の状態を維持して居る。鴨綠江各道溝に沿ふ部分に潤葉樹を主とする針潤混生林で、奥地に入るに従ひ潤葉樹混生の度を減じ江を距る數里の處では殆んど針葉樹の純林に近いのである。長白山脈の森林帯は樺松帯を缺き直に無立木地に接續して居るので散生地は殆んどナラ類、シナノキ、ドロノキ等の潤葉樹林で、タウシラバ、テウセンタウヒ及びテウセン松の如き針葉樹が點々と混生して居る。此の地域にて生育する樹木は薪炭材に供し得るものゝみで、一町歩の材積は平均十八石乃至三十六石である。

松花江流域地方 吉林縣以南の松花江上流々域の森林は、一部は長白山本派に一部は吉林哈達に連つて居る。其流域に亘る地は吉林省濛江、樟旬、額、穆奉天省安圖、撫松の二省五縣に跨つて居る。

豆滿江流域 豆滿江流域の森林は琿春河及び嘎呀河、豆滿江の支流一帯の地より老嶺嶺に至る廣大なる地域を占めて居る。樹種は鴨綠江

上流地方と殆んど大差なく伐採、材木の主なる市場は清津である。

牡丹江流域―牡丹江は其源を敦化縣牡丹嶺に發し敦化、額穆兩縣の諸流を合せて甯安縣に入り泊鏡の湖北端四家屯吊水瀨に於て一大瀑布をなし之より大江となり約四里にて東京城に達し更に北流して水源より約八十四邦里なる寧古塔に至つて居る。假りに是等敦化、額穆、甯安三縣内の諸川の流域を總稱して牡丹江流域と命名する。

已上、松花江、豆滿江、牡丹江の三流域の森林中、濛江縣の北部は大部分潤葉樹林で、唯だ南部地方に多少の針葉樹林を残して居る。尤も濛江縣の中央及び二道花河圖地方に到れば、南するに従ひ針葉樹の混生度を著しく増大し、更に樺甸、敦化、額穆の諸縣に到れば長廣才嶺、新開嶺及び牡丹嶺の北側に伐採を免れて居る最美林を有するが、其他の方面に至つては已に林相の惡變を來たして居る。

東支鐵道沿線地方―同鐵道の東部沿線地方の露前沿海州の境界に當る一驛ボクラニチナヤ(綏芬河)よりハルビンに至る鐵道兩側に位する森林であつて其地域は主として賓縣、同賓、甯安、額穆及び東蕃の五縣並に汪縣の東部即ち老爺嶺及び石頭太平等の諸山脈以東の地域に跨つて居る。同西部沿線の呼蘭、肇州、安達、龍江等、本沿線の大半を占むる地域は見渡す限り茫漠たる大草原である其だ西部沿線の森林は僅に布西呼倫の二縣によつて代表せらるゝのみである。是等の森林伐採權は多く露人によつて獲得されてゐる有様である。同鐵道東西兩部線の森林地帯は概して緩斜を爲し大半は廣茫限りなき原野である、そして東部沿線地方は西部地帯に比し老嶺、窩集嶺等長白山脈の連峯によつて其地勢稍錯雜して居る。樹種は東部沿線にあつては實に多種多様で喬木だけでも二十餘種を有する。而して其混生割合は針葉樹四十%乃至六十%潤葉樹六十%乃至四十%の間である。

大興安嶺の森林―大興安嶺森林は南は洮兒河流域並索岳爾濟山より起り東支西部線を挟み、北は黑龍江沿岸に至る大興安嶺の本支脈を蓋ふ森林にして龍江道の西半部及び呼倫貝爾特別區域の東部を占む想定面積一千四百萬町歩、立木蓄積量は實に五十六億石である。樹種は主にダフリカラマツ、及白樺にして其他は西比利亞赤松類ヤマナラシ、ハンノキ等である。

小興安嶺森林―小興安嶺は大興安嶺中の英吉里山より起り黑龍江支流呼瑪爾河並嫩江支流甘河を以て大興安嶺と隣接し、黑龍江に沿ふて東南に走り松花江本流に終つて居る。本地域内の森林は龍江道東半部、黑河道、綏蘭道に跨り森林想定面積一千萬町歩總立木蓄積量二十五億石と推定されて居る。樹種はダフリカ唐松、及白樺にして南部松花江に近き部分は朝鮮モシ、朝鮮タウヒ、朝鮮松、ニレ類、シネハリクルシ、ヤチダモシナキ等を有し其他他柳類、楡類、ハシノキ、ヤマナラシ等である。

前途を期待さるゝ水産業

滿洲は其土地の廣大なる割合に海岸線は比較的短く、且つ水深が淺いが黄海及渤海の兩海は各種の魚族に富んで居る。現に關東州を中心とする有用魚族の数は約三十種に達し、有力なる消費地を控へ、又沿線の便宜を得てゐる爲め、水産業の發達に就ては大に前途に期待を有せらるゝのである。沿海の漁業は地勢及び交通等の關係上、大體安東より莊河を経て靑子窩附近に至る沿岸及其公海。關東州より熊岳城附近に至る沿岸及其公海。殘餘の遼東灣に接する一帯に分ける事が出来る。此の内最も有望なるは關東州の沿岸漁業である。關東州を根據地とする漁場は黄海及渤海全部の公海であつて其内鮫魚圍場のみは日支協定により御海内に立入り漁業に従事する事が出来る。魚族の回游、棲息處多の狀況より見て現在の關東州を根據とする。漁業は漸く其第一步を踏み出したに過ぎない。漁具の改善、漁船の開拓と相俟て關東州の水産業は將來大に發展すべく殊に對支水産貿易に至つては前途益々多望なるものがある。

漁獲の成績―滿洲各方面に於ける漁獲成績は左の如くである。

| | | |
|---------------|------------|------------|
| 黄海岸(關東州沿岸を除く) | 四四四、〇〇〇貫 | 三五一、一五〇圓 |
| 渤海岸(同上) | 一、六一、一二〇貫 | 一、〇〇七、〇〇〇圓 |
| 關東州 | 九、六五七、一二二貫 | 四、二九七、一八〇圓 |
| 南滿河川 | 三二六、八四〇貫 | |
| 北滿河川 | 四、七五三、〇〇〇貫 | |

魚族の種類―右の如く漁獲は關東州を主とし河川漁業も頗る有望である。南滿の諸川では鴨綠江が漁場等も廣く魚族も又從て多い。漁場は河口から安東縣の上流八里の間が有名である。魚族の種類は。

鯉、鮭、白魚、鰱、鱸、鱒、鮒、鰻、鮎、鰻、等で春夏の候が最も多獲である。又遼河口では鯉、鰻、銀魚、鮭、會生魚、鱒、鮎等で、渾河口は鮎、鮎、鰻、鯉等が獲れる、北滿の諸川からは大量の川魚が漁れ、全滿洲及び露國、支那の各地に供給され極めて有望である。松

花江には

鮎、草根魚、鯉、粗鱈魚、鯽魚、鰻花魚、頭魚、鮭、鯰、

其他から種類がある。牡丹江には、粗鱈魚、懷子魚、鐵嶺河には鮭、鯉を産し、嫩江、呼蘭河等には鯉、鮎、鯽魚、草根魚を産する。

關東州沿海の漁業としては、黄海岸では安東縣、大東溝から莊河縣尖山子に至る約六十里の海岸で、海參、鱒、白魚、鱈等が漁獲されるが、其量は少く大抵は半農の漁人が之に従事して居る。渤海岸では關東州境から錦州府中に至る約百五十里の海岸で略ぼ前者と同様漁獲は頗る豊富である。

製 鹽 業 況

|| 關東州の製鹽 || 遼東半島は沿岸到るところ干潟地多く、且つ氣象の關係上天恵豊かなる製鹽地である。就中營口、蓋平及び復縣附近を始め、吾が關東州は最も古くから知られて居る。滿洲に始めて晒鹽業法の行はるゝに至つたのは同治元年、山東直隸地方民によつて蓋平管内二道溝地方に鹽田の創設を見、超へて同四年貔子窩地方に開設せられ、漸次遼東半島沿岸一帯に其開設を見、斯くして始めて遼東半島が天日製鹽地として著しく知らるゝに至つた。更に又關東州が我が施政下に置かるゝに及んで邦人鹽田の開設を見るに至り、茲に又新たな生面を開き今日見る如き世界屈指の一大天日製鹽地たるに至つたのである。

元來、關東州は降雨少く蒸發量旺盛なるが上に、大氣乾燥せるため、天日製鹽に適し、今や鹽田面積六、九九一、六四町歩、産額四一五、七七七、五六二斤の盛況を見、今後需要の如何によつては鹽田の擴張、生産の増加を圖り、鹽の一大供給地たるに至ることは極めて容易であり、且つ最も有利であることを認められて居る。

|| 主なる産鹽地 || 州内の主要産鹽地としては左の各地ある。

旅 順 管 内

雙島灣 營城子灣 楊樹溝

羊頭灣 旅 順 龍王塘

柏嵐子 盛家溝 山頭村

大 連 管 内

沙河口

金 州 管 内

董家溝 千島子

普 蘭 店 管 内

普蘭店(小山西、三官廟、晝兒房、馬虎島、長店堡)、五島、交流島、路陀島、鳳鳴島、西中島後三道灣、登沙河口

貔 子 窩 管 内

贊子河 夾心子 東老灘 碧流河

|| 關東州鹽の販路 || 關東州鹽産の主なる販路は日本内地及び朝鮮である。最近數年間に於る州鹽の輸移出状態を見るに、各製鹽業者は關東廳當局と協力して一意販路擴張に努力し、昭和四年新嘉坡方面へ試驗的の輸出を試み或は輸出奨励金を増額する等大に盡す所あつた。尙近年内地に於ける化學工業の急激なる發達は原料とする鹽の需要を増加し、又内地不良鹽田整理のため、州鹽需要漸次増加せんとする情勢に立ち至つたので旁々州鹽販路の前途は好轉し巨額の持越鹽も數年を出でずして消化されんとする状態にあると言はれて居る。

交通

滿蒙に於ける鐵道

滿洲に於ける鐵道は一千八百九十六年支那が官辦にて京奉鐵道（現今の北寧鐵道）を敷設したのが最初で、次で千八百九十八年に露國は東清鐵道即ち現在の東支鐵道の敷設工事を起し四年餘にて竣工した。其後日露戰爭の結果、寬城子以南の東清鐵道の讓渡を受けた日本は、明治四十年四月より南滿洲鐵道會社が之を經營する事となつたのである。次で安奉線の開通を見、其他の鐵道は逐年開通普及を見るに至り、現在滿蒙に於ける交通機關としては鐵道は其の首位を占めて居るのである。左に其の本線及び支線、聯絡線等に就て記す。

南滿州鐵道

連長線（滿鐵本線）

起點たる大連より終點なる長春に至る四百三十五哩八分及び安奉線を以て本鐵道の幹線とする。而して大連、長春間は急行十二時間、普通十八時間を要し、大連、奉天間は急行八時間、普通十時間を要して達する。

本線は遼東半島の山地を貫き遼河に並行して長白山脈の西縁に沿ふて大平原の中を走る。其の間、金洲、蓋平、海城、遼陽、瀋陽（奉天）鐵嶺、開原、長春等の古き諸城を繋ぎ沿線附屬地都市を興し、南滿の産業を開發して居る。

本線を金洲にて金福鐵道を連絡し、大石橋にて營口線を、蘇家屯にて安奉線を、渾河にて撫順線を岐出し、奉天に於て北寧、濟海の二鐵道に、開原に於て開豐鐵道に、四平街に於て四洮鐵道に、長春に於て吉長、東支の二鐵道に連絡する。

旅順支線

此線は周子水で滿洲本線の連長線から分岐して三十一哩、大連からは三十七哩である。列車は大連、旅順間を往復し、約一時間二十分を要する。此線は夏家河子から渤海沿岸を暫らく走る。

營口支線

此の線は大石橋から岐れて營口まで十三哩餘の線であつて、途中には停車場は無い。列車は遼河の冲積平野を走るのであるから流砂によつて成つた低地の地質の特相が認められる。

撫順支線

此の線は渾河から岐れて撫順まで二十七哩九分の線である。其の目的は石炭の搬送にある。撫順地方は有名なる大炭田を有すると共に、又渾河の水利にも恵まれて、夥しく水田が開かれて居る。滿洲に於ける水田地の中樞である。此線が石炭搬送の大目的の他に、又撫順米の產出荷に多大の便を與へて居る。

安奉線

安奉線は安東を起點として北行し奉天に至る百七十一哩の鐵道であつて、滿洲本線の分岐點なる蘇家屯から安東まで百六十一哩である。此線は元輕便鐵道でありしを後、現在の範軌式に改築したものである。日露交戦中、我第一軍の軍器糧秣を輸送する目的を以て一時的に輸送機關として軌間二呎六吋の輕便鐵道が敷設されたのであつて、明治三十七年八月から翌年の二月にかけて我陸軍の手によつて先づ安東下馬塘間を完成し、下馬塘、遼陽間の豫定線は戰局の進展につれて下馬塘、奉天間に變更せられ、同年十二月に至つて全線の開通を見た。戦後この軍用鐵道は永久的の平和交通機關となり、滿鐵會社が之を繼承して明治四十二年八月から四十四年十月に亘つて範軌に改築し、輕便鐵道時代には二晝夜を要したものが僅々六時間に短縮され、今日では世界的通路として多大の使命を帯びて居るのである。

金福鐵道

本鐵道は金福鐵道株式会社の經營に係り昭和二年十月開通を見たもので、滿鐵線金洲驛を起點として關東洲界城子驛に至る延長六十三哩の範軌鐵道である。關東洲内に於ける滿鐵線以外の唯一の鐵道で、此の開通の爲めに從來文化の遅れ勝ちなりし關東洲東海岸地方は、其富源漸次開發されつゝあるに至つた。

溪城鐵道

本鐵道は、安奉線の本溪湖に近き太子河驛を起點として牛心臺に至る本線九哩と、王官溝、紅臉溝、南河の各炭礦に至る三支線五哩、合計十四哩の輕便鐵道である。軌間は二呎六吋、本社は本溪湖に所在する。主として石炭を輸送し、貨物乗客の混合列車が一日四往復を爲してゐる。

北寧鐵道（京奉線）

本鐵道は元、京奉鐵道と稱したるもので、北平（北京）から奉天に通ずる支那交通部直轄の國有鐵道であつて、軌間四呎八吋半、關外線、本線二百六十二哩、各支線二百四哩、合計四百六十四哩に及んでゐる。本鐵道は滿洲と支那本土とを結ぶ唯一の聯鎖鐵道であつて、極東の交通幹線として極めて重要な地位を占めてゐる。

營口支線

胡家崗鋪と營口間、營口市街の對岸に在る。遼河を一日五往復の小蒸汽船にて市街と交通する。

朝陽支線

許家屯より北票に至る間の鐵道である。

山通支線

此線は一名打通線と呼ばれてゐる。京奉線の二驛たる打虎山から四兆線の終點なる通遼に至る百十六哩の鐵道で、支那側では之を京奉鐵路山通支線と稱して居る。

瀋海鐵道

元、奉海鐵道と稱したもので、奉天から海龍に至る幹線百四十五哩と、海龍、朝陽鎮間十哩、梅河口、西安間四十二哩の支線とより成つてゐる。軌間四呎八吋半、昭和二年九月開通、支那自國資本並技術によつて敷設された鐵道である。本鐵道は東山地方の沃野を貫通するもので、同地方の特産物輸送上大なる意義を持つ鐵道である。

朝陽鎮支線

瀋海鐵道の支線で瀋海と朝陽鎮との間は十軌である。

西安支線

是れも瀋海の支線である。

開豐鐵道

元、開拓鐵道と稱したもので、開原から西豊に至る四十哩、軌間一米の輕便鐵道である。開拓汽車会社の經營に係るもので大正十五年五月開通したものである。

四洮鐵道

本鐵道は四平街から洮南に至る百九十四哩の本線と、鄭家屯から通遼に至る七十一哩の支線とから成るもの。滿蒙五鐵道の内、日本の資本を借

入れて敷設すべき三鐵道の一で全線の開通を見たのは大正十三年である。沿線には大生産地を控へ、且つ洗昂鐵道と連絡して物資輸送上重要な線である。

鄭通支線

白市より通遼に至る間の線である。

吉昂鐵道

本線は洮南から昂々溪まで百四〇哩、瀋陽政府の管轄に係る鐵道で、大正十五年七月に開通したものである。本鐵道は蒙古の平原を走り、人跡稀に、變化なき索漠なる景觀に終始するが、一面には曠原に蒙古人が放牧する状態、或は野生の草花の群り咲けるなど大陸の風物に接するのである。本鐵道は洮南に於て四洮線と、昂々溪に於て齊克線とそれと聯絡する。

四洮鐵道

本線は長春から吉林に至る七〇九哩の支那國有鐵道で、大正元年十月開通を見、三十ヶ年その經理、營業を滿鐵に委任してゐる。滿鐵線の長春驛内に於て、場所も、時間も都合よく相連絡し吉林へは三時間半にて達し吉敦線と連絡する。本線は將來に於て吉會鐵道と結んで中部滿洲と裏日本との交通路なるべき第一歩となつてゐる。

輝吉鐵道 (吉海鐵道)

本鐵道は吉林より朝陽鎮に至る百十二哩の鐵道で、朝陽鎮に於て瀋海線と聯絡する。故に滿洲を縦行する三大並行線の一つと謂ふべきである。

吉敦鐵道

本線は吉林より敦化に至る二百十軒(約百三十哩)の標準軌道鐵道であつて、將來敦化より更に延長して吉林、會寧を結ばんとする吉會鐵道の一部を爲すものである。即ち東部滿洲と北朝鮮及び裏日本との交通上重要な使命を帯びてゐる。本鐵道の全線開通は昭和三年十月であつた。

天圖鐵道

本線は老頭溝から圖們江岸に至る六十九哩(内、局子街支線六哩)軌間二呎六吋、日支合辦の輕便鐵道で、滿洲最東部、所謂間島を貫いて朝鮮國境に達する鐵道である。

東支鐵道 (本線)

本鐵道は滿支共同管理の鐵道で、延長一千七十九哩、軌間五呎、滿洲里より綏芬河即ちボクラニチナヤ(國境)に至る本線と、ハルビンより長春に至る支線とから成つて居る。本鐵道は一千九百三年に全通し、歐露と極東とを結ぶ線として、又北滿洲の大動脈として頗る重要な線である。

東支鐵道南部線

東支鐵道の南部線は長春からハルビンに至るものである。

東支鐵道東部線

此の線は木柴廠から國境なる綏芬河に至るものである。

東支鐵道西部線

此の線は船場から滿洲里に至るものである。

呼海鐵道

本線はハルビンの對岸松浦から呼蘭、綏化を経て海倫に至る百三十二哩で軌幅四呎八吋半、呼海鐵路公司の經營に係る支那鐵道である。全線の開通を見たのは昭和三年十二月である。

齊克鐵道

本線は齊々哈爾から克山鎮に至る百三十三哩の鐵道であつて、本線は昂々溪に於て洗昂線と連絡する。

齊 克 鐵 道

本線は齊々哈爾濱から克山鎮に至る百三十三哩の鐵道であつて、本線は昂々溪に於て洗石線と連絡する。

水運及各港の狀況

滿洲に於ける最も重要な海港は、大連、營口、安東の三つである。此の他に旅順、大連溝、多爾島、葫蘆島等もあるも、是等は特殊の性質を帯びたもの、又未成港、若しくは規模の小なるものである。前記主要三港の中で歴史的滿洲最古の開港場は營口であるが、日露戦争後、大連港が開港され、次で安東の開埠を見たので、從來營口港に出入せる船舶も同港の港口が出入に不便であるため、漸次大連と、安東に其の繁榮を奪はるゝにいたつたのである。

大連港は施設、經營ともに滿鐵會社が之れに當り、港内の淺濠、築堤、岸壁設備等着々として完備し、隨つて出入船舶も亦逐年増加を示しつゝある。

次に滿洲の主なる河川を擧ぐると、遼河、鴨綠江、松花江、黑龍江等であるが、吉林港、松花江港、ハルン港の三河港は、近來奧地諸鐵道の發達に相俟ちて滿洲に於ける交通上の重要な系統を爲してゐる。

大 連 港

本港は遼東半島の東南大連灣に位置し、南三山、北三山の二島嶼との灣口を扼し、水深くして天然の良港を形成し、海上幾多の定期航路によりて東洋各港と連絡し、陸は南滿洲鐵道の起点となり、南北滿洲の沃野を経て、遠く歐洲及び浦鹽斯德に通じ、海陸連絡の要衝に當れる極東第一の自由貿易港である。

此の隆々たる大連港は、今を距る三十餘年前は海濱の一小部落に過ぎなかつた。更に是より先、萬延年間五福聯合艦隊が一時的占領した當時はヅキトリア灣として僅に記憶されて居つたが、後一千八百九十八年五月調印成て露支間の旅順、大連灣租借に關する條約によつて露國之を支那から租借し、グルニートの漁村地域を市街區と定め、遠大なる計畫の下に著々施設したが、工事半ばに日露戦争となり、其結果我軍の占領する處となり、明治三十八年二月大連港と命名したのである。次でポーツマス條約によりて日本が此租借權を繼承するに及んで、南滿洲鐵道株式會社の經營となり、其未成工事に對し適應の改善修築を施し、着々進捗を計りて遂に現今の進展を見るに至つたのである。

大連港の行政は關東廳に屬し、一般施設經營は滿鐵に於て之を擔任してゐる。埠頭事務所には庶務、營業、陸運、海運の四係を置き、更に第一埠頭、第二埠頭、第三埠頭及び大連、甘井子埠頭、吾妻驛を統轄し、日本人一千三百三十五人、支那人一千十五人の従業員と支那人夫一萬人内外を役し、鐵道及港灣並に其附屬事業に關する事項其他の總務事務を掌つてゐる。

旅 順 港

本港は關東半島の最南端に位し、歴史的な著名な滿洲唯一の不凍港である。併しながら商港としての價值には乏しく、現在にては大連港の補助港なるの觀がある。けれども完全なる不凍港で三面山を以て圍まれ、黄金山、老虎尾半島港口を扼し、水深大なる天然の良港ではあるが、港内に利用すべき沿水線多からず、海底軟かなるため泥土數十尺の深さに及んで居り、之が爲め護岸工事極めて困難視されてゐる。

本港は往時獅子口と稱され、明朝時代には南方移民の渡來するもの多く、船舶の來往頻繁を極め、又本港は水陸旅行の順路である關係からして旅順と名稱するに至つたものである。

安 東 港

本港は鴨綠江口を遡る二十五哩の左岸に在る。鴨綠江口を挟んで朝鮮と相對し、水陸交通の便ある爲め商業の中心地となつてゐる。本港は一千九百〇三年十月日米支通商關係擴張に關係する條約に於て商埠地として開放され千九百七年三月支那政府は港界を定めて開放し、其後日支官憲折衝の結果、安東の内港を三道浪頭迄延長し、更に外港を鴨綠江迄延長するに至つたが、港灣としての價值は餘り見るべきものがないと言はれて居る。

けれども開埠前の本港は僅に我克の出入を見るのみであつたが、開埠後は汽船の出入により商業頓に好況を示し、且つ明治四十四年十一月安奉線の開通と次いで鴨綠江鐵道の完成を見たので滿鮮聯絡が完備し、支那沿岸日本との商取引も年を逐ふて密接となり、本港の出入貿易額は頗る見るべきものあるに至つた。

本港に入港する定期汽船の多くは、大連汽船、朝鮮郵船、大阪商船、鴨綠江運輪、鴨綠輪船公司等の所屬汽船である。

營 口 港

本港は外人の所謂牛莊を稱する所であつて、遼河河口を遶ること約十四哩の左端に位置する河港である。牛莊港の開放を見たのは一千八百五十八年の天津條約に基いたものである。併し本港が開港場としての活動は千八百七十二年以後である。本港の港域は二區に分れ、一は汽船及西洋型帆船の碇泊區域とし、一は戎克の碇泊區域である。汽船碇泊區域は西老龍閣より正北に遼河を横斷してある線であり、東青堆子沙河口より正北に遼河を横斷した線内であつて其延長は約一萬七千呎、河幅平均二千五百呎であるが、海關の許可を得れば港外に於ても碇泊し得られる。戎克碇泊區域は汽船碇泊區域の下流から河北端に至る間である。

營口は河を港とするだけに、複雑な港區であり、河岸も頗る長い。埠頭は一帶の河岸であり、水深も平均三十尺を有する。下流には淺洲がある爲めに吃水十七呎以上の船は高潮に乗じて進む。河水退退すれば水運衰へ、河水氾濫すれば河床が變形する爲め、埠頭の建設は永久的に至難とされてゐる。且つ本港は毎年冬期の十一月下旬頃から翌年の三月に至る間は河水冷結して船舶の出入が不能となる。宛かも此期間は物資の輸送期であるのに此の缺點を見るのは本港の爲め頗る惜むべき事である。

大 東 溝

大東溝港は安東を距る西南陸路十二里餘、水路安東の下流約三十哩鴨綠江口に面して居つて、恰も安東港の外港の如き觀がある。本港は數千噸の船舶を停泊する事が出来るが、泥地であつて満潮の時は僅に小形の戎克を通じ得るに過ぎないから港灣價值には乏しい。従つて埠頭の設備や、繫船等の設備もない。汽船の投錨も亦不可能である。安東大孤山通ひの小汽船すら同港の沖合遙かに二哩の所に停泊する状態である。

遼 河

遼河は東遼河と西遼河との二流ある。東遼河は西安縣下から源を發し西遼河は興安嶺支脈の左端から發して居る。此の二流は三江口上流で相合して遼河の本流となり營口に出る迄三千八百支里、日本里數の六百五十里の長流であつて、舟行の便は現在河口から鄭家屯に及んで居る。而して其中流以下及び支流が南滿洲の平野地帯を貫流して開發に大なる恩恵を與へてゐる。其擁擁する面積は三十五萬方里に達してゐる。遼河は冬季四個月間は河水凍結して交通杜絶する缺點がある。加ふるに南滿鐵道の敷設を見るに至つて、遼河の水運上の價值は減せられ、露治時代には一萬餘隻の輸送船を有した同河の水運も今は民船三千餘隻の小數に減じて居る。

鴨 綠 江

本江は其水源を長白山の南麓に發し蜿々として二百餘里に亘る長流である。其水運は便宜上之れを五區に分けると(一)水源域(二)上流域(三)中流域(四)下流域(五)江口域である。そうして上流域には有名なる大森林地帯があつて、安東を中心市場とする鴨綠江材が現に東洋に於て重きを措かれて居るのは、全く本江の水運の賜物である。

安東より其上流各沿岸地方の發送貨物は何れも生活必需品であり、其消費料は相當多量であつて、本江の水路に依るものみにも、裕に三萬石以上に達するといふ。尤も本江には上流各地との聯結を取る爲め、鴨綠江運輪會社の船舶が朝鮮總督府の命令航路となつてゐる。

松 花 江

本江は滿洲に於ける大水脈であつて、其全長六百哩に及び、北滿の河運界に於ける堂々たる霸王の地位を占めて居る。源流は長白山脈に發し幾多の支流を合せて黒龍江に注ぐ。其南流が即ち松花江の本流である。本江は北滿に於ける發倉地帯を貫流してゐるに見ても、本江の水運狀況に依つて北滿物資の大勢を窺ふに足るのである。

本江の航行期は通常四月二十日から始まつて、十月下旬又は十一月月上旬に終る。其の航行期間は大約六ヶ月半乃至七ヶ月であつて、汽船及び舢舨は此期間に於て九回乃至十回、戎克は五回就役するのが常である。同江の結氷期は平均十一月十日で、解氷期は四月十五日である。同江の可航區域は吉林より黒龍江合流点まで八百三十一哩であるが貨客の最も輻輳するはハルビンより河口に至る區域である。併し夜の通行には本支流とも差支へがないがハルビンより下流は水深七尺以上である爲め航運は頗る股賑を極めて居る。但しハルビン吉林間は水深五尺以内であるから大船の航行は不可能である。

黒 龍 江

本江は其源流を額爾克納河及びシルカ河から發し流下するに従つて幾多の支流を合せ二千五百哩を流れて終に粗粒海峡に注ぐ。その中源流より鴨綠江河口に至る約二千二百六十六哩は、露支國境線を爲し、所謂北滿鐵路上の水路として大貢獻を爲してゐるものである。露支の可航距離は、約一

本江は其源流を額爾克納河及びシルカ河から發し流下するに従つて幾多の支流を合せ二千五百哩を流れて終に粗羅海峽に注ぐ。その中源流より烏蘇里河口に至る約二千二百十六哩は、露支國境線を爲し、所謂北滿開發上の水路として大貢獻を爲してゐるのである。現在の可航區域は、約一千一百里に達し、小蒸汽船は遼江して約七百里に通ずる。斯くの如く世界有数の大河であつて多少の淺深はあるが、概して水深甚だ大で能く千噸以上の船舶航行に耐へるが冬季は十月下旬から翌年五月中旬まで結氷する不便がある。

本江の解氷期は大凡四月中旬で、結氷期間は十月下旬又は十一月初旬である。冬季間に於ける汽船は堅水中泊地にあつて冬眠するのである。

嫩江

本江は水深淺く、汽船の航行は松花江の合流點から齊々哈爾附近までであつて、其他は戎克及び帆船を主とし、木材は流筏によつて居る。本江の航行期は五月上旬より十月下旬までである。

本江と齊々爾間の交通状態を記さんに、兩者の間は約三百六十支里であつて、二日の行程を要するが此の中齊々哈爾より六十支里は自動車の便により夫より二十支里は舟、夫より二百七十支里は自動車の便により嫩江に至る十支里は大車に依て居る。又本江と訥河間百二十支里は航行に二日を要し、本江と瑯璁間四百支里は大車にて三日の行程を要する。

現在の嫩江航路はハルビンより新城、大賚に至る約六百八十支里間であつて、其間の主なる停泊場は長春嶺、達戸、肇州、長城河、大賚新城等である。

洮兒河

洮兒河は興安嶺、索岳爾濟山の東麓から其源を發してゐる。本河は往々、河身に中洲を生じ之が爲め水流を分つ處がある。平時は河幅百米乃至三百米程で、水幅は二三十米乃至五六十米、水深は一米乃至二米を有するが、降雨の場合には何れも増大する。

呼蘭河

呼蘭河は小興安嶺より源を發し、諸方面を流れ過ぎて後に松花江の本流に合する。此河は河幅大ならず、水深も亦深からず、然し水流は頗る緩であつて其水深は慶城、綏化の兩縣内に於ては三呎内外を有する箇所が多く、それより呼蘭までの水深は四呎内外であつて、平水時以上の場合には小汽船を通ずる事が出来る。呼蘭より下流は平水時四呎乃至五呎の水深であつて、減水期でも二呎を下らない。船舶の種類は、汽船帆船、戎克等であつて、此中汽船はハルビンを起點として伯都訥富錦三姓呼蘭間を聯絡してゐる。

教育

滿蒙の教育

滿蒙に於る教育は、日本が滿蒙の産業開發と同時に、逸早く教育事業に着手したる爲め異常な發達を遂げ、母國の教育に比しても殆んど遜色が無いと言はれて居る。明治三十七年五月、日露戰爭の最中たる時代に於て、金洲軍政署は同地方人民の請願を容れて、南金書院民立小學堂を開設した。是れ蓋し滿洲に於ける支那人教育の嚆矢である。關東州に於ける日本人小學校は明治三十九年五月大連及び旅順に設置されたのが始めてである。爾來住民の増加に伴ひ、公學堂、小學校、中等學校、專門學校、大學等、諸般の教育設備が成つて、現今の如き隆盛を見るに至つた。

教育制度

言語や課税の關係上、日本人教育、支那人教育の二方法によることは、勢ひ當然である。之を經營主體により分ければ關東州内の教育施設は概ね關東廳の經營する所で、南滿洲鐵道附屬地の教育施設は、少數の私設學校を除いては總て滿鐵會社の經營に係り、其の監督の任は關東廳に在るのである。

日本人小學校の教科書は文部省著作の國定教科書を使用して居るが、滿洲は内地と事情を異にしてゐるので、滿洲の教材を主とした補充教科書を併用して居る。中等學校では文部省檢定済の教科書を使用し、教授上の取扱に於ては成可く滿洲の事情に適合せしめて居る。朝鮮人の普通學校の教科書は朝鮮總督府編纂の普通學校用教科書を使用し、支那人の初等教育たる普通學堂、公學堂に使用する教科書は特殊のものを必要とするの

で、南滿洲教育會教科書編輯部編纂のものを使用してゐる。

各學校の經營種別

關東廳經營

| | | | |
|---------------------|----|-------|---|
| 小學校 | 二一 | 高等女學校 | 二 |
| 中學校 | 三 | 青年訓練所 | 五 |
| (以上は何れも日本人教育に關するもの) | | | |
| 公學堂 | 一一 | 中學校 | 一 |
| 商業學堂 | 一 | 農業學堂 | 一 |
| 師範學堂 | 一 | | |
| (以上は何れも支那人教育に關するもの) | | | |

其の他に日本人教育の爲めに設置せる旅順工科大学がある。尙支那人子弟の初等教育には州内各會屯の設立に係る公立普通學堂が百二十一ある

大連市經營

大連編生高等女學校
商工學校(男女實務者養成の爲めの)

滿鐵會社經營

| | | | |
|--------|----|-----------|----|
| 小學校 | 三一 | 同分教場 | 五 |
| 補助學校 | 一 | 鮮人教育の補助學校 | 八 |
| 實業補習學校 | 三四 | 青年訓練所 | 六 |
| 家政女學校 | 一四 | 幼稚園 | 二四 |
| 同分園 | 一 | 同補助經營 | 八 |
| 參考圖書館 | 二 | 通俗圖書館 | 二二 |

中國人教育に屬するもの

| | | | |
|--------|----|------|---|
| 公學堂 | 一〇 | 中學堂 | 一 |
| 同補助經營 | 四 | 商業學校 | 二 |
| 同語學堂 | 一 | 農業學校 | 二 |
| 同種補助學校 | 五 | 鑛山學校 | 一 |

日本人中等學校としては

| | | | |
|------|---|-------|---|
| 中等學校 | 四 | 高等女學校 | 四 |
| 商業學校 | 二 | | |

専門教育に屬するもの

| | | | |
|------------------------|---|-------|---|
| 滿洲教育専門學校(奉天) | 一 | | |
| 南滿洲工業専門學校(大連) | 一 | | |
| 醫科大學(奉天) | 一 | | |
| 此他に職業教育として南滿洲工業専門學校附設の | | | |
| 職業教育部 | 一 | 農業實習所 | 三 |



商業實習所 三 工業實習所 一
居留民會經營の學校は明治四十年十月居留民會の廢止と共に滿鐵會社の直營又は委任となつたので現在居留民經營のものは錦州、新民府、滿洲里、開島、局子街、頭道溝、琿春、齊々哈爾に存するのみである。



商業實習所 三 工業實習所 一
 居留民會經營の學校は明治四十年十月居留民會の廢止と共に滿鐵會社の直營又は委任となつたので現在居留民經營のものは錦州、新民府、滿洲里、開島、局子街、頭道溝、琿春、齊々哈爾に存するのみである。

東洋協會經營

大連商業學校 一 旅順語學校 一

日露協會經營

日露協會學校(哈爾濱) 一

社會教育施設

滿洲に於ける社會教育施設に就て概観せんに、關東廳各局の發表に據ると、昭和六年九月現在の施設總數は百八十であつて、其内

| | | | |
|----------|----|---------|----|
| 青年教育施設 | 三五 | 博物館及圖書館 | 三十 |
| 體育研究獎勵施設 | 二 | 婦人團體 | 五一 |
| 少年團體 | 十三 | 育英事業 | 六 |
| 教化團體聯合會 | 十九 | 其他 | 二四 |

である。
 圖書館 日本側圖書館の嚆矢は滿鐵圖書館で明治四十年滿鐵會社創立の際、既に大連に設置され、同四十三年奉天に各參考圖書館を設置し、漸次滿鐵沿線主要地に通俗圖書館が設置された。關東廳圖書館は大正七年關東都督府圖書館閱覽場が其の濫觴である。其後數回の變遷を経て昭和四年より現在の關東廳圖書館と稱するに至つたのである。

| 館名 | 藏書數 | 閱覽者數 |
|--------|---------|---------|
| 關東廳圖書館 | 二五、六八九 | 五六、一七一人 |
| 大連圖書館 | 一七〇、五九二 | 五一、一六二人 |
| 奉天圖書館 | 五一、四八六 | 五二、一九二人 |

(右は昭和五年度末の統計に係る)

滿鐵は大連、奉天の他に、二十一箇所圖書館と五十六箇所巡回文庫並に列車文庫を有し、昭和五年度末現在に於ける滿鐵の藏書冊數は四十二萬九千六百七十冊、一ヶ年の閱覽人員九十四萬三千二百八十人の多きに達してゐる。大連及び奉天の圖書館には約十萬の支那書籍を有し、ハルビン及び大連の圖書館の露語圖書は東洋に於て比類なきものであると言はれて居る。

博物館 博物館は關東廳博物館(旅順)と工業博物館(大連)とがある。關東廳博物館は滿蒙に於ける學術技藝其他の參考資料を蒐集保存し觀覽に供し、兼ねて學術研究上に必要な資料を供給してゐる。本館を動物、植物、水産、礦物、風俗、考古、陶磁器、參考の各部に分け、就中考古、陶磁器部は支那全土に亘つて資料を仰ぐ特色あるものである。記念館は旅順要塞戰に關する戰爭記念品を蒐集し、戰史研究に資せしめて居る。昭和五年末に於ける陳列品數は本館七萬四千九百九十二點、記念館二千四百八十九點、閱覽人員は昭和五年中に於て本館六萬一千七百四十九人。記念館四萬三千八百八十六人である。尙滿洲に於ける特色ある動物を網羅せる附屬動物園を設置されて居る。

工業博物館 工業博物館は社団法人滿洲技術協會の經營に係り、工業工學に關する智識の普及を目的として工業館、滿蒙館、交通館、交通分館に分ち、更に機械、電機、林産、建築、上下水道、農産、礦産、陸運、海運、航空、通信等の各部門に分類し、各種工業に關する最新式機械設備及び原料製品等の貴重なる資料を觀覽に供して居る。

體育施設 滿洲に於ける體育は急速度の進歩を示して居る。其の施設としては大正十五年に旅順にグラウンドが設立し、之れに次いで昭和二年の四月、旅順に關東廳體育研究所が設立され、有ゆる體育上の調査研究を爲し、指導の事に従つてゐる。その他旅順運動場及び大連運動場を管理して居る。

此の他に滿洲體育協會は大正十一年大連に創設され、滿鐵會社、關東廳並に大連市役所の援助の下に全滿洲の運動競技發達普及の爲め努力しつつある。現在滿洲に於ける運動場は左の通りである。

| 場所 | (設立期) | (建設費) | (面積) | (収容人員) |
|-----|-------|-------|-------|--------|
| 大旅場 | 大正十五年 | 壹万圓 | 三万坪 | 一万人 |
| 大連 | 昭和三年 | 三万二千圓 | 一万四千坪 | 五万人 |
| 奉天 | 昭和六年 | 一万八千圓 | 三万二千坪 | 三万五千人 |

宗 教

支那人間に行はる、諸教

元來支那の宗教は極めて複雑にて、何れも幾千年の歴史を有し居れるが、一般支那人間に行はれて居る宗教は、佛教、道教、儒教の三教である。そうして此の三教は民族的に、社會的に、政治的に、教育的に密接の關係を有して居る。佛教の寺院は之を廟と稱し、道教の殿堂は之を觀と呼ぶ。

寺觀、寺廟の設立由来は大抵次の四種に依るものである。

(一) 宗教宣傳の道場 (二) 禱驗又は禱災祈福を爲すもの (三) 神佛像發見に依るもの (四) 戦役記念、右の内禱驗又は禱災祈福を爲すものが多いのである。關東洲鐵道附屬地及び領事館管内に於ける寺廟は合計五百四十六に達し、之れを宗教別に區分するに、佛教を第一位とし、道教之に亞ぎ、回々教、儒教、喇嘛教といふ順位である。

己上の内、道教、佛教の二教は互に混淆して、往々佛教寺院中に關帝、娘々を祀り、道教廟宇に阿彌陀佛を安置するものがある。滿洲各地に最も多く散見する寺廟觀祠を舉ぐれば左の如くである。

- 社 稷 壇 天子が上神穀を祀つたもの
 - 風雷雨山川壇 五風十雨を祈るもの
 - 先 農 壇 神農氏を祭る
 - 厲 壇 穀穀の神を祭る
 - 八 蜡 廟 穀物に對する最終の祭祀
 - 城 隍 廟 城地方の鎮星を祭る
 - 建義孝佛祠 忠臣義士孝子佛節の士を祭る
 - 節 孝 祠 節婦孝女を祭る
 - 褒 功 祠 國家に功ある士を祭る
 - 關 帝 廟 (老爺廟) 關羽を祭る
 - 土 神 廟 地方の功勞者を祭る
 - 火 神 廟 火の神を祭る
 - 娘 々 廟 授兒、安産、治眼の神を祭る
 - 藥王廟 (一名五谷先帝) 醫師、藥舖、米商等を祭る
- 以上の外、三皇廟、馬神廟、財神廟等所々に點在する。

佛 教

滿洲に於ける在來の佛教は賈善薩派、雲棲派、法眼派、曹洞派、臨濟派、毘盧派、雲氣派等であつて、僧侶は寺廟を守るのみで、廟内貴家を營み、或は寺田を耕し、又は日を明して開闢し參詣者の奉饒に依つて生活して居る。滿洲に於て佛教の最も盛なる地方は吉林、伊通地方で之に次ぐは阿什河、琿春、寧古塔、齊々哈爾地方である。近來、僧學校を建て、儒教育會を起すの傾向を見るに至り、各省の僧團は聯合して中華佛教總會を組織し、又居士團の佛教會も成立し、傳習所の設立、講演會、社會事業等を起すに至つた。

道 教

道教は老子を祖としたもので、其の祀るものは玉皇を主とし、老子、三官(天官、地官、水官)娘々、佛爺、龍王、火神、財神、藥王、狐仙等

である。道教は元來宗教ではなかつたが、後世佛教に擬して偶像を設け、冠婚葬祭を行ふ様になつた。佛教の僧侶に相當するものを道士と云ひ、多くは醉生夢死の生活を爲し、世道人心を教化するが如きは到底望むことは出来ぬ。教派も多數に分れて居るが、滿洲の道教は龍門と稱する教牌

である。道教は元來宗教ではなかつたが、後世佛教に擬して偶像を設け、冥婚葬祭を行ふ様になつた。佛教の僧侶に相當するものを道士と云ひ、多くは醉生夢死の生活を爲し、世道人心を教化するが如きは到底望むことは出来ぬ。教派も多數に分れて居るが、滿洲の道教は龍門と稱する教派に屬するものが多い。其の寺院を觀と云ひ、又宮、廟、庵とも云ひ、廟宇の最も有名なものは千山の廟である。又支那人の多く住する都市村邑には必ず道教の廟の存在しないことはない。

儒教

儒教は孔子以前から存してゐる思想に基いて孔子が集成したもので、孔子の死後、子思、孟子、荀子等が之を祖述し、漢に至つて國教となり、以後歷代尊信され、宋代に及んでは高遠な哲學思想を加味して所謂理學なるものを生んだ。現在行はれてゐる儒教は専ら宋代の理學、就中朱熹の學を宗とし之を正統となしてゐる。元來儒教に於ては死生の問題には言及せず、從來到る所に孔子廟を設けて之を祀り、孔門の諸賢、孟子等は勿論、歷代の大儒亦之に配祀され、春秋二季の釋奠に於ては犧牲を供へ、舞樂を奏し、前清朝時代までは、官吏が三拜九叩の禮を行ひ、紳士、學生も之に参加し、殆んど純然たる宗教的儀式が行はれてゐた。此點から見ても儒教は宗教的色彩を帯ぶるものであると言ふ事が出来る。然るに民國以後に及んで儒教を國教とするや否やに關し一時問題となり、今に於て尙決定を見ないが、要するに儒教は前清時代に比して其勢力は衰へて居る。近年各地に孔教會なるものがあつて儒教の復興を圖つて居るものがある。

回教

滿洲に於ける回教徒は、屠牛者又は製革者、旅館、浴場を營む者に多い。吉林、長春、伯都訥、寧古塔、三姓、琿春、齊々哈爾等が最も盛んに行はれてゐる。此の佛教は道教と異り、色彩最も明らかで異教徒を惡み、教徒間は親密で團結心が強い。豚肉を食せず羊肉を常食としてゐるが、屠羊は必ず祭長の指令を俟つて之を屠殺し、出所不明の肉類は決して食しない。故に料理店の如きも各市場には回々教徒專屬のものがある。

喇嘛教

喇嘛教は數派に分れ就中黄教、紅教の二派が最も勢力を有して居るが、滿洲では黄教に屬するものが多い。奉天及び蒙古に接する地方は、喇嘛を信するもの頗る多く、奉天には滿洲本山とも謂ふべき黃寺がある。蒙古は殆んど喇嘛教であつて、庫倫には有名な活佛が居つて歸依の中心になつて居る。

基督教

基督教は十七世紀頃からカトリック教が滿洲に入つてゐる。其他の各教派も滿洲各地に傳道弘布された。又病院と、學校經營とが之に伴ふて奉天、遼陽、吉林等に佛蘭西人が古くから經營する教會や、海城其他小い農村に古くからある教會の尖塔を見らるゝのである。北滿地方で露西亞人の建てた市街にはギリシヤ舊教の寺院が立つてゐる。ハルビンの中央寺院を始め昂々溪、滿洲里、ボクランニチナヤ等所にあつて、市街に特殊な宗教的氣品を興へて居る。

已上各種宗教の外に日本人の集住する所には、各地に其の地名を冠した神社が祭祀せられてゐる。即ち大連神社、營口神社、公主嶺神社の如きがそれである。斯うした神社の祭祀は日本人の新しい殖民地建設に根強き精神的中心を成して居るのである。

儒教に屬する神廟の所在地

| | | |
|-----|------|----------|
| 天壇 | (清代) | 奉天南門外天壇 |
| 孔子廟 | (明代) | 海城々西門内 |
| 同 | (同) | 遼陽南門内 |
| 同 | (同) | 奉天城内東南隅 |
| 關岳廟 | (清代) | 海城西門外 |
| 關帝廟 | (明代) | 柞木城街道石門嶺 |
| 同 | (同) | 柞木城市街の西端 |
| 同 | (同) | 湯崗子西南甘泉鋪 |
| 同 | (清代) | 蓋平城西門内 |

同 (同) 遼陽南門外玉皇廟臨
 同 (元代) 遼陽西門外
 同 (明代) 柞木城邑内
 八蜡廟 (明代?) 蓋平城東方鐵塔嶺
 酒仙廟 (清代) 海城々内東上山
 馬神廟 (明代?) 遼陽城東門内
 城隍廟 (元代) 奉天城内四平街

道教に屬する神廟の所在地

火神廟 (清代) 熊岳城内東部
 三官廟 (同) 海城の東方欄河山
 同 (同?) 柞木城邑内
 上帝廟 (明代) 蓋平城西門内
 玉皇廟 (同) 遼陽城南蓮花寺の南
 天齊廟 (同?) 同城内の東北隅
 三官廟 (清代) 遼陽東方東京城内
 天齋廟 (明代) 金洲北門外

佛教に屬する神廟の所在地

永慶寺 (明代) 同
 勝水寺 (同) 金洲大和尚山
 朝陽寺 (同) 同
 響水寺 (清代?) 同
 石堡寺 (明代?) 石河驛城外門の南
 抱龍寺 (同) 瓦房店の西方
 甘泉寺 (清代) 王家驛の北方
 得利寺 (明代) 得利寺龍虎山山腹
 望海寺 (清代) 熊岳城東方青龍山
 觀音閣 (清代) 熊岳城内東部
 道林寺 (明代) 同
 三學寺 (同) 海城々内
 鐵塔寺 (遼金) 柞木城邑内
 銀塔寺 (同) 同邑の東方二里
 金塔寺 (同) 同上
 佛塔寺の塔 (清代) 蓋平城城外の東方
 慈悲化寺 (明代) 湯崗子南西の甘泉鋪
 祖越寺 (同) 千山山内
 龍泉寺 (同) 同
 中會寺 (同) 同
 大安寺 (同) 同

風 俗

滿洲住民の衣食住

滿洲の風俗を敘するに方つては、先づ以て其の住民の日常に於ける生活振りを記すことが肝要でなければならぬ。滿洲住民の生活様式は概して支那風であるが、その階級によつて其の生活諸相も自から多小の異なる點があることは言ふまでもない。

|| 食 事 || 滿洲人が日常の食品として缺くべからざる主食は、高粱である。彼等は此の高粱を如何にして食するかといふに、之を釜で煮てシヤモジで掬ひあげ椀に移しもちりて長い箸を以て食する。高粱以外の食料としては白米、粟、玉蜀黍等である。粟や、玉蜀黍は粉にしてパン如きものに仕上げて食する。左に關東州に於ける中等農家の常食を示すと左の如きものである。

朝 飯

- 一、包米格子……………玉蜀黍を細粉として粥にしたもの
 - 二、包米餅子……………玉蜀黍(一斗)及び大豆(二升)を細粉としてパンの如くしたるもの
 - 三、鹹菜四蝶……………各種の香の物である。假令は大根、白菜、芥菜及び香菜、蕃根等の漬物である
- 午 飯 (但し冬期労働せざる時は午飯をせず)

- 一、包米餅子……………前に同じ
- 二、小米粥飯……………粟の粥である
- 三、鹹菜四蝶……………前に同じ
- 四、熱菜數盤……………之は貧民は用ひぬ、富の程度により盤數を増減する、中以上では二盤より四盤位である。

晚 飯

- 一、小米干飯……………粟を細粉とし餅の如くしたるもの
- 二、菜 湯……………白菜、鹽漬として酸味を有せざるものを料理し、小米干飯に懸けて食す、此の二者は中農家以上の者が三四日に一度位食するもので中以下は餘り食せず、そして兩者は必ず同時に用ゆる

- 三、鹹菜四蝶……………前に同じ
- 四、熱菜數盤……………前に同じ

(附言)中農以下にあつては、食費は一日小洋銀十五錢(日本金にて八錢)位から二十錢(金二十錢)位である

|| 服 装 || 滿洲人の衣服は支那服であつて、紺の筒袖で、襟もなまき極めて實用的なものである。衣服も亦食物と同じく階級により、生活の程度によつて異り、中以上となると相當贅澤なもので、絹袖、毛織物等を材料とし、限りなき高價なものもあるが、大衆的の衣服材料としては大抵綿織物である。冬期は嚴寒を防ぐ爲め必ず毛皮類を衣服の裏に縫ひ付けて置く、帽子、身かくし、手袋、鞋の兩側や底等へも毛皮を用ひてある。表は綿織物が主となつて居る。けれども禮裝となると、相當技巧を凝らしたものである。大體メリヤスの襦袢に綿製のチョッキ(カンヘル)それに上衣(マクツル)ズボン(クーツ)長衣(タータツル)等から成つて居る。日本風には似ず西洋式に近い。是は此地方が大陸的寒帯に近い關係上、防寒を主とする冬装が考慮された結果であると思はれる。滿洲人は苦力でも四季を通じて白布の踏下を必ず忘れず穿いて居る。

衣服は外衣、上衣、大裳、襖衣等で、着用順序としては、最初にクーツと云ふ袖なしの襦袢(夏は汗とり用に相當する肌着)を着け、次に下股引を穿き、紐で片脇に結び付け其餘りを垂らし下げて置き、次にズボンを穿き、筒口を足袋の中に入れ、其上を腰帶(トイタイ)で結び上衣をつけ、肩掛衣をつけるのが正式である。婦人は此れ以外に、袴を着用する、宗教家は又それ／＼定まつた方式の服をつけるが着用順序は同じである。帽子は支那式其儘である。滿洲人の帽子は禮帽と便帽との二種ありて、禮帽は儀式用で、便帽は一般に用ひられるものである。尙ほ小帽、風帽、の二種がある。ツバなしの支那帽子を冠し、紺の筒袖をつけた滿洲人の容姿は誰でも一見して支那風であると思ふ。

|| 住 家 || 滿洲人の住家は普通支那式の黒煉瓦建である。併し農家では、土壁とし葎や粟稈で葺いた「草房」を多く見受けられる。家族十人位の農家では、斯やうな式の家を借りて住居してゐるものが多い。是等の家は「炕」といふ採暖設備が施されてあつて高粱稈を燃やし、各室を暖めて居る。斯やうな農家の建築費は、一室(約六疊敷)百五十圓見當である、尤も建て方によつては五分の一位、又はそれ以下でも出来るが、正規の建築師にかける場合は、大體この見當である。滿洲の都市の建築物は近來多く赤煉瓦又は化粧煉瓦を用ふる者が殖えて來てゐるが大部分は依然として

黒、又は鼠色の煉瓦を用ひて居る。そして是等都市の家屋は一體に奇数の室取りとなつて居る。手輕な農家にも特有の方式はあるが、都會地の滿洲家屋を記せば、先づ門外に明櫺、影壁等が設けられてあり、彫刻の好み等、概して支那風ではあるが、滿洲人の家屋には又、おのづから滿洲特有の趣きが現はれて居るのが認められる。先づ門を入れば鋪道があつて、左右に建物が並列して居る、是等の各棟は母屋の外に多くの附屬の小屋がついて居て、それらは廂房、耳房などと唱へられて居る。家の棟数は豪家大官ほど多く、宏大な邸宅を構へて四邊を煉瓦又は土壁で嚴重に繞らして居て、一見一個の小城壁の觀がある。

滿洲は大平原であつて性時から幾多の脅威が自然的に、又は人爲的に加へられた。又多くの天災地變が住民を驚かして警戒させたのである。是等が其家屋の構造上に及ぼし又は例の名物とも謂ふべき馬賊、其他土匪などの襲來侵入を防ぐ爲めの必要な用意から斯くは嚴重な防拒的な構造を習慣づけられたものである。

己上衣食住に就いて記した外、滿洲特有の社交機關とも稱すべきものがある。それは當務者に於て組織されてゐる各種の「會」である。又、最も輕便な用談などは「茶館」で済ますことが出来るのである。

土俗に現れた興味

滿洲民族の風俗習慣は、今は著しく漢人化して純然たる滿洲の風俗習慣を容易に窺ひ難いが、それでも尙その傳統を保持されて居るものがある。たとへば鳥居式の門、屋根の千木、枝上式倉庫など、民家の特色、或は婦人の纏足せざる、頭髮に一把頭、兩把頭の類あること等、是等は全く漢人とは異つて居る特徴である。今も尙は渾河の上流地方、吉林、滿洲八旗駐防の地(チ、ハル其他)等には、是等の風俗を容易に見ることが出来る。

料理、衣服、類などを觀察せんとすれば、滿洲を旅行して到るところに其希望を遂げ得られる。支那之居、支那風呂、支那雲雀を賣る鳥籠、婚禮又は葬儀の行列、正月の爆竹、門神、元霄節、僧は各種店舖の招牌など津々たる興味を喫つて殆んど盡るところを知らぬほどである。

鄭家屯、洮南あたりの蒙古地では、町に蒙古人が歩いて居る。黄色や紫色の衣服で一種懷恨な容貌をして居る。海拉爾や滿洲里には、殊に是等の人が多い。蒙古包を見ることも出来る。牛、馬、羊を、牧し、又は駱駝を牽き、牛車で移動生活を營んで居る者をも多數に見受けるのである。

又、宗教的興味に至つては、更に特異なものがある。蒙古の喇嘛教が滿洲にも廣通して居て其の寺院や喇嘛塔が立つてゐる。又寺院に天地佛を祀り、祭典には宗教的の奇妙な服装を用ひる。回教徒が、各地に分布して居て、其寺院は清真寺と稱してアラビヤ風の拜禮堂や沐浴所がある。回教徒は多く一區劃に集住し、各戸の入口にはアラビヤ文字を書いた赤紙を貼つて居り、風習も普通支那人のそれとは異つて居る。純な滿洲人の住居る地方には特異な興味ある風俗に接するが、祭典では大石橋、撫順等の娘々廟の祭典などは特に珍奇なものである。

滿洲の言語

滿洲には獨特の滿洲語が有るべき筈であるが、滿洲は滿洲、支那(漢人系蒙古、日本、朝鮮その他各國人雜居し混住し居ること)と純粹の滿洲語としては殆んどなく、滿洲三千万民衆とは言へど純然たる全くの滿洲人は六、七萬程度と言はれ、其中にも固有の滿洲語を日常使用するものは極めて僅少で、他は殆んど支那語を使用して居るものである。純然たる滿洲語は今も黒龍江省に散在する滿洲民族と、同一系統の小數の雜種人等の間に僅かに其言語が残存して居るが是等とても早晚支那語化して行くことであらう。

滿洲に現に行はるゝ支那語は、北方系は北平、山東省と其の近隣地方の移入語で、南方系のものには上海廣東南京其他の雜種類である。茲には日本人が滿洲で通用する滿洲語(實は日本化した一種な異つた支那語である)を擧げて見る。

| 滿洲語(日本化した支那語) 意味 | 明日 | 今日 |
|------------------|-------|-------------|
| ミンテン | チンテン | 今日 |
| ニ ー ヤ | マンマンデ | ゆつくり、おそく、待て |
| カイカイデ | ホ ー ー | よい、よろしい |
| テン ホ | ブ ー エ | 駄目、よくない |
| ブツシン | ヨ ー ー | いる、必要、 |
| ブヨ ー | カンホーチ | 何でもする事、作ること |
| チヤカ | ナガ | あれ |

チ ヌ ウ ゆけ、去れ シヤシヤ 有難う
ターターデ 澤山 シヨシヨウデ 少し

| | | | | |
|------|-----|------------|-------|--------|
| チユウ | ウ | ゆけ、去れ | シヤシヤ | 有難う |
| ターター | デ | 澤山 | シヨシヨウ | 少し |
| シヨ | マ | なんだ | カンカン | 見る |
| ジヤン | グイ | 主人、旦那 | ユ | ある |
| メー | ユ | ない | ナー | 持て来い |
| シン | ジョウ | あげる、やる | カイ | 歸る、通じる |
| メシ | メシ | 食べ物、食べる | フアン | 家、家庭 |
| プチ | ト | 知らぬ | チ | 知らぬ |
| チ | ト | 知る | シン | わかる |
| プ | ミン | わからない | ナー | 何處 |
| ボ | ン | 友だち | メー | しかたがない |
| イ | ー | 同じ、一しよ | ショ | 子供、下僕 |
| ト | ン | 皆で | ト | 品物 |
| シン | ホ | 意地わる、人がわるい | ツ | 如何です |
| ツ | ア | 左様なら | イ | 一(一ツ) |
| ア | ル | 二(二ツ) | サ | 三(三ツ) |
| ス | ー | 四(四ツ) | ツ | 五(五ツ) |
| リ | ユ | 六(六ツ) | チ | 七(七ツ) |
| バ | ー | 八(八ツ) | チ | 九(九ツ) |
| シ | ー | 十(十ツ) | シ | 十一 |
| シ | ー | 十二 | シ | 十五 |
| イ | ー | 萬 | イ | 千 |
| イ | ー | 一里 | イ | 一箇 |
| ン | ヤ | 夏 | チ | 春 |
| ン | ヤ | 冬 | チュ | 秋 |
| ト | ン | 來月 | ベ | 本月 |
| シ | ヤ | 五月 | ス | 四月 |
| ウ | ー | 晝 | ツ | 朝 |
| シ | ヤ | 今夜 | ワ | 夜 |
| チ | ン | 今 | ツ | 昨夜 |
| フ | ワ | 飯 | ツ | 茶 |
| ア | イ | 湯 | リ | 冷水 |
| エ | ン | 煙草 | ヤ | 藥 |
| チ | ユ | 酒 | ビ | ビール |

滿洲年中行事(舊曆に據る)

一月

- 一日 午前一時各家の男女皆早起し初めて堂門を出る時は必ず吉方に向つて喜神を迎へ後屋内に歸る。又三十一日晚諸神の前に禮を行ひ此夜爆竹を放ち天明に至る。天明に至れば各商民盡く新衣裳を装ひ各親友の家に至り叩賀する。之を拜年と云ふ。拜年の禮は三日に分ち初一日は父方、二日は母方、三日は妻方の親戚に至り四日から十日迄は各郷中の親友方面に行き拜年する。
- 二日 黎明商家は財神を祭り爆竹を放ち庭内に蔭棚を建て天地の神祇を祀り地方により松樹二本乃至六本を植ゑる。高さは丈餘で桃符を貼

り燈籠を張る。

五日 破五と云ふ。婦女始めて縫紉をするのである。四日から六日に至る三日は地方に依り商家で所有する凡ての貨物の値ふみをする。之を盤貨と云ふ。

六日 此日商家は半日の間切賣をする風がある。

九日 玉皇上帝の誕生日で各商民皆廟に詣うて香を焚き禮拜する。

十日 俗に穀生日と稱し各戸皆粟食を作る。

十五日 此日の晩は元且と同じく各神を祀る。十三日から十七日迄五日間を燈節と云ふ。夜に入ると各大街皆燈を掛け各家の婦女も出て之を觀る。各郷の子供は皆龍燈彩船及び高脚等の遊戯をして沿街を巡遊する。之を秧歌と云ふ。又此間を元宵節と云ひ粉糰を以て祖先を祀り街市に張燈する。此日男女出遊して平河を歩む。然るときは年中病災に罹る事なしといひ之を走百病と云ふ。

二十五日 龍王日と呼ぶ。各家皆獨頭の蒜を門口に掛けて病を避ける。小兒女は五彩を剪つて圓形とし採絲を以つて之を穿つたものを帯びる。之を小龍尾と云ふ。家々皆合菜を食ふ。誰に龍封日吃合菜と云ふ以て豊年の兆とする。此日又添倉と云ひ黍飯を煮、焚香して倉を祀る。一に祭倉とも云ふ。此風雖間に最も甚だしい。一月四日から二十五日に至る間各戸各親友男女と會合する。之を會年菜と云ふ。各郷では二月十日以後に行はるゝ事がある。

二月

二日 花朝と云ふ。又俗に龍擲日と云ひ家毎に豚肉及び饅頭を食ひ夜に至ると各處に蠟を點する。名付けて照蠟蠟と云ふ又中雷神の誕生日として各家皆祭壇を設け婦女は裁縫を忌む。

三月

三日 清明節である。各城では城隍神を出巡する。此日は神像を擔ぎ儀仗を用ひ鼓樂を以て前導し城北に至つて海主の孤魂を祭る。此日各家皆祖先を祭り、人死して三年以内なれば其家人皆墳墓に至つて焚紙する。

十四日 地藏菩薩の誕生日である。

十六日 城隍奶奶の誕生日である。又山神廟の祭日で地方の人參商は相集つて廟内で演劇し山村の居民は牲を具へて之を祀る。

二十八日 東嶽大帝の祭日で三月一日から末日に至る。山東泰山の神を祀るものである。各處の東嶽廟に祭禮がある。

四月

八日 佛の誕生日である。

十五日 呂祖の誕生日である。

十八日 海神の誕生日である。此日から三日間は娘々神聚會と云ふ。此日午飯に多く包子を食ふ。又小兒の七、八歳なるものは此日に留髮し廟に詣て僧侶の喝令を受け家に歸る風がある。之を跳牆と云ふ。廟から家に歸る、時後方を顧るを禁する。斯の如くすれば其子が壯健である。

二十八日 藥王の誕生日である。

五月

五日 端午節で商民皆酒進する。又門戸に蒲艾を懸け角黍を包み粟米を食ひ雄黄酒を飲み門楣に葫蘆を掛ける。婦女は採絲を以て小囊を製して髪を覆ひ或は布を以て虎を作り、兒の肩に繫ぎ除災の意とする。

十三日 俗に關帝軍刀會と云ひ十二日を俗に關帝磨刀斯と云ふ。旱天と雖も必か雨が降ると傳へられて居る。

六月

六日 土用の入りで蟲王廟會がある。各菜園性を備へて神を祭る。此日多く衣を罷し書を曝す、又各郷民は多く豚を殺して酒進し又麵を食ふ。

十九日 觀音堂で演劇祀神する。

二十四日 關帝廟會がある。

七月

七日 織女渡河の日で各家の兒女夜間織女神を供祭する。

十五日 中元節で又鬼節と稱する。鬼とは幽魂の意である。

八月

即ち魂祭で各家諸神先祖を祭り、各城では城隍神郊外に出巡し、各縣官衙の郊外に至り、無主の孤魂を祀る。

即ち魂祭で各家諸神先祖を祭り、各城では城隍神郊外に出巡し、各縣官衙の郊外に至り、無主の孤魂を祀る。

八月

十五日 中秋節で各商民戸々酒筵する。俗に祭太陰又は供月と云ふ。

九月

九日 重陽節と云ひ、各家皆豚を殺して美食する。此日芋及び白菜を豚肉に合して煮る者が多い。又菊花饅を食ふ。

十七日 財神の誕生日で各商家で之を祭り皆廟に詣うで祭拜する。

十月

一日 此日も亦鬼節と稱し城隍神へ出遊して魂祭すること清明七月十五日と同じである。

此日展墓祖を祀り送寒衣と云ふ。又此の日から粥廠を開き綿衣を散じ以て窮民を濟ふ。

十一月

冬至 此日各戸夜間皆先祖諸神を祭り各屯は皆豚を殺して包子を食ひ地方の苦力も亦開宴すること略正月と同じである。名づけて蒸食と云ふ。

十二月

八日 各家皆百菓及び雜糧を用ひ粥として食ふ。之を臘八粥と云ふ。二十三日晚に竈を祭り磨瓜を用ゐる。

之を辭竈と云ふ。各家の祭後竈神像を撤去し二十三日に至つて新しきものに換へる。又此日を過小年と云ふ。盛んに爆竹を放つ。此日の前後數日は家々餃子を食ふ風がある。

除日 早朝各神像の祖先の前に祭物を陳設供獻し燭を點じ香を焚き朝六時に至つて茶酒を灌ぎ祭神の禮を行ふ。

各神の名は關帝、張仙、觀世音菩薩、財神等で又中雷神、竈神、門神等の各神は商民盡く之を祭る。午後に至りて各家の家長點心水菓等の物を子弟婦女等に分ち家長から以下皆銀錢を分かつ、之を壓錢又は安歲錢と云ふ。此日朝から爆竹を放つ。晚は各家の内外に點燈し親友交賀する。之を辭歲と云ふ。三更に至つて罷める。未だ墓祭をせぬ家では此夜巷に紙錢を焚く、之を燒包袱と云ふ。次で一族拜賀し各歳錢を分かち團聚飲食する。又終夜就寢せぬものがある。之を守歳と云ふ。又年末には各家は門口に對聯と稱するものを貼付けて新年を迎へる。

以上の年中行事中各廟の會期には大概廟内に演戲臺があつて演戲する。

凡て公開で多くは信徒の奉納に係る。また爆竹は、婚喪等の外、所謂紅事(ホンシー)白事(バイシー)に論なく、盛んに之を用ゐる風が現存してゐる。

以上は舊曆に據るものであるが、尙此外民國成立後新曆に祝祭日が出來たので當日は一般に休暇を爲し國旗を掲揚することになつて居る。

左に心付いた儘、二三の携帶品目を擧げて見やう。

金入、小鏡、懐中時計若くは腕時計、磁石、ハンカチーフ、手拭、懐紙、扇子、ステッキ、齒磨揚子、石鹼、櫛、ブラシ、剃刀、空氣枕、防水手拭入、手帳、名刺、鉛筆、萬年筆、書翰用箋、白紙、郵便切手、端書、頼信紙、認印、肉池、マツチ、小刀、鋏、鞆、毛布、レイン

左に心付いた儘、二三の携帶品目を擧げて見やう。

金入、小錢、懐中時計若しくは腕時計、磁石、ハンカチーフ、手拭、懐紙、扇子、ステッキ、齒磨揚子、石鹼、櫛、ブラシ、剃刀、空氣枕、防水手拭入、手帳、名刺、鉛筆、萬年筆、書翰用箋、白紙、郵便切手、端書、頼信紙、認印、肉池、マツチ、小刀、鋏、鞆、毛布、レインコート、オーバシューズ、風呂敷、靴下

通貨

通貨は鐵道乗車券、官券券請求等の場合を除き、滿洲事變後は奥地を除き、各地とも共通して旅行には概ね日本貨幣にて何等差支へなく充分である。寧ろ支那人間には高低常なき支那通貨よりも日貨を歓迎する傾向があるから、旅客として最も不便であつた換貨の煩より稍救はれた形であるが、各地共商品等の賣値は其地の通貨を以て建として居るゆゑ、其日の換算率を知つて日貨の支拂に不當の利を占められない様注意するが肝要である。

乗車券類の請求

滿鐵線 金回建(日貨或は朝鮮銀行券)

中東線 金ルーブル(哈爾濱大洋を以て購入)

他線 現大洋

各都市の通貨

奉天、長春 日本貨幣、城内は現大洋、奉天票

洮南 現大洋、奉天票

齊々哈爾 現大洋、哈爾濱大洋(貨幣價值、哈爾濱に於ける哈大洋の約半額)黑龍江省官幣

哈爾濱 哈爾濱大洋

吉林、敦化 現大洋、吉林大洋、哈爾濱大洋、吉林官帖、奉天票

錦縣 現大洋

標準時間

南滿洲及び支那沿岸の標準時は内地及び朝鮮時間よりも一時間遅れてあるから、海路による旅行者は大連で、陸路の場合は安東で時計の針を戻さねばならぬ。又中東鐵道(東支鐵道)は哈爾濱時刻によるので、長春驛で乗換の際、南滿洲時刻より二十六分進めることが必要である。



内地及び朝鮮正午



南滿洲及び支那午前十一時



哈爾濱時刻午前十一時廿六分

旅 券

四六

朝鮮各地及び滿鐵沿線並に開港地點等の視察旅行には旅券の必要はないが、右以外の支那奥地旅行の場合には帝國領事館を経て滿洲又は支那官憲より身邊保護の爲め旅行者に與へらるゝ一種の旅券免狀とも云ふべき護照を受けて行く方がよい。護照を受けんとするには二弗の收入印紙を添へて領事館に下附を願出すれば二三日乃至は一週間内に受けることが出来る。

尙内地より浦蘆斯德、ボグラネーチナヤ、哈爾濱、南滿洲を経て内地へ、或は右の反對経路に依る旅行者は府縣廳より正式に外國旅行免狀の交付を受け、更にツゾイェット領事館の裏書を受けて之を携行せねばならぬ。

乗 車 船 券

朝鮮、滿洲の各驛へは關釜連絡船を介し、鐵道省線の各驛から連絡の直通切符を買ふことが出来る。又汽船を介し、大連及び浦蘆斯德を經由する連絡切符も鐵道省線と滿鐵線、滿洲國鐵道線及び中東鐵道線の主要驛間に發賣されて居る。即ち日本内地から鮮滿へは一枚の切符で行けるのである。此の切符は主要停車場並にジャパンツーリスト・ビュローの各案内所で發賣するが、東京(東京驛前丸ビル)、大阪(大阪市堺筋)、下關(下關驛前)の鮮滿案内所のツーリスト・ビュローは此の方面の切符を専門に取扱つて居る。

鮮滿支那方面の旅客は、行き切りで無い限り、成るべく連絡往復又は周遊切符を購求するのが便利且つ徳用である。往復、周遊の切符は船車賃の割引があり、又途中支線旅行に對して特典がある。

旅館と宿泊料

滿洲の主要都市に於ける日本式旅館の設備は概して整つて居る。初めての旅行者が心配になる旅館の宿泊は、内地より滿洲の各地の方が却つて安心である。第一滿洲でも朝鮮でも一切茶代といふものがないだけでも旅客に面倒をかける。此の茶代廢止の協定が成り立つて居るのは旅客にとりては頗る利益である。宿泊料以外に旅館での入費は單に使用人の心附だけで事足る。此の使用人への心附は勘定の一割見當でよい。各地旅館の宿泊料は大略次記の通りである。

滿洲各地 日本旅館 一般(朝晩二食付)

宿泊料 一等六圓位、二等四圓半位、三等三圓半位、四等三圓位。

素食料 一等三圓位、二等二圓位、三等一圓半位、四等一圓位。

哈爾濱その他北滿各地

宿泊料 一等十弗位、二等八弗位、三等六弗位、四等五弗位。

素食料 一等四弗位、二等三弗位、三等二弗位。

(因に、弗は約七掛を圓と思へば大差がない)

又團體に對する滿洲各地の日本旅館は

中學校程度學生(三食付)二圓乃至二圓半位、但し晝辨當付

青年團員 二圓半以上

教員軍人 三圓以上

普通團體 三圓半以上

紳士團體 五圓以上(朝晩二食付)、(素食料一圓乃至二圓)

哈爾濱その他北滿各地旅館料金は三圓乃至六圓位で其の都度定める。

税 關

滿洲旅行者は左記の各地を通過の際は託送及び身廻り手荷物に對して税關の検査を受けねばならぬ。然し關稅手續きは心配するほどの煩はしきものではなく、普通旅行具や適量の土産物なれば何等顧慮するを要せず、簡單に済むのであるから、申告を偽り、又は隠匿するなどの言動は慎まねば却つて面倒を惹き起す事がある。

滿洲に旅行の際は、旅行用具の中、特に注意すべきは寫眞機械其他の課税品であつて、是等を内地より携帯する場合は出發港の税關にて豫め許可證明書を買ひ受け置かぬと歸還の際課税せられる。又商品見本類に對しても同様で、假令其品が揃つて居らぬでも、個々に一つの商品である以

滿洲に旅行の際は、旅行用具の中、特に注意すべきは寫眞機械其他の課税品であつて、是等を内地より携帯する場合は出發港の税關にて豫め許可證明書を買ひ受け置かねと歸還の際課税せられる。又商品見本類に對しても同様で、假令其品が揃つて居らぬでも、個々に一つの商品である以上、其の數量が相當ある場合には課税されるから、斯る場合は輸入港の税關に一時關税を供託の上、其の證明書により歸還に際し戻税を受ける方法を講じて置くことがよい。

尙、内地歸還の際、煙草、酒類、砂糖、絹織物、毛皮、骨董品、麻雀等は特に通關が面倒な物品であるから注意を要する。

釜山及下關(國釜連船による場合)

朝鮮に行く時も内地に歸着する時も船内で日本税關の簡易な検査がある。

安東 朝鮮から滿洲に行く時も滿洲から朝鮮に入る時も、託送手荷物は安東驛内税關検査所で列車内持込みの手廻り品は列車内で、何れも朝鮮及び支那税關の検査を受けねばならぬが、此際は立會はぬと荷物だけ其儘留め置かれる、尙又荷物のみ先送される場合は鎖錠したるものは鍵を同時に預けぬと其儘立會が終るまで留め置かれるから特に注意せねばならぬ。

關東州 鐵道で大連に入る場合は普蘭店以南の汽車中で、又汽船で入る場合は汽船内で、酒、煙草に對して検査がある。

大連 陸路北行の際、大連驛前で、支那税關の検査がある。

浦鹽斯德、ボクラニチナヤ ソヴィエツト入國の際は無税關にて携帯し得る物件數量等に色々制限があるが、通過旅行の場合にはあまり制限はない。然し書籍、印刷物並に原稿等は可成り嚴重な検査がある。尙寫眞機械一個だけは携行差支ない。又ソヴィエツト内に於ては官憲の許可がなければ絶対に撮影は出来ぬことになつて居る。

下關、門司、長崎、神戸、敦賀 等は何れも上陸地點で税關の検査がある。大連、門司、神戸間、大阪商船汽船内には日本税關吏が乗組んで居る船内で税關検査を受けることが出来る。

尙神戸大連航路の船中に於ては下關或は神戸にて汽車連絡の便宜を圖り、大連出帆當日船中にて左の手續により税關の検査がある。

一、旅具の検査 本船備付の旅客携帯品申告紙及び自用煙草申告書へ明細記入し税關吏に提出すること。

一、荷物開裝及び包装 は検査補助員が手傳つて呉れる。

一、船中にて検査せざる物品 (イ)商品と認めらるべきもの、(ロ)植物澱粉を必要とするもの、(ハ)銃器彈藥其他特別の取扱を要するもの、(ニ)船内にて検査困難なるもの及び課税に疑義あるもの。

以上検査済の上は検査證を申受け手荷物に括付すること

携帯煙草の轉移制限 滿洲より朝鮮へ、又滿洲より内地へ入る旅客の携帯し得る自用煙草の制限は一人につき一種の場合

葉卷煙草 五十本以内

卷煙草 百本以内

刻煙草 三十丸以内

を限り、それ以上は携帯する事が出来ぬ。右制限以内にも必ず税關吏の検査を受けて通關のスタンプを需めること。又朝鮮總督府の煙草輸入は非常に嚴重であるから、若しスタンプ無き朝鮮專賣局以外の煙草を車中で見付かる時は五六本にても沒收されるのみならず少し抗辯する時は密輸入として最低百圓以上の罰金を課せられることがある。

主要都市の視察

全滿洲に於ける都市全部を記さんとすれば多大の頁を要すること故、茲には其趣目の記すごとく主要なるものみに止む、且つ本項は本書の編纂を終りて後、更に附録として補遺せるものであるから、別項寫眞の解説と記事の重複する場合なしとせず、幸ひに諒恕を乞ふ。

大連

大連は滿鐵即ち南滿洲鐵道の本線たる連長線(大連より長春まで七〇一軒四)の搬出し驛である。日本から滿洲に旅行するには、朝鮮を経て安奉線に入るの途、海路、大連に上陸するので二途あるが、大阪商船の定期船にて關門(神戸から釜山まで一日)を午過ぎに起てば、三日目の朝は最早大連に着くのである。

滿蒙の大支關である大連は、流石に其の埠頭の規模は東洋一である。ヴィクトリア灣の一部を占めて、前面は海を隔て、大孤山岬角と相對し、背面には丘陵を負ふて居るので、自ら北西南三面の荒風を遮り僅に東方の一路を黃海に向つて開き、南滿洲鐵道の起點地として極

東貿易の一種威を示して居る。

大連港の示す一ヶ年の貿易額は約六億圓と稱する。市街はロシア式で雄大に、日本式巧緻を施されてある。大廣場を中心として放射形に大通を敷出し、小徑を縫織して四個の公園と、六個の廣場とを有し、宛も蜘蛛の網の如き一大街衢を形成して居る。電話、電氣、瓦斯、上下水道等、諸種の設備完全し、通路は歩車道の區別ありて、歩道は凡てコンクリート方塊板を敷き詰め、車道はマガダム式鋪道で、歩車道の間には排水側溝が設けてある。歩道にはアカシヤ、ゴブラ等の街路樹を植え、大廣場の南部一帯には各國領事館、大連民政署、市役所、滿鐵本社などあり、大廣場の北部は諸會社、銀行、新聞社、旅館一市場、各種の店舗が櫛比して居る。埠頭の南部即ち東廣場界隈は豆油、乃至豆粕製造業の本據地である。埠頭は埠頭から市内の大通に周通し、沙河口、老虎灘に至り郊外線は名勝地の星ヶ浦に通じて居る。

埠頭は滿鐵の經營であつて、防波堤約百萬坪の海面を抱擁し、現在製船岸壁の全長一萬五千餘尺、同時に四十隻の船舶を繋留し、二萬噸の巨船を横着けにすることが出来る。汽車も茲に發着して船車の聯絡は極めて完全である。其他待合室の設備、埠頭陸橋等到れり盡されて居る。

遊覽順序

露西亞町——滿蒙資源館——埠頭——油房——華工牧畜所——大廣場——當盤橋——西園子公學堂——露天市場——星ヶ浦
以上の外、大連取引所、信濃町公設市場、工學博物館、電氣遊園、中央公園及び老虎灘等の遊覽個所がある。

旅順

大連から汽車一時間餘りで達す、汽車の旅順に近づくに従つて、往年日露戦争の當時、彼我の攻防戦に慘憺を極めた追憶を漫ろに新たに感じる感がある。

旅順は遼東半島の最南端に位し、四圍山岳を以て圍繞した別天地であつて、水深き紺碧の海灣に臨んで居る。港は東西二港に分れ東港は我海軍要港部の所管に屬し、西港は近年修築を施して商業港となつたけれど、畢竟大連港の補助港に過ぎないのである。

市街は新舊兩市街に分れ、龍河々口の北岸なる旅順驛を中心として其の東方を舊市街とし、其西方を新市街と呼ばれて居る。舊市街は商業區で新市街は官衙區である。關東州の政治機關の首腦たる關東廳を始めとし、其他の官衙、官舎など、宏壯な建築物がある。

遊覽順序

白玉山——戦利品記念館——東鶴冠山——北望臺——博物館——爾靈山——二龍山——松樹山——水師營

奉天

奉天は遼河の支流渾河に抱かれた涯りなき沃野に所在して居る滿洲の主要都市中、尤なるものである。我が鐵道附屬地が政治的境界をもち城市が内城と外城との二重であることも、近代都市としての要素を具備して居る。奉天は其の地勢上、無限の擴充と進展とを益々活潑にしてゐる。六條の鐵道を放射せしめ、渾河の水路を加へ、交通上の結節點として、滿洲稀に見る恵まれた地點である。

古來此地を相して城を置き、又都を茲に定めたもの、遠く滿海の時代から、元、明、清の諸時代を経て、瀋州、瀋陽、盛京、奉天、遼寧の名に残り、今次滿洲國の新國家成立と共に都は長春に定め置かれたが、新滿洲國の成立前までは東北四省の政治、軍事、經濟、教育の中心地として活氣横溢、流石に都市として光り輝いたのであつた。民國個樞要の官衙、諸機關施設は、總て此地に集り、列國亦領事官を置き、滿蒙に特殊の權益を有する我國は、外交上殊に之れを重要視して居ると共に、日露戦役に於ける兩軍が雄雌を決した修羅場としての史蹟が、永遠に光輝を放つ記念地である。

鐵道による交通網を見るに滿鐵線は南して大連へ、更に船により天津、上海、南京方面、或は日本内地へ、北して長春よりハルビンを経て歐洲へ、安奉線は蘇家屯より岐れて安東より朝鮮、内地へ、撫順線は渾河より岐れて撫順へ、奉天鐵道は我が奉天驛に於て彼我連絡して山海關を経て北平へ、瀋海線は瀋陽驛より一路北上して朝陽鎮より更に吉海線となつて吉林に延びて居る。此の六方面への結節點として、滿洲交通の樞軸を爲し、行客の雜沓群至まことに文字通り織るが如く、一度我が奉天驛前に立てば輻輳、馬車、人力車、自動車等、あらゆる乗物の時代相輪圖に接するの想ひあらしめるのである。

奉天は鐵道附屬地、商埠地、城内の三つに大別することが出来る。附屬地は日本の行政區域、商埠地は諸外國人の爲めに開かれた居留地、城内は中國人自體の行政區域である。

遊覽順序

忠靈塔——醫大——神社——北陵——北大營——飛行場——城内——救濟——博物館——西塔——滿蒙毛織

撫順製坑は滿鐵の經營に係るものである。此の地を中心として、南北四軒、東西十六軒に亘る炭層は、最も薄い所でも七十八尺

撫順

撫順炭坑は滿鐵の經營に係るものである。此の地を中心として、南北四軒、東西十六軒に亘る炭層は、最も薄い所でも七十八尺最も厚い處に至つては四百二十尺、平均百三十五尺埋藏量は實に十餘億噸と算せられて居る。大空坑、斜坑、露天掘等ありて一日二萬餘噸を採炭して居るが、撫順の採掘を了るには今後百年を要すると言はれて居る大規模なものである。此の驚異すべき一大炭都も、日露戦争後、其の炭坑が我國の經營に歸して以來急激に大發展を遂げたもので、其以前は寂寥たる寒村に過ぎなかつたのである。

遊覽箇所

大山又は東都坑——露天掘——モンド瓦斯工場——オイルセール工場——撫順城——撫順神社

遼陽

遼陽は奉天より六十五軒、大連からは三百九十七軒の地點である。滿洲最古の城市であつて従つて名所舊蹟も多くある。此地で日露戦役當時、大會戦の行はれたことは内外人の能く記憶に存する所である。首山、黑英豪、仕官屯、紅沙嶺その高地に今も猶殘曠廢堡などが存して居つて、漫ろに當時の慘狀を憶ばしめる。

遊覽場所

忠魂堂——白塔——白塔公園——遼陽神社

鐵嶺

鐵嶺は遼河の沿岸にある樞要な都市である。鐵道の開通前は奉天以北の中心市場であつたが、近年開原が勃興した爲め幾分繁榮を奪はれた觀があるが、然かも營口と商業關係が密接で取引も廣く依然として滿蒙貿易の中繼地として著名である。鐵嶺は東に龍首山系が起伏し、北は城近く柴河の流域を控へて、西は遼河の水運の便がある。日本町は驛と支那町との中間に在つて、領事館、旅團司令部がある。

遊覽場所

龍首山——鐵嶺城——商品陳列館

四平街

四平街は蒙古に向つて進む四洮鐵道の開通に依つて發達した新興の都市である、買賣街、八面城、鄭家屯、半拉山などに通ずる要衝の地で、又沃野千里と言はるゝ、大寶庫を有して居る、新興地として活氣が市街に充ち、商況は頗る活潑である。此の地は素と現在の四平街の西方地點に在つた小邑であつたが今では支那街に中心が移動したのである。新都市であるだけに道路廣く建物も壯觀で歐米風の文化街である。

公主嶺

公主嶺は南滿、北滿兩地の分水界を爲して居る地點である。此地は滿鐵の經營に係る大規模な農事試驗場が在るので最も著名である。又大豆穀類の輸出地としては滿鐵沿線中の屈指の地である。此地での視察としては農事試驗場を逸してはならぬ。

新京

新京は滿洲國成立前の長春である。新國家の成立と共に主都と定められただけであつて、滿洲にとりては頗る重要な地勢であつて今後の發展は大いに期待されて居る。我が滿鐵線の終端點で、中東、吉長、兩鐵道の連絡地點として所謂三國折衝の要點となつて居る。松花江と遼河の兩流域に跨つて居る沃野の樞軸を占めて居つて、夙に南北滿洲に於ける農産物の一大集散地として知られて居る。

市街は新市街、商埠地、舊城市、寛城子の四部に分れて居る。新市街は長春驛周邊で驛前及東西廣場の三中心點より放射形に走る大通を骨子として、碁盤形の街路が之に交叉し、路面はマガダム式に築造されて居る。商埠地は明治三十八年以來條約上の互市場として開放せられた所で、頭道溝を隔て、新市街と接続し道路諸建築凡て洋式に依て施設せられ頗る清新味な市街である。

遊覽順路

日本橋——城内——南嶺——西公園——寛城子

安東

安東は新義州と對して鴨綠江の右岸に在る。新舊兩市街に分たれ、舊市街は支那人街で、新市街は日本人の建築經營するところである。街衢は整然とし、商業は殷賑、日支鮮の貿易は盛んである。此の新市街は日露戰爭當時に開拓されたもので滿洲最初の日本人經營都市である。

遊覽箇所

元寶山——關帝廟——鎮江山——臨濟寺——忠魂碑

洗南

洗南は鄭家屯の北方約二百二十五軒の地點に在りて、東部蒙古に於ける政治經濟の一大中心地である。又農業畜産の市場としても名高い。此地は日露戰爭前は寂寥たる一蒙古部落に過ぎなかつたが、戦後北滿の家畜取引市場として急激の發展を見たのである。市街は高さ一丈の土城廓を方五支里にめぐらし、街路は棋盤の如く整然として居る。

遊覽場所

洗兒河——シヤチガイモトの枯樹——小西門外。

因に云ふ、シヤチガイモト(薩鷄街茅土)と云ふのも蒙古語であつて鶺鴒の樹の意である、傳へ聞く所によると、此地に鶺鴒の老樹があつて、性時は其樹陰で旅人等が憩ひ、又集まりて物々交換なども始めた、そして夜になると其樹上には鶺鴒が群がり宿つたので、何時とばなしに此樹をシヤチガイモトと呼ぶやうになつたと云ふ。此の樹は今枯れたまゝで洗南の小北門近くに立つて居る。洗南にとりては忘るゝ事の出来ない記念樹である。

昂々溪

昂々溪は洗昂鐵道の終端驛で齊々哈爾驛を距る約二軒の地點にある、市街は二軒四方の廣大なる中東鐵道附屬地で、市街の東西に各一門、南に二門がある、鐵道の北方は中支鐵道の宿舍街で、南は露支混住の商業區である。昂々溪の市街は露西亞氣分の色彩が濃厚であつて、旅行者が洗昂驛を通つて昂々溪の街に入ると、第一に刻し得る印象は舊教堂の尖塔や、高く聳へた製粉會社の建築、露西亞式のものである。そして鐵道南の商業區は商店の看板は悉く露西亞文字で書かれて居る。

(注意) 昂々溪の驛名は、洗昂驛、中東線(東支線)並に昂齊輕鐵の三線共にあるため、不案内の旅客中には往々錯誤を來す向きがあるから左に注意までに記す。

齊々哈爾省城と中東線昂々溪と洗昂驛昂々溪(模古氣と云ふ村)とは全然別個の都邑である。(チチハル省城——中東線昂々溪間二十四軒、中東線昂々溪——洗昂驛昂々溪間五軒)。

中東線昂々溪驛を「齊々哈爾驛」とも稱ふ。

洗昂驛昂々溪驛は齊克線と接続してゐなかつた頃は本驛より中東線昂々溪驛まで五軒の曠野を自動車又は馬車で連絡したものであるが、列車直連せる今日では齊々哈爾省城行の旅客には全然關係がない驛となつた。

中東線への乗換驛は齊克線による場合には「中東驛」であつて此の間約一軒、馬車賃大洋二十錢を要し、チチハル省城からは別に昂齊輕鐵があつて輕鐵の終端驛から中東線昂々溪驛までは約百米の距離がある、此兩者の外に省城と中東線昂々溪驛間にはバスが運轉してゐる。

齊々哈爾

齊々哈爾は、往年帝露西亞の北邊侵略に對して建てられた城で、軍事的に必要な都市である。此地の古名はブータイ(ト魁)又は(ト奎)と云ひ、土人の間には今でも此の名が傳へられてゐる。本来の齊々哈爾は茲から西に二十支里、嫩江の右岸にあつて康熙年間そこに火器營といふ軍防所を置いたのであるが、交通不便、且つ水害の憂があるので、それまで一寒村に過ぎなかつたト魁に移り齊々哈爾の名も其のまゝに踏襲したものであるといふ。(齊々哈爾の音源は蒙古から出たものである)

齊々哈爾は黒河に至る驛路の要衝で、又西は海拉爾へ、東は呼蘭へ、南は伯都訥へ通する古來交通上の重要地點である。

視察順序

城内一巡——龍沙公園——滿鐵公所

海

コロンバイル政廳の所在地で、蒙古の色彩が最も濃厚な都市である。市街は伊敏河の左岸にあつて、鐵道の北には露西亞人の新

爾拉海

コロンバイル政廳の所在地で、蒙古の色彩が最も濃厚な都市である。市街は伊敏河の左岸にあつて、鐵道の北には露西亞人の新市街、南には蒙古、支那人の舊市街がある、舊市街の城内には二個所の門があつて、毛皮其他の商店が軒を並べて居る。此地には所謂蒙古貿易が盛んであつて、牛、馬、羊、獸肉、生皮、獸毛など相當大取引が行はれる。

視察個所

呼倫貝爾副都統公署——呼倫道尹公署——呼倫縣公署——呼倫貝爾鎮守使署——サヴェート聯邦領事館——甘珠爾廟

里洲滿

滿洲里は滿洲の西端で、即ち滿露國境地點である。當驛に於てサバイカル鐵道が聯絡する、又旅客は茲で稅關の検査を受けねばならぬ。
支那人は此地を曠濱と稱して居る。此地も海拉爾に次いで蒙古貿易が盛んに行はれる。市街の三方は山岳が繞り、其の東側には製粉用の大きな風車が立つて居るのは、特殊な風景を添へて居る。市街の諸建築物は純露西亞式である。

當地の重なる建物としては日本領事館、又露國側としては稅關、學校、病院、銀行。支那側としては曠濱縣公署、警察署、東省鐵路護路軍哈滿司令部等がある。

賓爾哈

滿洲の心臟と言はるゝ哈爾濱は、産業、經濟上にも、交通上にも、勝た又國際都市として政治上に反映を來たす上から見ても、眞に全滿洲の中心を爲して居るのである。且つ滿洲の穀倉とも謂はるゝ松花江盆地、平野の農産物に對しても哈爾濱は主に其の集散市場で、北滿輸入貿易の中心地である。東支鐵道は此地を基點として東は浦鹽斯德へ、西は莫斯科を経て西歐諸國へ、南は奉天を経て東洋諸國へ通じ、又水路は松花江を遡つて吉林へ、下れば黑龍江に合して沿海州の諸市に至る、寔に四通八達、此東亞細亞の物資輸送、旅客の往來結節點として絶大な意義を有つて居る地である。

視察個所

公會堂(伊藤博文公胸像安置)——日本商品陳列館——滿鐵事務所——中央寺院——中東鐵道管理局——沖積川兩烈士碑——埠頭區公園——日露協會學校——日本總領事館——チューリン商會——傳家祠——日本小學校——松花江——松花江鐵橋——キタイスカヤ街——露西亞風呂

林吉

吉林は吉長鐵道の終端であつて、松花江の左岸に位置して居る。松花江上流から産出する木材搬出の基地として古來「船廠」と稱せられて居つた。市街は比較的清潔で、四周山岳を圍繞し、滿洲の京都と謂はれて居る。木材を始め、葉煙草、麻、毛革などの集散地として頗繁榮を示し奉天に亞ぐ大都市である。

視察個所

新開門——北大街——德勝門——北山——(同山上の關帝廟、藥王廟、玉金廟)——松花江沿岸——江南岸公園——河南街——農事試驗場

化敦

敦化は清朝の發祥地と言はれて居る古い都市で、牡丹江の盆地に所在してゐる、即ち吉林と間島との約中間に位置し、吉敦鐵道開通以來は非常な活氣を示して居る。將來敦化と老頭溝間、約百軒の鐵道が開通されたならば一層繁榮に赴くであらうと思はれる。敦化と老頭溝間を運轉して居る乗合自動車は毎年十一月下旬から翌年三月中旬に至る約五箇月間は結氷時期で運轉が止まり、解氷期以後夏期の交通は、道路の粗悪なる爲め、自動車の運轉は全く不能となり、荷馬車又は徒歩による外に方法はない、敦化、老頭溝間、約百軒を行くに天候順調の場合は三日間、雨天の際は五日間を要するのである。

縣錦

錦縣は錦州とも呼ばれて居る、錦縣の城市は、驛から約一・五軒を距つた地情であつて、小凌河に沿ふて居る。奉天と山海關との中間に在つて頗る繁華な都市である。
當地で視察すべきものは城内、日本商品陳列館、塔などである。

滿洲主要地視察行程表

| 14 | 13 | | 12 | | | 11 | | | 10 | 9 | | 8 | 7 | | 6 | | | 5 | 4 | | 3 | 2 | | | 1 | 目次 | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|--------|-------|---------|-------|--------|------|------------|------|------|------|-------|------|-------------|------|-------------|------|--------|------|-------|------|----------------|-------|--------|------|-------------|------|--------|------|--------|------|---------|------|---------------|------|-------|------|---------|--|-------------|
| 京城 | 同 | 安東 | 同 | 五龍 | 同 | 奉天 | 同 | 公主嶺 | 同 | 長春 | 同 | 吉林 | 同 | 長春 | 同 | 龍江 | 同 | 鄭家屯 | 同 | 四平街 | 同 | 大連 | 同 | 旅順 | 同 | 大連 | 同 | 鞍山 | 同 | 奉天 | 同 | 奉天 | 同 | 奉天 | 同 | 京城 | | | | |
| 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | 著 | 發 | | | | | |
| 前 | 後 | 同 | 同 | 前 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 後 | 同 | 同 | 同 | 前 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 後 | | | | | | |
| 七、二〇 | 六、二五 | 一一、一〇 | 一〇、三〇 | 六、一五 | 一〇、五五 | 一〇、三〇 | 五、四四 | 二、一〇 | 〇、三五 | 八、三〇 | 五、三〇 | 一一、一〇 | 八、一〇 | 六、四九 | 九、四五 | 九、〇〇 | 九、五〇 | 八、二〇 | 五、三〇 | 一一、一〇 | 二、四六 | 一一、三〇 | 一〇、三七 | 六、一〇 | 四、三五 | 九、一〇 | 七、四五 | 八、〇〇 | 二、五三 | 九、二三 | 七、一五 | 八、〇五 | 六、四〇 | 三、〇五 | 一、三五 | 一、〇〇 | 七、二〇 | | | |
| 第六列車 | | 第二〇二列車 | | 第二列車 | | 第一四四列車 | | 第一八八列車 | | 第二列車 | | 第一列車 | | 第一一列車 | | 第一二二列車 | | 輕便鐵道 | | 第二七列車 | | 第一列車 | | 第一〇八列車 | | 第一〇一列車 | | 第一二二列車 | | 第一六六列車 | | 第一七〇列車 | | 第一六五列車 | | 第七七列車 | | | | |
| 車 | | | 車 | | | | | 長 | | | | | | 車 | | ハルビン | | | | 車 | | | | | | 同 | | | | | | | | | | 車 | | | | |
| 中 | | | 中 | | | | | 春 | | | | | | 中 | | | | | | 中 | | | | | | 大 | | | | | | | | | | 中 | | | | |
| | | 安東視察 | | 五龍背温泉入浴 | | | | 公主嶺農事試驗場視察 | | 長春視察 | | 吉林視察 | | 吉林沿線ヲ車窓ヨリ展望 | | 中東西部ヲ車窓ヨリ展望 | | ハルビン視察 | | 鄭家屯視察 | | 洮昂、齊克沿線ヲ車窓ヨリ展望 | | チチハル視察 | | 四洮沿線ヲ車窓ヨリ展望 | | 旅順戰跡視察 | | 大連視察 | | 鞍山製鐵所視察 | | 南滿鐵道沿線ヲ車窓ヨリ展望 | | 奉天視察 | | 撫順炭礦等視察 | | 安奉沿線ヲ車窓ヨリ展望 |

考備

- (一) 本表に示すに(し遅間時一リよ間時鮮朝)間時州滿は他の其、(し遅分四十三リよ間時鮮朝)間時東中は迄發「ンビルハ」リよ發江龍、間時鮮朝は刻時發東安に並著發京城京中刻時の表本
 - (二) い多が合場るす稱と「鮮哈々齊」を譯漢々昂はてに線東中
 - (三) 結連に持を車等二ばめ込申て以を豫驗當相てしに體團の位人十三等二但、るあが賣のるす車乘しなを意用の食盡め豫放きな結連の車道食てにみの車等三は車列二二一第間賓爾哈諾々昂日九第
- 。答るれ吳てし

熱河省の鑛産資源

〔石 炭〕

新邱炭田 埋藏量二億噸(推定)
 北票炭田 埋藏量二千萬噸
 永溝炭田 礦區面積四、町步、儲量豐富
 蘇子溝炭田 炭田面積炭量不詳
 四隆頭炭田 埋藏量四百萬噸(推定)
 十大分炭田 埋藏量豐富
 西元寶山炭田 儲量豐富

縣別炭産地名

〔朝陽〕—南梁、大台子、段木頭溝、叩々林、羅郭杖子、麒麟山、黃金溝、常開溝、滲金溝、東三家子、小邊外、嶺底西、馬架子、茨梅花溝、胡匠溝、大梁崗、

〔阜新〕—架馬梁、七家子村、新秋地、新秋營子村、趙家村、水泉溝、

〔凌源〕—鐵廠子、龍鳳溝、五道溝、薄立口、松樹崗、石門子溝、康家溝、蛇立溝、平台子、邊家溝、博羅控、石門外、南哨、

〔建平〕—平頂溝、杉樹台、撰子山、綏東、ホイントン、

〔平泉〕—松樹台、黑山口、老君廟、三道溝、印子峪、密雲鄉、崗又廟、伏烈山、廟兒梁、蘇子山、東官溝子、イーケンチュン、

〔承德〕—西大窪、趕溝門、榆樹溝、甲山溝、王姑屯西溝、寶華山、

〔降化〕—西山、廣溝、紅廟、煤廟子、張三營、

〔豐南〕—兩間房、四道溝、

〔灤平〕—卑家店、羊毛嶺、張家村、

〔赤峰〕—柳條子、東元寶山、五家子、井子溝、西猴頭村、平頂山、西地兌溝、四道勾、煤密溝、松樹台、四家梁、張家溝、水泉子、瓦石溝、張保溝、南哨、五台面、西冷道溝、牌樓溝、西樹溝、南山、

〔圍場〕—小葦子溝、牛箱川、朝陽、灣子、後方山、

〔金 鑛〕

縣別産地名
 〔朝陽〕—雞冠二道溝、五家子、東毛子溝、小張子、奈曼溝、圍山子、各力各、楊家梁子、長阜、

〔阜新〕—新大塊溝、段力板小溝、馬耳朶營子、塔子溝、那邑溝、昭里營子、

〔灤平〕—廣子溝、紅旗地、八道河、大黑溝、大四虎溝、六道溝、興川鄉、朝河川、

〔平泉〕—鶴冠山、灤漢部界、公主陵長泉、滑泥窪子、

〔豐南〕—金廣溝、灤河支流沿岸、兩間房、官家營子西溝、梁家營子、小窩溝、罕嶺、寬溝、河南營子、牛崖子、王家營子、老家溝、九連溝、大營子、小兒溝、塔黃旗西溝、官商營子鄉、老仔溝、

〔圍場〕—五台子、錐子山、銀窩溝、

〔赤峰〕—紅花溝、蠟家莊、官杖金山、水泉兒礦山、白山吐、八里罕、八蘇台、金馬子溝、原林溝、蒙古蘇、黑河溝、熱水、金上山、喇嘛山、

〔林西〕—モンゴルオル、

〔銀 鑛〕

縣名産地名
 〔承德〕—啞叭店、洞子溝、承平銀鑛、遍山綫、大龐家溝、轆頂山、范家溝、平馬河、西大窪、三道河、萬石白溝、

〔平泉〕—黑山口、烟筒山、土槽子、鉛碓子、

〔豐南〕—山黑溝、鐵匠營、枯臣動山、羊毛嶺、

〔灤平〕—鵝瓜溝、岑溝、

〔朝陽〕—小塔子溝、

〔赤峰〕—長汗下羅溝、一背中、村金溝、銀銅子溝、大窩舖、馬家子南山、五家子、姑子山、

〔圍場〕—白山工

〔其他の諸鑛〕

()内は縣名
 銅—鷹窩川(承德)、九龍山(豐南)、銅洞溝、前洞子溝、四洞溝(平泉)
 鐵—松樹溝(承德)
 鉛—ハライコウオ(經棚)
 石綿—平頂山、馬架子西山(朝陽)金家杖子(建平)青石嶺、礦洞山(凌源)
 硝石—黑水、古山(建平)
 硫黃—大窪舖(平泉)
 クマ石—窟窿山(建平)
 石灰石—偏大溝(平泉)
 曹達—二道溝、泉湖、火燒梁子(灤平)ダライノール(董溝經棚)、白音板溝門兒
 石油鑛—九佛堂公營子北方

滿洲國產業

道 鐵



凡例

露 領 西 伯 利 亞

トレブ

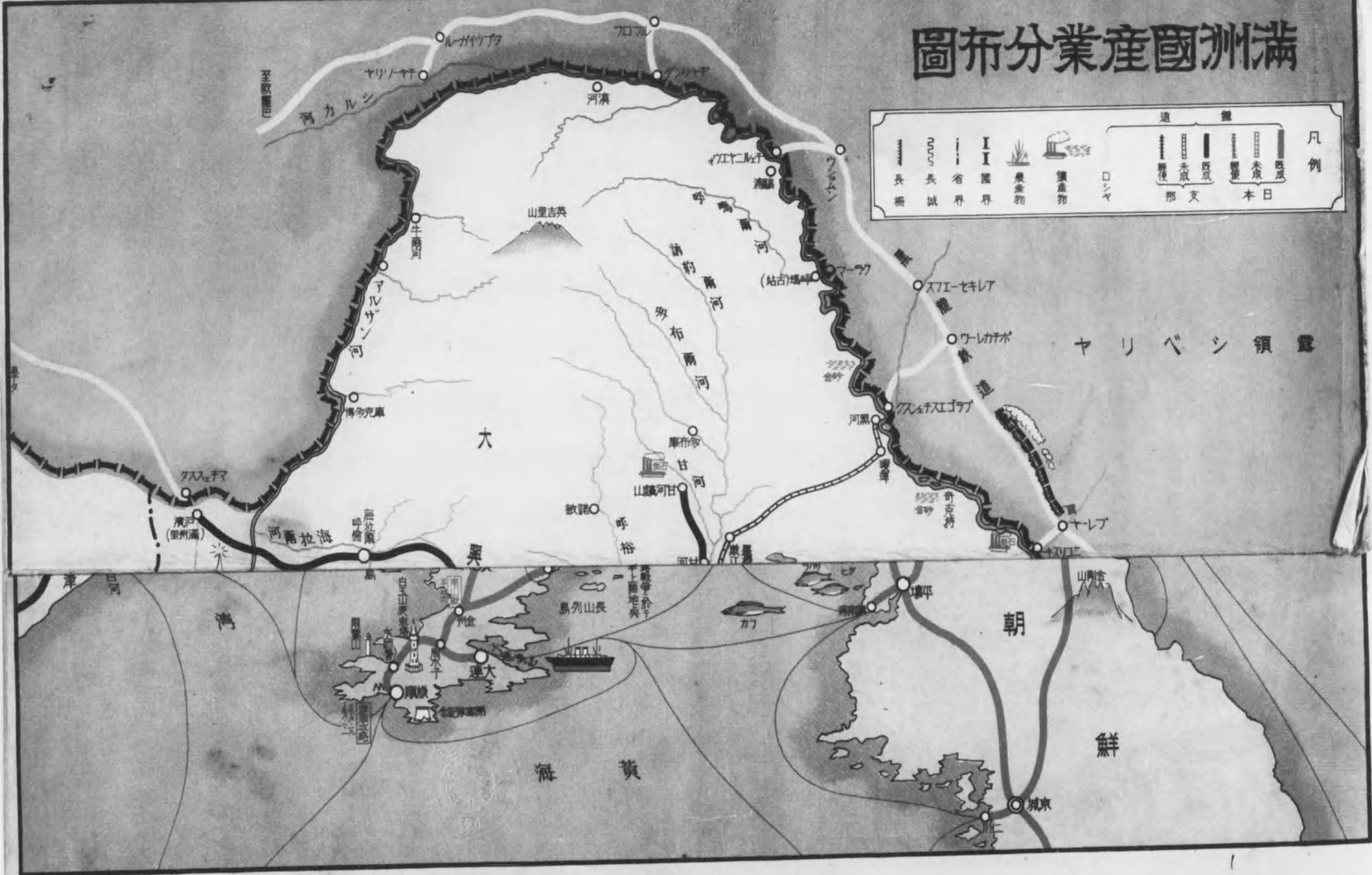
山門



鮮

滿洲國產業分佈圖

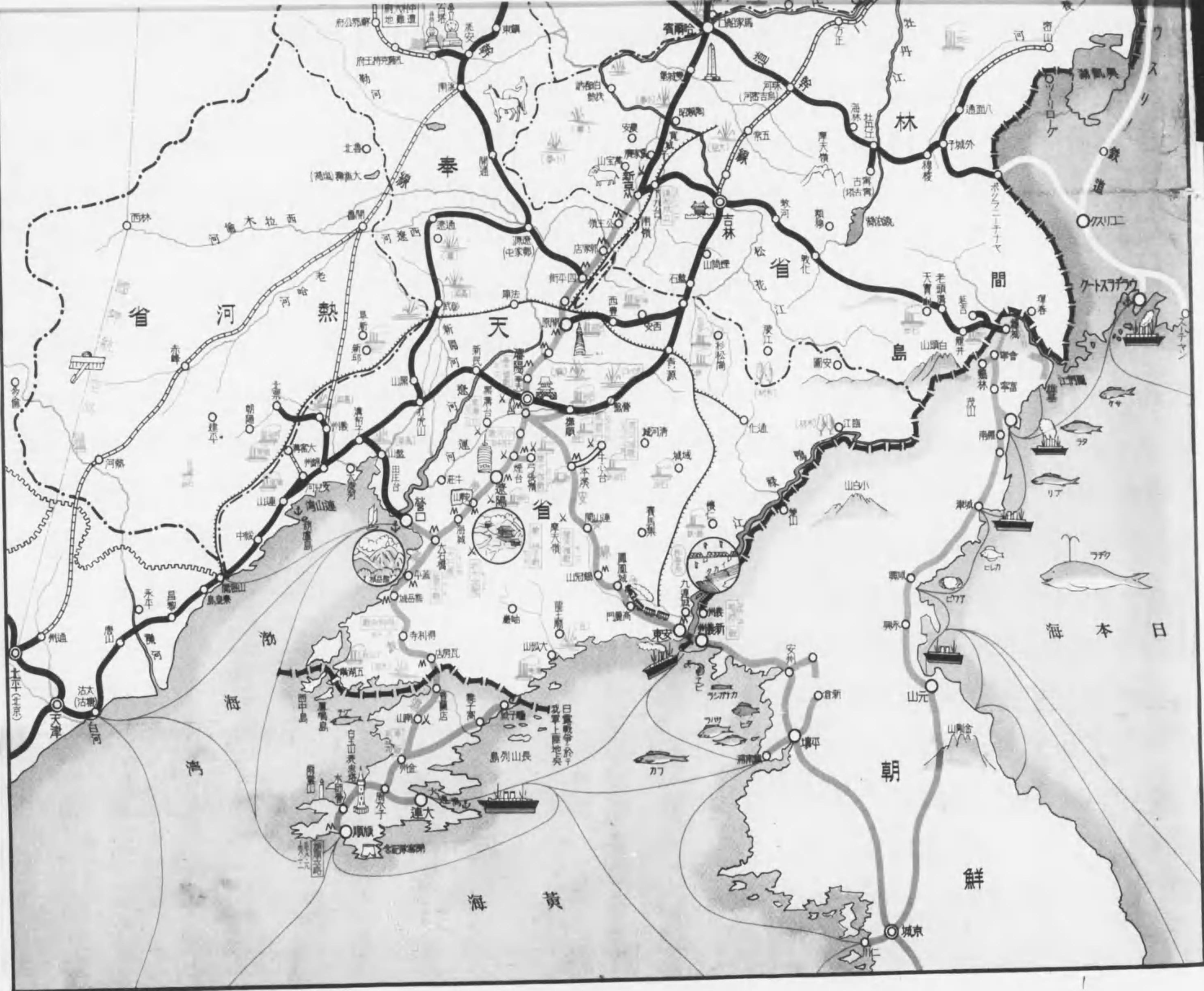
| | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|-----|-----|---|---|---|---|---|---|----|
| | | | | | | | | | | | | 凡例 |
| 長橋 | 長城 | 省界 | 國界 | 農産物 | 礦産物 | ロ | 道 | 支 | 本 | 支 | 日 | |



滿洲國產業分佈圖







Map of Northeast China (Manchuria) showing provinces and major cities.

滿蒙地理風俗寫眞大觀目次

寫眞の部

卷頭寫眞

萬里の長城……………

凍結氷上の碇泊船……………
大連港氷上の荷役作業……………
客を乗せた辻馬車……………

滿鐵線の海城驛……………
歴史的懐古味のある海城……………
海城の礮石山……………

滿蒙地理風俗寫眞大觀目次

寫眞の部

卷頭寫眞

| | |
|-----------|---|
| 萬里の長城 | 一 |
| 山海關の南門 | 一 |
| 喇嘛 | 二 |
| 法服を着けた喇嘛僧 | 二 |
| 喇嘛の法要 | 二 |
| 青年の喇嘛僧 | 二 |
| 熱河雜宮 | 三 |
| 承德雜宮内の銅殿 | 三 |
| 沙丘に残された銅像 | 四 |
| 蒙古人の放牧 | 四 |
| 境界を劃するオボ | 四 |
| 便利な轎子 | 五 |
| 古代の蒙古兵 | 五 |
| オボの祭り | 五 |

關東州

| | |
|------------|---|
| 旅順の關東廳 | 六 |
| 旅順工科大學 | 七 |
| 中蹠水師營會見所 | 八 |
| 簡靈山の記念碑 | 八 |
| 閉塞記念碑 | 八 |
| 英骨頭まる白玉山 | 九 |
| 東瀾河山北望臺の戦跡 | 九 |
| 北堡軍掩兵部の構造 | 九 |
| 大和ホテル | 七 |

大連

| | |
|--------------|----|
| 東洋第一大規模の大連港口 | 一〇 |
| 露西亞町埠頭の戎克 | 一〇 |
| 船客上陸の光景 | 一〇 |
| 賑ひ盛る常盤橋 | 一一 |
| 大連の港橋 | 一一 |
| 大連の小賣商店區域 | 一一 |
| 大連の大廣場 | 一一 |
| 中央公園の忠靈塔 | 一二 |
| 朝の大連大廣場 | 一二 |
| 中央公園の遊覽道路 | 一二 |
| 市役所の偉觀 | 一三 |
| 宏壯な大連醫院 | 一三 |
| 凍結した大連港 | 一四 |

旅大間

| | |
|-------------|----|
| 凍結水上の碇泊船 | 一四 |
| 大連港水上の荷役作業 | 一四 |
| 客を乗せた辻馬車 | 一四 |
| 小崗子の支那人市場 | 一五 |
| 西崗子の天齋廟 | 一五 |
| 埠頭に野積された特産物 | 一五 |
| 苦力部落のいろ／＼ | 一六 |
| 王家屯に於ける苦力部落 | 一六 |
| 寺兒溝苦力部落 | 一六 |
| 石磧屯の風景 | 一七 |
| 奇麗絶景の石磧屯 | 一七 |

金州

| | |
|-------------|----|
| 完全豪華な旅大道路 | 一八 |
| 陸繋ぎの小平島 | 一八 |
| 風光に富む肥王塘 | 一九 |
| 民衆的な海水浴場 | 一九 |
| 小千山の觀ある凌水寺 | 一九 |
| 金州城内の孔子廟 | 二〇 |
| 靜で緩やかな金州城内 | 二〇 |
| 城門を過ぐる蔬菜果物類 | 二〇 |
| 日露戦蹟南山 | 二二 |
| 殉節三烈士碑 | 二二 |
| 天齋廟の地獄極樂 | 二二 |
| 金州の龍王廟 | 二三 |
| 城下町の菓子屋 | 二三 |
| 金州の城壁 | 二三 |
| 秋趣豊かな金州城外 | 二三 |
| 潮波用の風車 | 二四 |
| 豆粕のみ積卸し | 二四 |
| 列車組成驛たる瓦房店 | 二五 |
| 高脚踊りの風俗 | 二五 |

滿鐵本線

| | |
|------------|----|
| 大石橋 | 二六 |
| 娘々祭の賑ひ | 二六 |
| 大石橋の娘々祭 | 二六 |
| 海城 | 二七 |
| 海城外々の股賑 | 二七 |
| 往時を偲ぶ古風な遺物 | 二七 |
| 市の日の海城 | 二八 |

| | |
|-------------|----|
| 滿鐵線の海城驛 | 二六 |
| 歴史的懐古味のある海城 | 二六 |
| 海城の磨石山 | 二六 |

柞木城

| | |
|----------|----|
| 柞木城の金塔 | 二七 |
| 柞木城の鐵塔 | 二七 |
| 荒廢せる柞木城 | 二七 |
| 柞木城外の姑嫂石 | 二七 |

湯崗子

| | |
|------------|----|
| 温泉地湯崗子 | 二七 |
| 祭禮に戴ふ婦人の髪飾 | 二七 |

千山

| | |
|------------|----|
| 千山の無量觀 | 二八 |
| 千山の龍泉寺 | 二八 |
| 無量觀の雄大な興味味 | 二八 |
| 千山の冬景(其一) | 二八 |
| 千山の冬景(其二) | 二八 |
| 無量觀境内の日時計 | 二八 |

鞍山

| | |
|-------------|----|
| 鞍山製鐵所の煉鐵爐 | 二九 |
| 驚くべき大きなシヨベル | 二九 |
| 渦巻く白煙中の煉鐵工場 | 二九 |
| 鞍山の特長たる貧鐵處理 | 二九 |
| 鞍山郊外の高粱種時 | 二九 |
| 大孤山の爆破坑 | 二九 |
| 大孤山の爆破作業 | 二九 |
| 鞍山郊外の一情景 | 二九 |
| 八卦溝の鑄物部落 | 二九 |
| 野積された鞍山の鉄鐵 | 二九 |

遼陽

| | |
|-------------|----|
| 遼陽の白塔 | 三〇 |
| 遼陽蓮花寺の古墳 | 三〇 |
| 遼陽の大東門附近 | 三〇 |
| 遼陽の東京陵 | 三〇 |
| 古趣を偲ばるゝ遼陽の春 | 三〇 |
| 春の遼陽城内 | 三〇 |
| 古風な遼陽の酒造家 | 三〇 |
| 史實を語る遼陽の戦蹟 | 三〇 |
| 物凄き遼河の流水 | 三〇 |
| 蘇生する春の遼河 | 三〇 |

奉天

奉天の附屬地帯…………… 四〇
 四通八達の奉天驛…………… 四〇
 乗物で埋まる驛頭…………… 四〇
 奉天の浪速通り…………… 四〇
 銀座の觀ある四平街通り…………… 四〇
 奉天の城内目貫市街…………… 四〇
 奉天の鐵道交通…………… 四〇
 東北無線電信臺…………… 四〇
 奉天の忠靈塔…………… 四〇
 大廣場の壯觀…………… 四〇
 冬期の奉天市街…………… 四〇
 奉天公園の冬…………… 四〇
 奉天財政廳…………… 四〇
 奉天の北大營…………… 四〇
 張學良の舊邸…………… 四〇
 北陵の石牌樓…………… 四〇
 奉天の北陵…………… 四〇
 奉天城内の宮殿…………… 四〇
 萬泉河の蓮花…………… 四〇
 元日接神の式…………… 四〇
 法輪寺の天地佛…………… 四〇

撫順
 石炭の霸王撫順…………… 四〇
 壯觀人を驚す露天掘…………… 四〇
 撫順の坑夫…………… 四〇
 歡樂園から見た撫順…………… 四〇
 撫順のスキップ捲上装置…………… 四〇
 一捲三トン波ふ電気シヨベル…………… 四〇
 爆破作業…………… 四〇
 スチームシヨベルの活動…………… 四〇
 撫順の粗製炭處分…………… 四〇
 撫順油母頁岩…………… 四〇

四平街
 内蒙古の入口四平街驛…………… 四〇
 物騒な設備のある宿舎…………… 四〇
 巡察する鐵道守備隊…………… 四〇

開原
 開原の大豆園積…………… 四〇
 吉力の生活…………… 四〇

昌圖

榆樹城の名ある昌圖…………… 四〇
 羊を追ふ農民の來往…………… 四〇
公主嶺
 發達せる公主嶺の支那街…………… 四〇
 大規模な農事試驗場…………… 四〇
 公主嶺附近の部落…………… 四〇
 地名の因を爲す公主嶺…………… 四〇
 大規模な農事試驗場…………… 四〇

范家屯
 枕木の一幕…………… 四〇
 特色ある街頭の招牌…………… 四〇

長春
 獨立守備隊兵營…………… 四〇
 日本の經營に成る長春市街…………… 四〇
 國際的な長春公園…………… 四〇
 糧糧街の光景…………… 四〇
 三大線聯絡の長春驛…………… 四〇
 長春の城内…………… 四〇
 滿鐵線の有數な公園…………… 四〇
 露國式田舎町の寛城下…………… 四〇

安奉沿線方面
本溪湖
 炭鐵兩有の本溪湖…………… 四〇
 本溪湖の煉鐵爐…………… 四〇
 歴史を偲ばるゝ妻工業…………… 四〇
 本溪湖山の龍洞…………… 四〇
 炭鐵都市の支那町…………… 四〇
 河西街の石炭窯…………… 四〇
 宮の原の記念碑…………… 四〇

太子河
 筏と舟で賑ふ太子河…………… 四〇
 河面を蔽ふ流材…………… 四〇
 太子河下り…………… 四〇
 太子河のほとり…………… 四〇

橋頭附近
 陳相屯の塔山…………… 四〇
 溪谷の觀音寺…………… 四〇
 橋頭の朝陽寺…………… 四〇
 釣魚臺の奇勝…………… 四〇

吉林

細河の溪谷…………… 四〇
 安奉線の山色水美…………… 四〇
 細河畔の香磨…………… 四〇

連山關
 景観に富む連山關附近…………… 四〇
 雪の連山關附近…………… 四〇
 箱根の嶮に似た摩天嶺…………… 四〇
 連山關附近の乗合船…………… 四〇
 古い歴史ある舊連山關…………… 四〇

鳳凰山
 雄大壯觀の裏鳳凰…………… 四〇
 鳳凰山中の雲陽觀…………… 四〇
 鳳凰山上の忽比烈塔…………… 四〇
 高句麗時代を語る古城址…………… 四〇
 大摩石に蔽はれた洞窟…………… 四〇
 景観美に富む高麗山嶺…………… 四〇
 鳳凰山の登山口…………… 四〇
 懸崖の觀音閣…………… 四〇
 高麗山の將軍腰掛岩…………… 四〇
 鳳凰城内の市街…………… 四〇

吉林省
 處女の新橋…………… 四〇
 吉林省黨部…………… 四〇

ハルビン
 繁華なハルビン市街…………… 四〇
 ハルビン停車場…………… 四〇
 ハルビンの西瓜市場…………… 四〇
 ハルビンの滿鐵事務所…………… 四〇
 ハルビン驛屋上に懸る新社旗…………… 四〇
 キタイスカヤ街…………… 四〇
 賑へる一家句…………… 四〇
 ハルビン新市街…………… 四〇
 ホツケーの遊技…………… 四〇
 愉快な禮あそび…………… 四〇
 ハルビン郊外所見…………… 四〇
 悲慘な街頭の情景…………… 四〇

黑龍江省
 齊々哈爾濱附近の葬送風俗…………… 四〇
 齊々哈爾濱城内…………… 四〇
 海拉爾街頭の情景…………… 四〇

曠原を行く牛車…………… 九〇
 滿洲里の日本領事館…………… 九〇
 滿洲里市街の展望…………… 九〇
 滿洲里停車場…………… 九〇

森林の霜の花…………… 一〇一
 興安嶺の白樺の森…………… 一〇一
 雪中の袖小屋…………… 一〇一
 森林中の放牧…………… 一〇一

錦州の名産漬物…………… 一一七
 古城壁を構へた義縣…………… 一一七
 錦縣の市街…………… 一一七
 古門に彩られた市街…………… 一一七

| | |
|------------------|-----|
| 曠原を行く牛車 | 九七 |
| 滿洲里の日本領事館 | 九八 |
| 滿洲里市街の展望 | 九九 |
| 滿洲里停車場 | 一〇〇 |
| 滿洲里街頭の駱駝 | 一〇一 |
| 北滿方面(吉林省) | |
| 東寧 | 九六 |
| 東寧縣の城東門 | 九六 |
| 海林 | 九八 |
| 林業に知られた海林 | 九八 |
| 海林街頭の藝術味 | 九八 |
| 海林の高原地帯 | 九八 |
| 海林河の流し筏 | 九八 |
| 阿什河 | 九八 |
| 阿什河の朝陽門 | 九八 |
| 異色ある酒屋の門 | 九八 |
| 寧古塔 | 九八 |
| 北滿の要衝寧古塔 | 九八 |
| 小學生募集のピラ | 九八 |
| 寧古塔市街 | 九八 |
| 寧古塔の鮮人小兒 | 九八 |
| 東京城 | 九八 |
| 東京城に於ける護衛兵 | 九八 |
| 興隆寺の石香爐 | 九八 |
| 靈魂を祭る神杆 | 九八 |
| 一面坡 | 九八 |
| 驢馬の粟粉挽 | 九八 |
| ホップの栽培 | 九八 |
| 風光明媚の一面坡 | 九八 |
| 松花江 | 九八 |
| 松花江に働く交通機關 | 九八 |
| 松花江畔の涼み | 九八 |
| 結氷した松花江 | 九八 |
| 氷上の驢馬車と自動車 | 九八 |
| 松花江の鐵橋 | 九八 |
| 興安嶺 | 九八 |
| 興安嶺の落葉松相(其一) | 九八 |
| 興安嶺の落葉松相(其二) | 九八 |
| 斧で割る牛肉の凍結 | 九八 |
| 興安嶺山中の樵夫風俗 | 九八 |

| | |
|--------------|-----|
| 森林の霜の花 | 一〇一 |
| 興安嶺の白樺の森 | 一〇一 |
| 雪中の袖小屋 | 一〇一 |
| 森林中の放牧 | 一〇一 |
| 北滿地方の穴居生活 | 一〇一 |
| 興安嶺中の樵作業 | 一〇一 |
| スレッパの置場 | 一〇一 |
| 製材場の柚作業 | 一〇一 |
| 嫁入り道中(其一) | 一〇一 |
| 嫁入り道中(其二) | 一〇一 |
| 華やかに彩る花樓 | 一〇一 |
| 國境市街綏芬河 | 一〇一 |
| 綏芬河の市街 | 一〇一 |
| 蒙古 | 一〇一 |
| 蒙古の旗長 | 一〇一 |
| 蒙古貿易の旅商 | 一〇一 |
| 蒙古の井戸 | 一〇一 |
| メーリン廟の喇嘛塔 | 一〇一 |
| 喇嘛教の神闍君の像 | 一〇一 |
| 宏壯なる茂林廟本堂 | 一〇一 |
| 沙漠の黎明 | 一〇一 |
| コロンバイル曠原の放牧 | 一〇一 |
| 曠原の駱駝隊 | 一〇一 |
| 蒙古原頭の牛車 | 一〇一 |
| 塗上の四ツ目井戸 | 一〇一 |
| 蒙古の牛乳搾取 | 一〇一 |
| 貯蔵さるゝ牛糞 | 一〇一 |
| 阿巴喝人 | 一〇一 |
| 水煙管を吸ふ蒙古人 | 一〇一 |
| 蒙古人の弓術 | 一〇一 |
| 蒙古人の婦人 | 一〇一 |
| 蒙古人の相撲 | 一〇一 |
| 蒙古包のいろく | 一〇一 |
| 窓のある蒙古包 | 一〇一 |
| 沙丘の旅 | 一〇一 |
| 包の前に並んだ蒙古の家族 | 一〇一 |
| 蒙古馬の放牧 | 一〇一 |
| 裝飾を施した蒙古包 | 一〇一 |
| 典型的蒙古美人 | 一〇一 |

| | |
|-----------------|-----|
| 錦州の名産漬物 | 一一四 |
| 古城壁を構へた義縣 | 一一六 |
| 錦縣の市街 | 一一七 |
| 古門に彩られた市街 | 一一七 |
| 醫巫閭山 | 一一八 |
| 奇景に富む醫巫閭山 | 一一八 |
| 醫巫閭山の傳説 | 一一八 |
| 熱河省 | 一一九 |
| 新立屯の質屋 | 一一九 |
| 族塚の猿舞し | 一一九 |
| 双塔山 | 一一九 |
| 熱河附近の馱駝 | 一一九 |
| 朝陽の三座塔 | 一一九 |
| 龍巻に見舞はるゝ北票 | 一一九 |
| 朝陽の市街 | 一一九 |
| 小娘の枕賣り | 一一九 |
| 正月二日の拜神 | 一一九 |
| 清時代建築の後廟 | 一一九 |
| 通遼附近の莫林廟 | 一一九 |
| 熱河の大佛寺 | 一一九 |
| 林西の西門 | 一一九 |
| 山海關方面 | 一二〇 |
| 二郎廟附近の風光 | 一二〇 |
| 山頂の二郎廟 | 一二〇 |
| 玄陽洞附近の岩窟 | 一二〇 |
| 展堂に富む角山寺 | 一二〇 |
| 山海關を守る支那兵 | 一二〇 |
| 山海關樓覽寺前庭 | 一二〇 |
| 古北口附近の萬里の長城(其一) | 一二〇 |
| 山海關城外の群羊 | 一二〇 |
| 古北口附近の萬里の長城(其二) | 一二〇 |

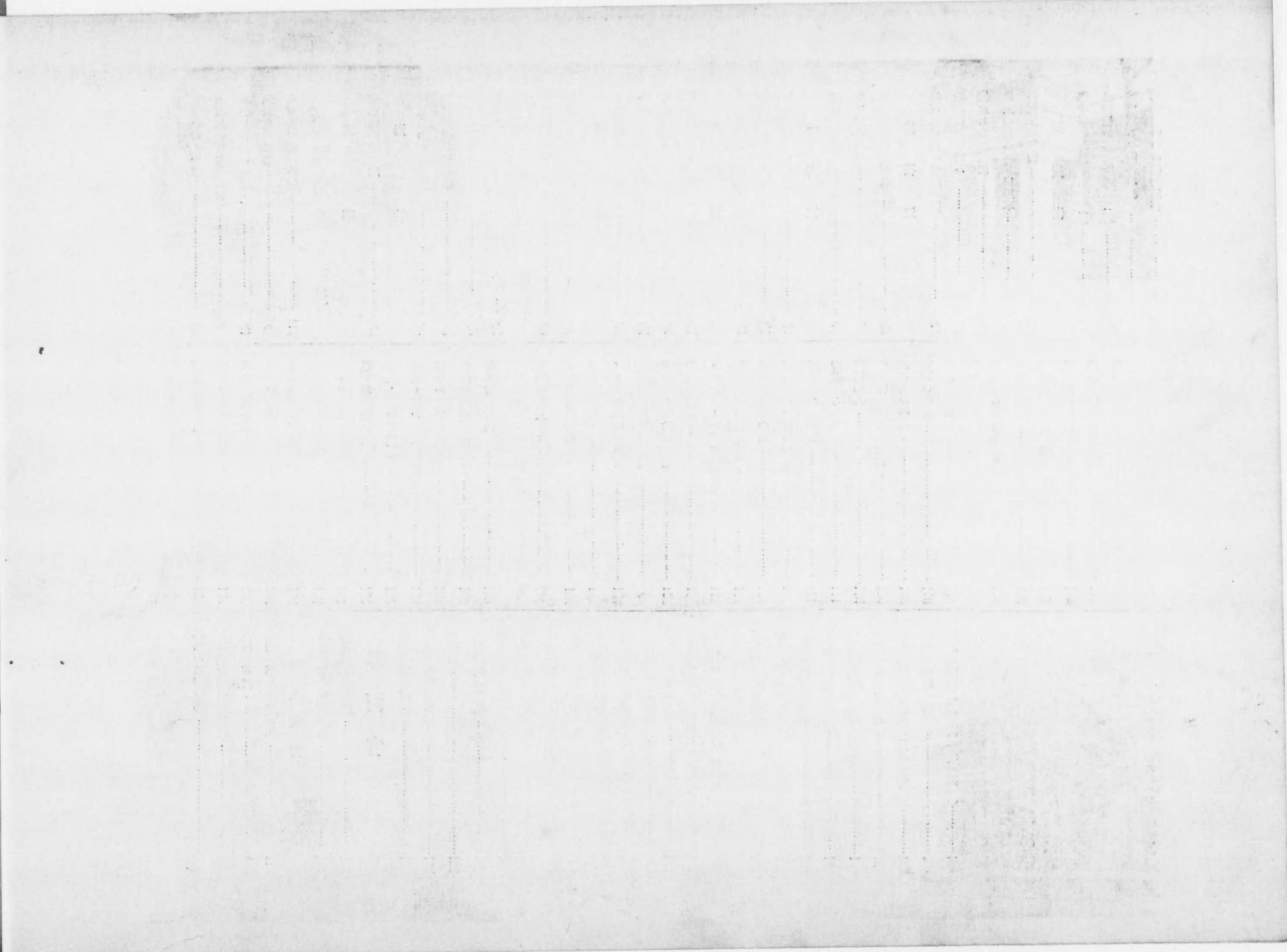
錦州方面

滿蒙地理風俗寫真大觀目次終

滿洲
執政

滿洲國の民政部は、其建物は大正十三年
軍院跡を以て充てられて居る、屋上には
滿洲國の表徴たる五色旗が翻動として
掲げられてある。此の民政部の部長は敏
腕を以て知らるゝ臧式毅氏で、氏は鋭意
内政の革進に力めらる。

滿洲國民政部下圖 ↓





滿洲國元首相
前首相 渡邊 氏

滿洲國の民政部は、其建物は元吉林陸軍病院跡を以て充てられて居る、屋上には滿洲國の表徴たる五色旗が翻翻として掲げられてある。此の民政部の部長は敏腕を以て知らるゝ威式毅氏で、氏は鋭意内政の革進に力めつゝある。
因に、滿洲國の民政部は、日本の内務省に相當するものである。

滿洲國民政部 下圖 ↓

執政府(上左圖)
執政府は滿洲國の元首たる執政溥儀氏が政務をみそなはさるゝ所にして、滿洲國新國家創設に際して、政府組織法を始め人權保障法、各院官制等は總て此の執政府から發表されたのである



參議府、國務院 (中央圖)

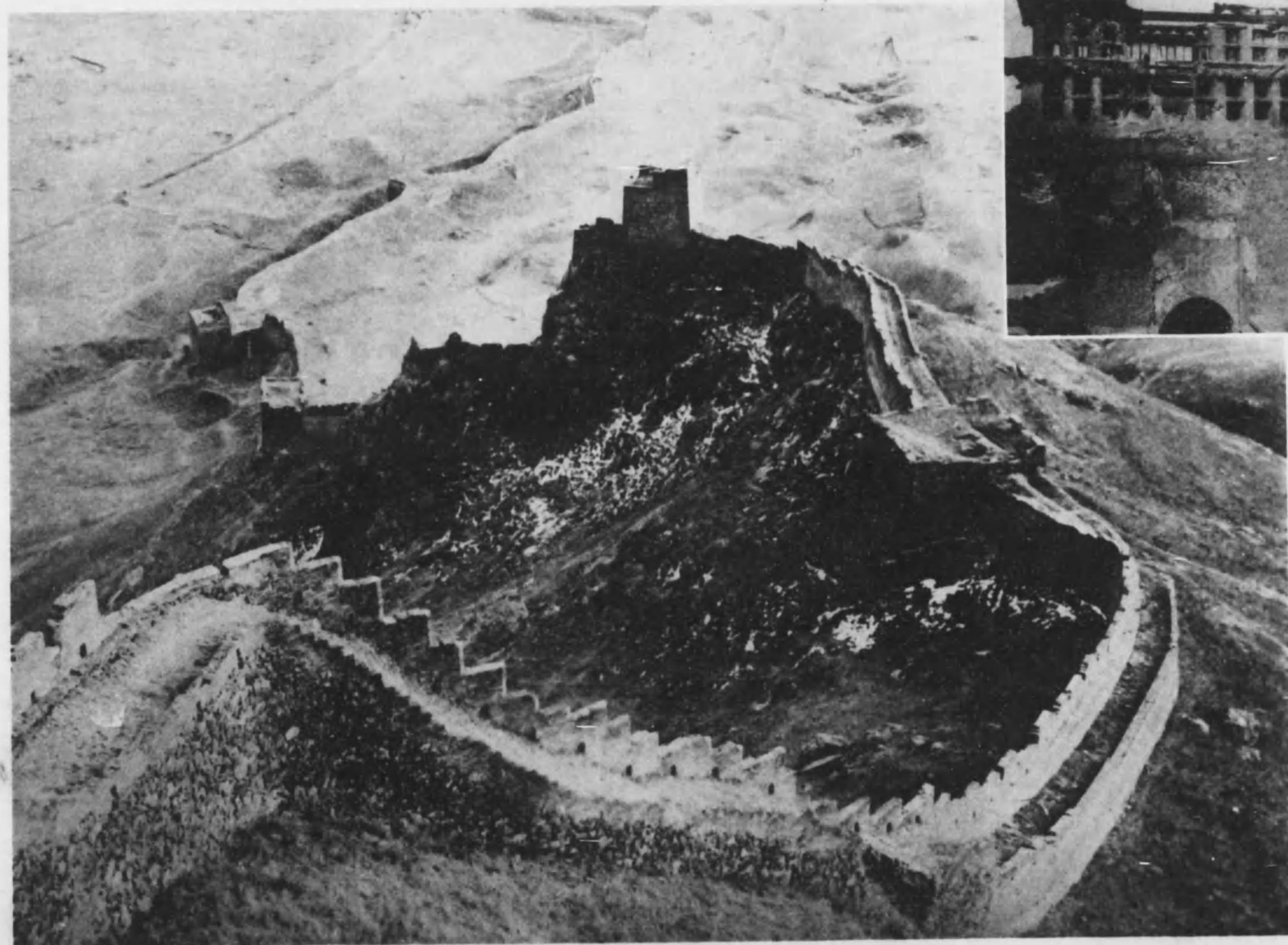
寫眞は、左右に掛けられた標記の如く一方が參議府と法制局、一方が國務院と外交部である。國務院は其の總理として鄭孝胥氏が就任され、外交部は其の總長に謝介石氏が就任されて居る。參議府は執政の諮詢に應ふるもので、日本の樞密院に相當するもので、其の権限は頗る大きい、參議府の議長は張惠景氏である。

滿洲中央銀行總行 (下圖)
當行は大同元年七月一日創設されたもので、日本の日本銀行に相當する使命を有するものである。而して當行は滿洲の紊亂せる金融市場を肅清せんとする大抱負を有し、激漸なる活色の希望に充ちて居る。

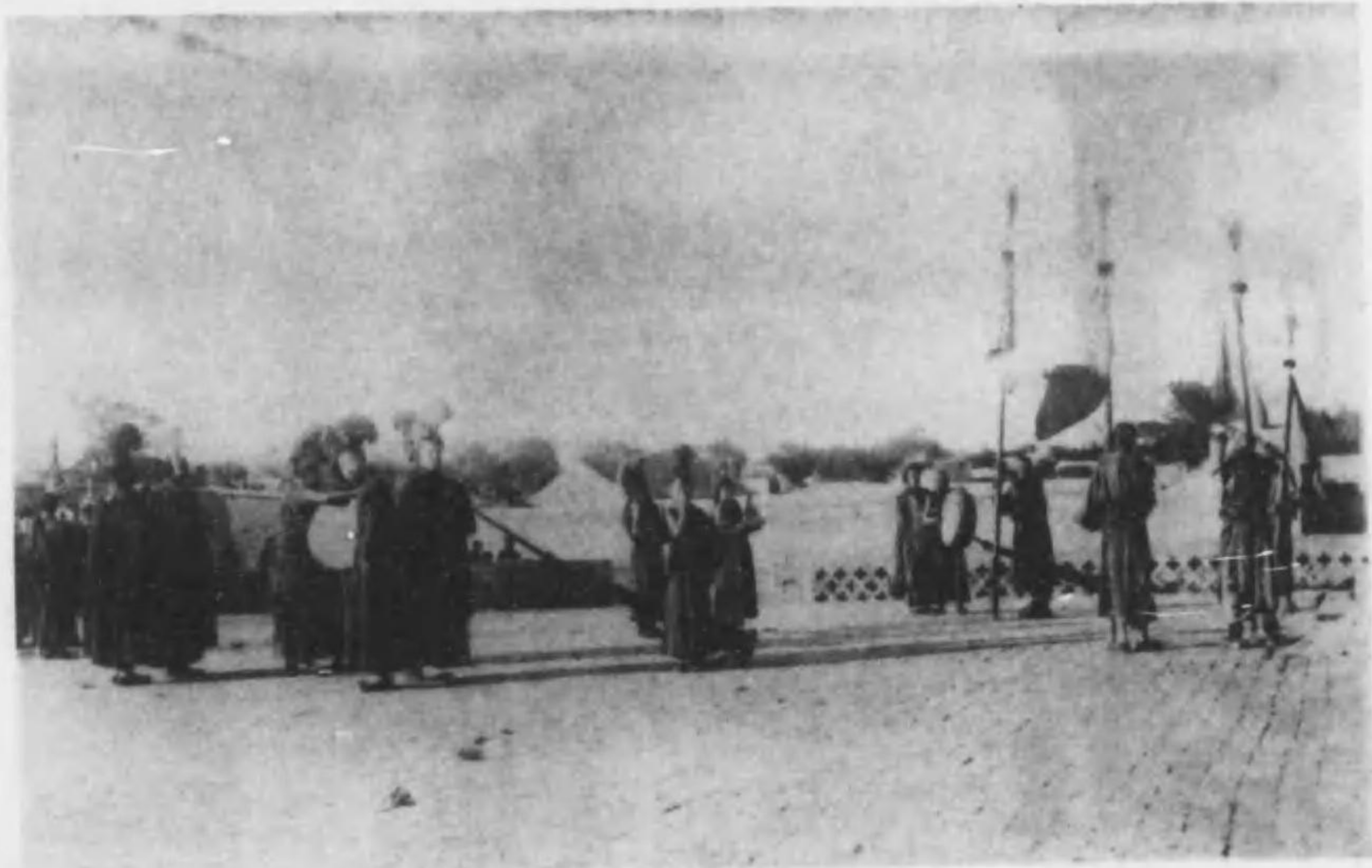


城 長 の 里 萬

。城長の里萬れ是謂所たれか築てつ互に里餘百七る至に關海山の省北河らか洮臨の省肅甘



(上圖) 山海關の南門 天下第一關と稱せらるゝ著名な山海關の南門



喇嘛の法要 (上右圖)

年中行事として季節々々に行はるゝ喇嘛の法要は、頗る異國的情調に富んだものである。寫真に見る如く頭上を羽にてふきくと飾つた鶏のトサカの様な毛冠を頂きマント被つて居る。此の喇嘛の服装は長さ二間にも達する喇嘛特殊の太鼓の音楽を奏して旗、差物などの行列で練り行く。



法服を着けた喇嘛僧 (上右圖)

寫真は喇嘛教の教義を傳ふる高僧、即ち喇嘛僧であつて其の着せる服装は該教の規定された法服である。如何に其の嚴かに綺麗美やかな服装に接して該教主の威嚴さが窺はれる。



青年の喇嘛僧

寫真は喇嘛教の青年僧である。喇嘛教の慣習規律として、長男以外の者は年齢七歳に達すると喇嘛寺に入るべき義務があると云ふ事である。此の寫真に見る青年喇嘛僧の服装は、年若き喇嘛僧の規定の正装で、其の手にして居るのは鶏冠帽である。

喇嘛 (下左圖)

原來喇嘛教は西曆七百四十三年西藏に興つた佛教の一派であつて、此の教の祖と云ふのは巴特瑪撒巴幹と云ふ者である。此の教義を奉ずる高僧をラマと云ふ。支那では元の末、明の初期に隆盛を極めたが、明朝の中頃喇嘛教は紅教と黃教の二派に分れ、其後紅教は殆んど滅亡して黃教が盛に行はれて居る。



殿銅の内宮離德承



宮離河熱

代時朝明、たつあで圖版の共はに代時遼はくし若代時金く古、し脱離は或し屬隸に那支は昔は河熱
 時の宗高し稱と州德承てし爲を體形會都く漸てし加増口人に頓てつなに朝清がたつかなは振向一はに
 英は國清年十豐成後其たし置設を督都河熱に年五十慶嘉の宗仁、たし稱と府德承てし屬に省隸直はに
 。るあで宮離共は眞寫。たつあでのたし塵蒙に河熱は帝宗文れさ撃侵を京北め爲の軍合聯佛



（上圖）承德離宮は熱河離宮のことである。寫眞は離宮内の銅殿の壯觀で
 一見當時の隆盛を偲ばれる。

境界を劃するオボ (右下圖)
 蒙古王族の屬領地を旗と稱し、其族の各自に領する領域境界を劃する爲め標基を建て置く、之をオボと稱す。寫眞は即ち境界地點に建てられたオボである。



放牧された羊群 (上圖)
 水草を逐ふて移住する蒙古人は牧畜が唯一の生活基本である。彼等が日常の挨拶交話にも先づ家畜牧草の近状などを語りて後、要談に移るといふ。寫眞は放牧されて居る羊の群である。



沙丘に残された獨體 (左下圖)
 蒙古人の葬儀は其階級に由て種々風習が異つて居る。火葬にして骨を粉碎し米粉と練り固めて壘場に納むるもの、又は死體を棺に納めて埋葬するもの或は屍を山頂若しくは谷底に墮び行きて獸禽の咬啄に委すものもある。而して山野に放置した屍が三日を過ぎて咬啄されぬ時は喇嘛僧を頼みて讀經すると云ふ。寫眞は沙丘に放置された屍の名残であらう。



兵古蒙の代古

暫は前以代時元、がる居てし有を史歴の亡興族民かびた幾にけだい古、い古てめ極は史歴の古蒙の斯たつあで年四十三百二千元紀に實はのたし稱と元を號國てし倒歴を土全の那支が古蒙、き措く連を眞木鐵ち即祖太るた祖始の元にも直ばへ云と兵古蒙の代古、で敢勇る顔は族民古蒙の代古き如。るれは窺が貌風きしま勇るす驅疾てり跨に馬古蒙るた測設、で兵古蒙の代古は眞寫。るれさ想



便利な轎子 (上圖)

山地帯の熱河に於ける交通運搬の機關としては、車以外に馬を利用されて居るのは、頗る便利に思はれる、此の馬背に由るものを駄轎と稱して居る而かも此の駄轎の外に人夫に由て轎を利用されて居るものを轎子と稱す、寫眞は即ち人夫の手界によつて運ばるゝ轎子の情景である。



オボの祭り (下圖)

蒙古に於ける所謂オボとは旗を稱するのである。由來蒙古人は旗を單位として、夫々旗長の下に自治遊牧の生活を送つたもので、此の旗即ちオボは其の領有の境界地點に設けられてある。之を旗盟と稱し、之れが政治的に制定されたのは前清時代である。寫眞は蒙古で行はるゝオボ祭りである。



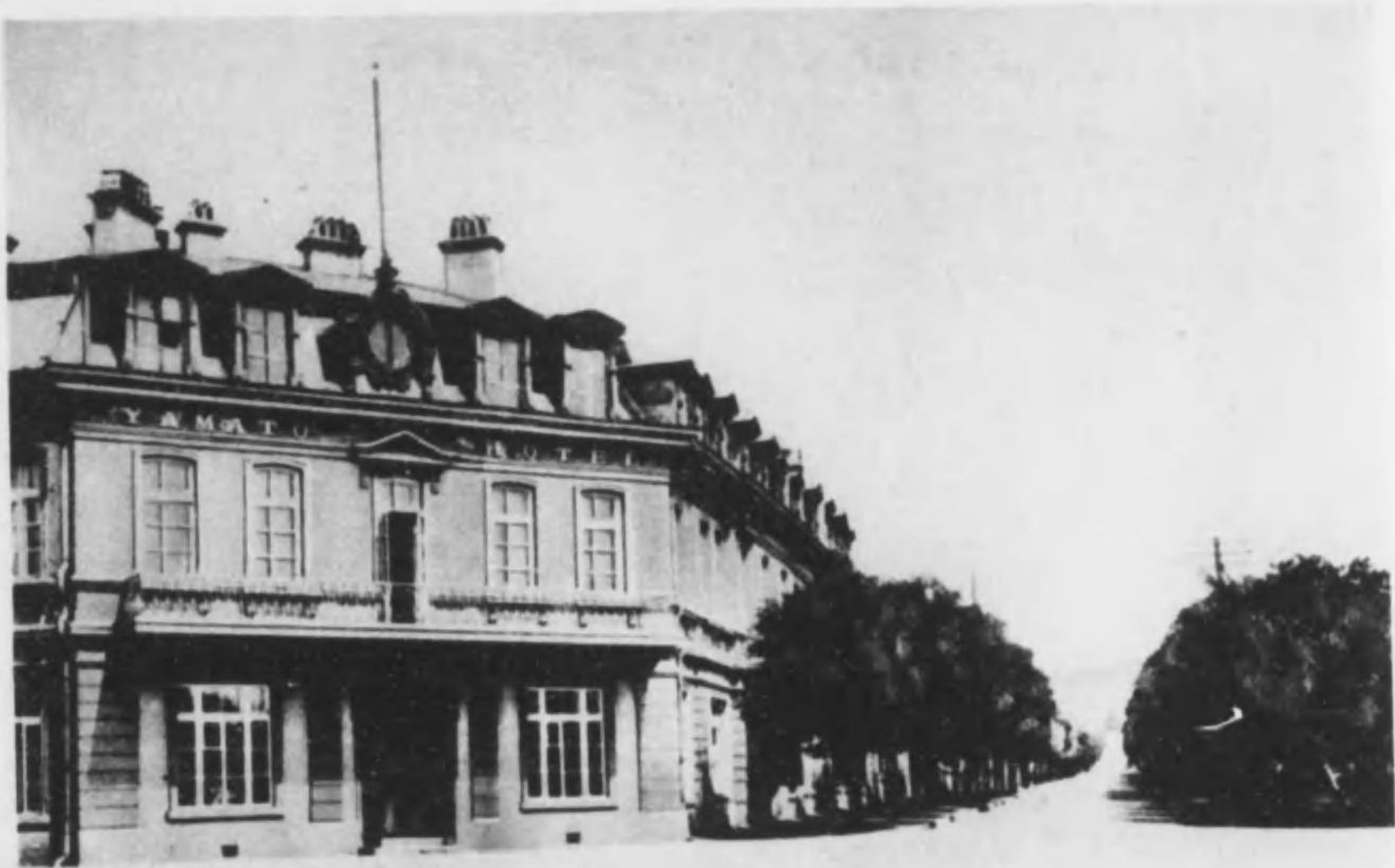
奉天財政廳

所謂是れ奉天の大蔵省なるもの、張學良が東北四省に暴威を揮ひつゝあつた當時、省民の膏血を絞つて、否でも應でも納税せしめずには措かなかつたことは言ふまでもない其の本案本元の財政廳である。寫眞は即ち其の外観で正面には奉天財政廳と題し、下方左に遼寧財政、右に遼寧印花稅處と記されてある。



旅順口關東廳

關東州々治の主腦である關東廳は旅順に在て關東州の管轄、南滿鐵道線路の警務取締、滿鐵會社業務の監督、政務執行の廳令發布は總て當廳の權限に屬するものである。寫眞は其堂々たる外観であつて、廳内は長官々房内務局、警務局、財務部等に分れて居る。



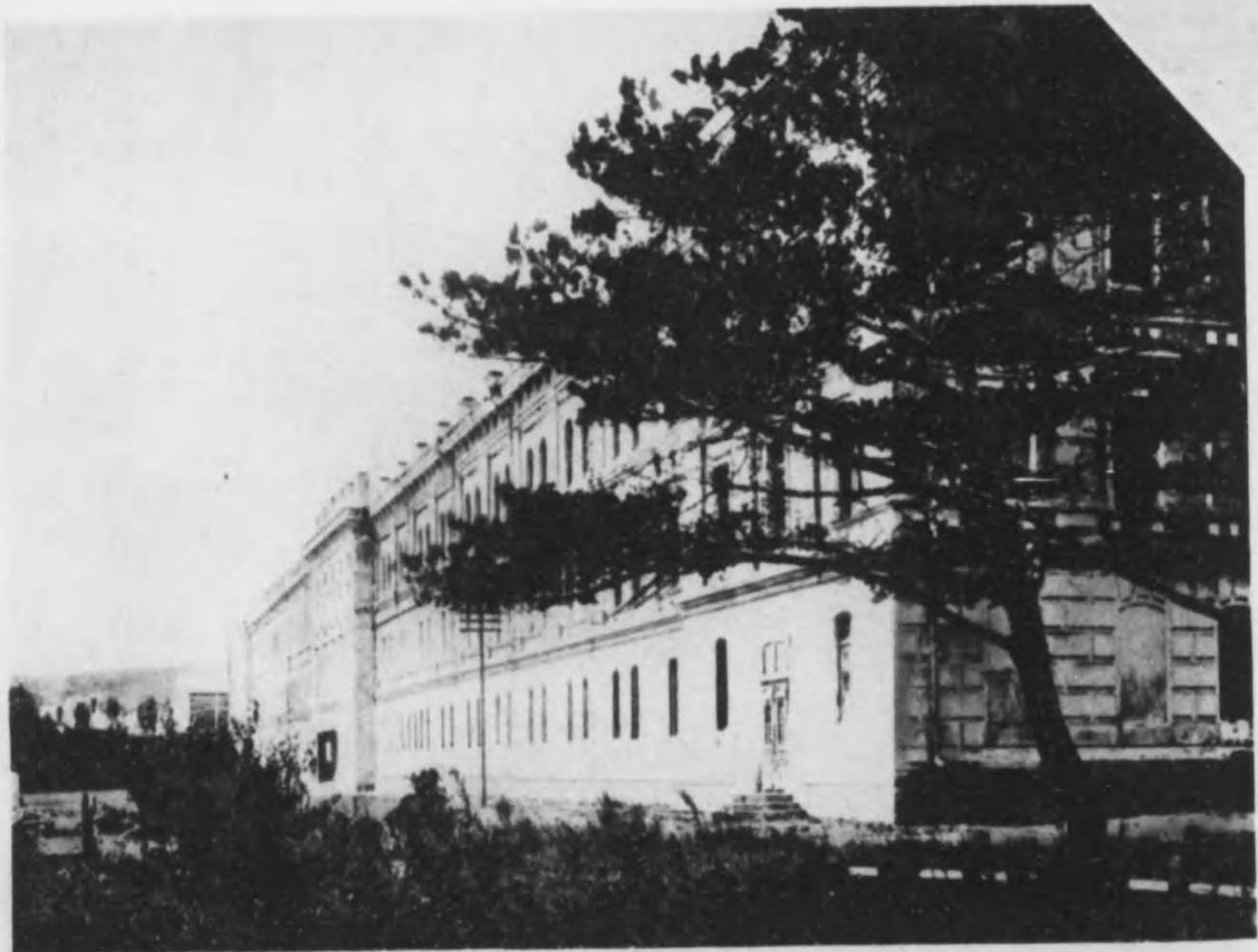
旅順の大和ホテル

旅順の旅館中に於て第一指を屈せらるゝは大和ホテルである。當ホテルは新市街の中村町に所在し、洋式客室數十五、食堂、應接室、球場、酒場、喫煙室、等、諸種の設備完全し、建築の雄麗壯觀は群旅館を壓するの概がある。

旅順の工科大学

工科大学は旅順の新市街に所在し、舊露國の海兵團を改造修築したものである。其構造は横に長くして、其長さは七十三間に及んで居る。

當大學は大學令による單科大学で、滿洲では奉天の醫科大學と共に最高の學府である。科は機械工學、電氣工學、採鑛學、冶金學の四科に分れ、修業年限は三ヶ年である。



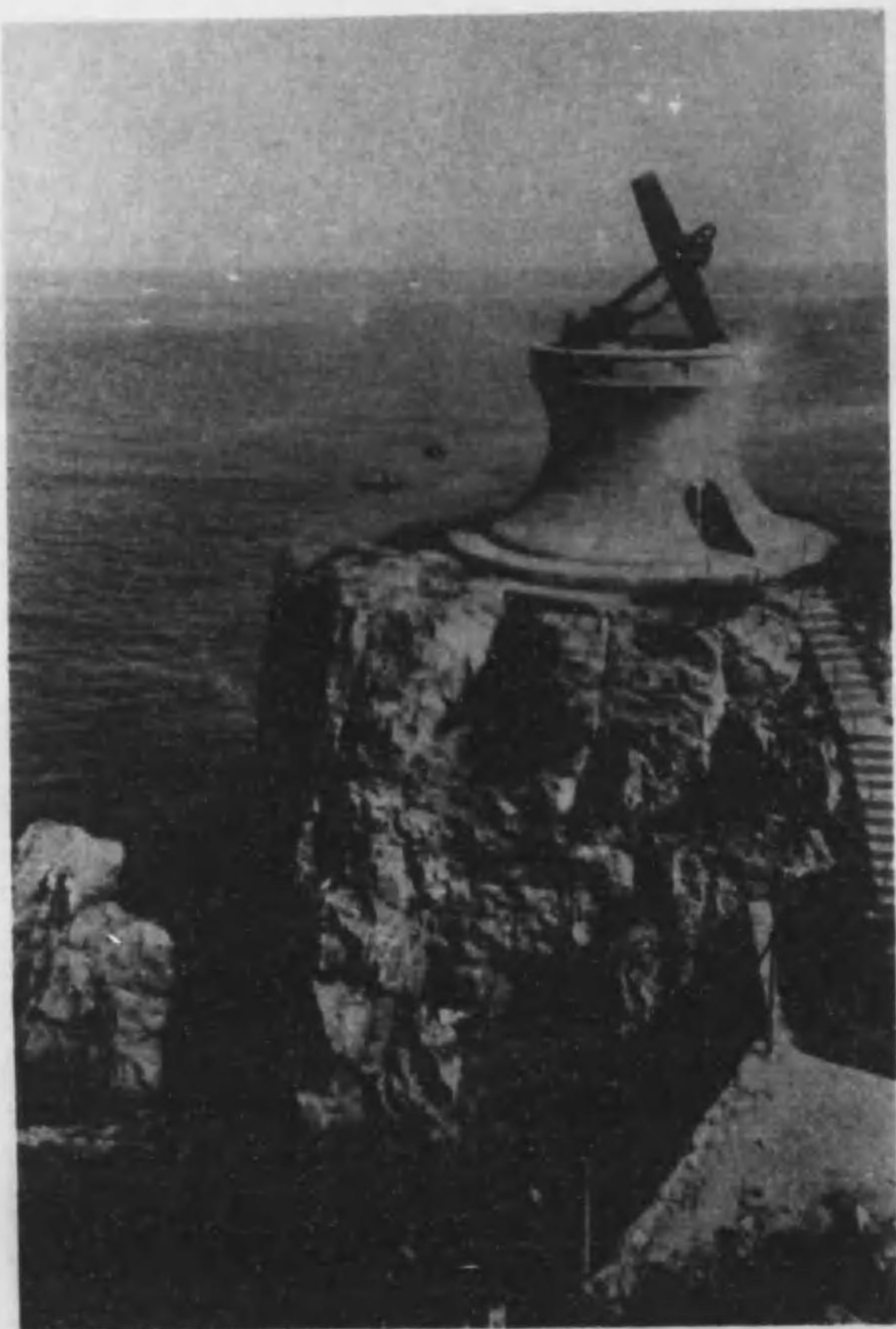
史蹟水師營會見所

日露戦争の際、旅順半島に於ける、乃木将軍の死所。此の地は、水師營の跡にして、歴史的名所。乃木将軍の死後、此の地を會見所とする。日露戦争の際、旅順半島に於ける、乃木将軍の死所。此の地は、水師營の跡にして、歴史的名所。乃木将軍の死後、此の地を會見所とする。



閉塞記念碑

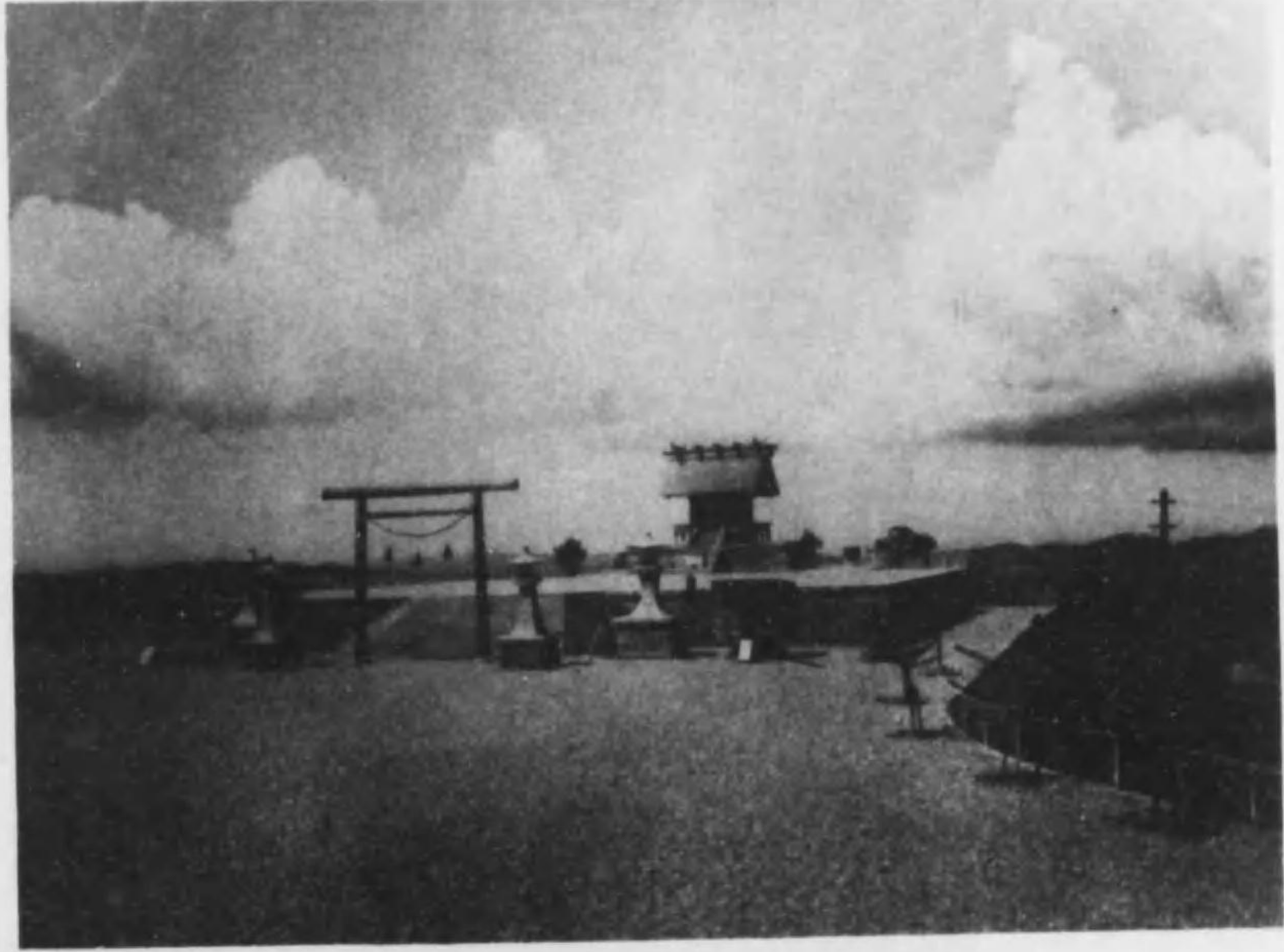
旅順の閉塞記念碑は、旅順港口の燈臺下に立つて居る。碑は圓形の臺石上に礎を置き、東郷大將の筆になる「旅順港口閉塞記念」の八字が刻まれてある。若し夫れ白玉山頂に登つて此の碑を望みせんか、我が海軍が三回に亘りて港口閉塞を遂行した壯烈なる歴史は今も燈臺下に碎くる巨巖の上の波浪の上にもハツキリと浮ばれて漫るに日露戦争の當時を偲ぶるゝのである。



爾靈山の記念碑

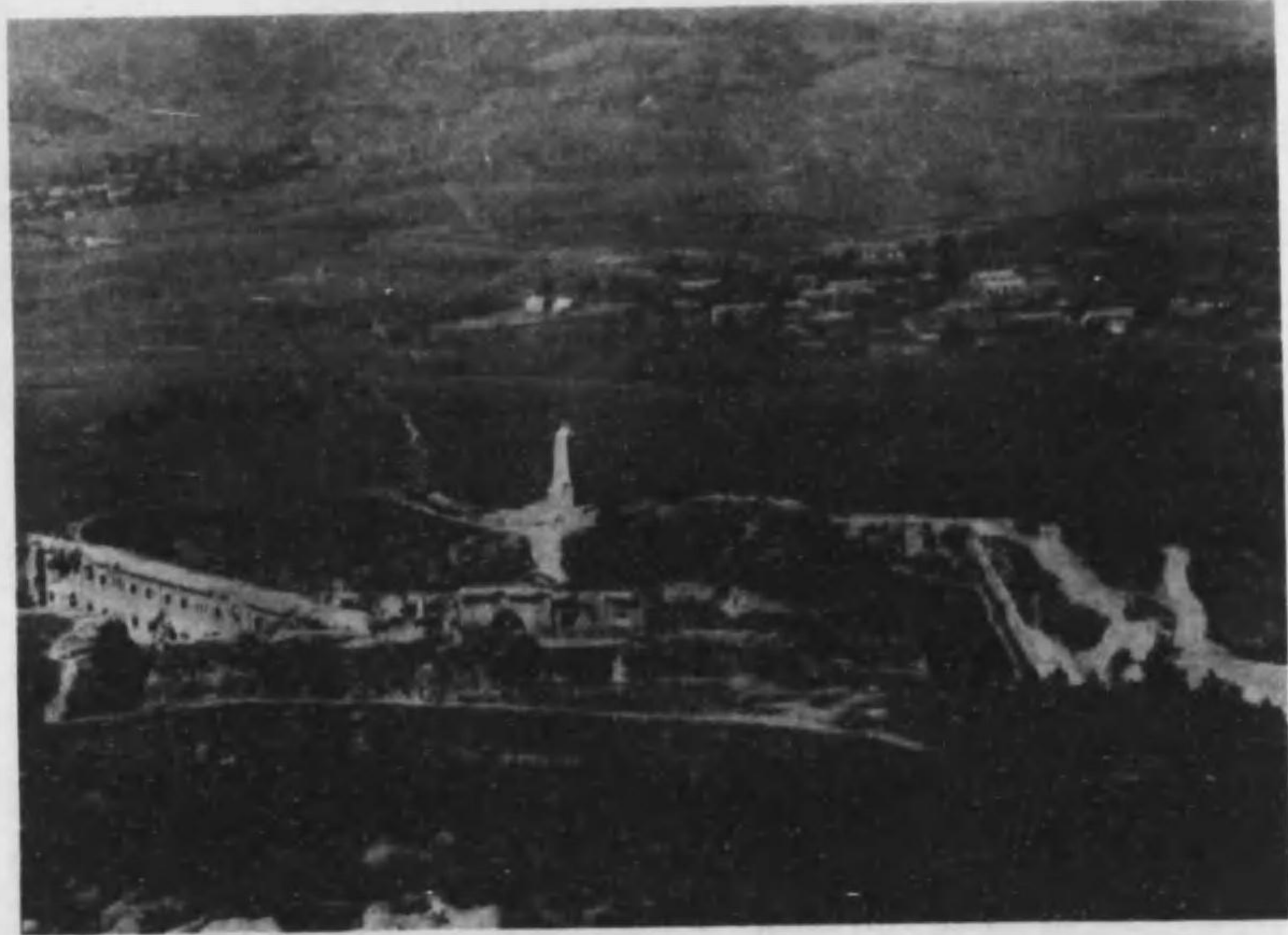
日露戦争の際、旅順半島に於ける、乃木将軍の死所。此の地は、水師營の跡にして、歴史的名所。乃木将軍の死後、此の地を會見所とする。日露戦争の際、旅順半島に於ける、乃木将軍の死所。此の地は、水師營の跡にして、歴史的名所。乃木将軍の死後、此の地を會見所とする。





英骨鎮まる白玉山

乃本白
公國山
乃玉山
白二山
は丁は
旅順の
から南
と八の
内三方
のから
と三登
の山
は山
に山
閉口
が洋
の橋
あり
少し
先か
ら麓
にた
るは
、



東麓冠山北堡壘の戦蹟

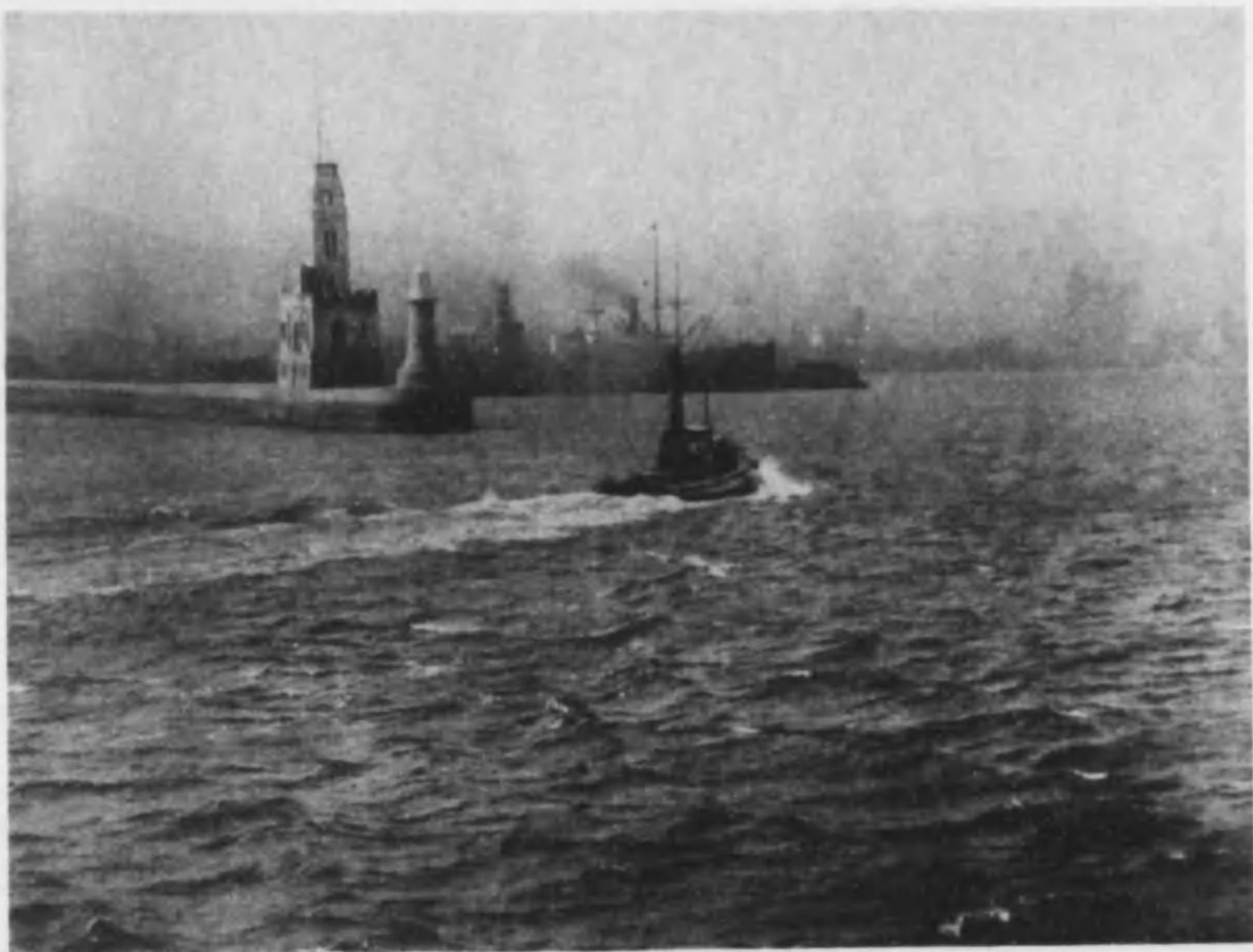
東麓冠山北堡壘の戦蹟
東麓冠山北堡壘は旅順中の白銀山から松樹山に至る
東麓冠山北堡壘の戦蹟は旅順中の白銀山から松樹山に至る
東麓冠山北堡壘の戦蹟は旅順中の白銀山から松樹山に至る
東麓冠山北堡壘の戦蹟は旅順中の白銀山から松樹山に至る

北堡壘掩兵部の構造

攻撃の當初より占領までに五十二日の長きに亘つたと云ふ金城金壁の東麓冠山北堡壘は、殊にその掩兵部の構造は頗る嚴重なもので、四壁の厚さは七八尺その中を坑道としたベトン帯で上層は土砂で蔽はれ、外部からは山のスロープと平均して決して見へない。實に用意周到の苦心を拂はれた築城法であると言はれて居る。

東洋第一大規模の大連港口

一里三町餘の長堤をめぐらした中三條の埠頭を造り、其の
繋船岸の防波堤は一萬四千二百九十尺、繋船埠頭の敷地は
即ち三町餘の長堤をめぐらした中三條の埠頭を造り、其の
として此埠頭の存する貨物は年約百五十萬噸、其の
と設備の整頓せるは實に東洋第一と稱せられ、滿蒙の大
して誇るに足る。



船客上陸の光景

入船を迎へる朗らかさは何處の港町に
於けるも愉快な情景であるが、堂々たる
大連港へ定期船が到着して乗客が上陸す
る光景は素晴らしいものである。
寫眞は定期船々客上陸の光景で、其の
左側に見ゆる建物は乗船客の待合室であ
つて、内外の設備裝飾は完備裝頓して東
洋に其比を見ないと云はれて居る。



露西亞埠頭の戎克

大連の築港内は汽船のみを取扱ひ、其の他の船舶は露西亞埠
頭に發着することになつて居る。殊に遼近の港から此の大連の
露西亞埠頭へと集まつて来る戎克(ジャンク)の数は夥だし
い實に文字通りの帆檣林立の光景を呈するが、若し夫れ雨上り
の朝などに至つては濡れ帆を乾かす是等戎克の帆が海面を照す
るが如き情景は更に一奇觀である。



中央公園の遊覽道路

大連の名勝中、一つの呼物となつて居る中央公園
その遊覽道路は、亦これ同公園の呼物である。山腹
を切り開いて東より西へと行く途すがらの景趣は又
なく佳絶である。

寫眞は即ち此の遊覽道路で、半圓形を描いて切り
崩した断西を廻る心地は頗る愉快である。

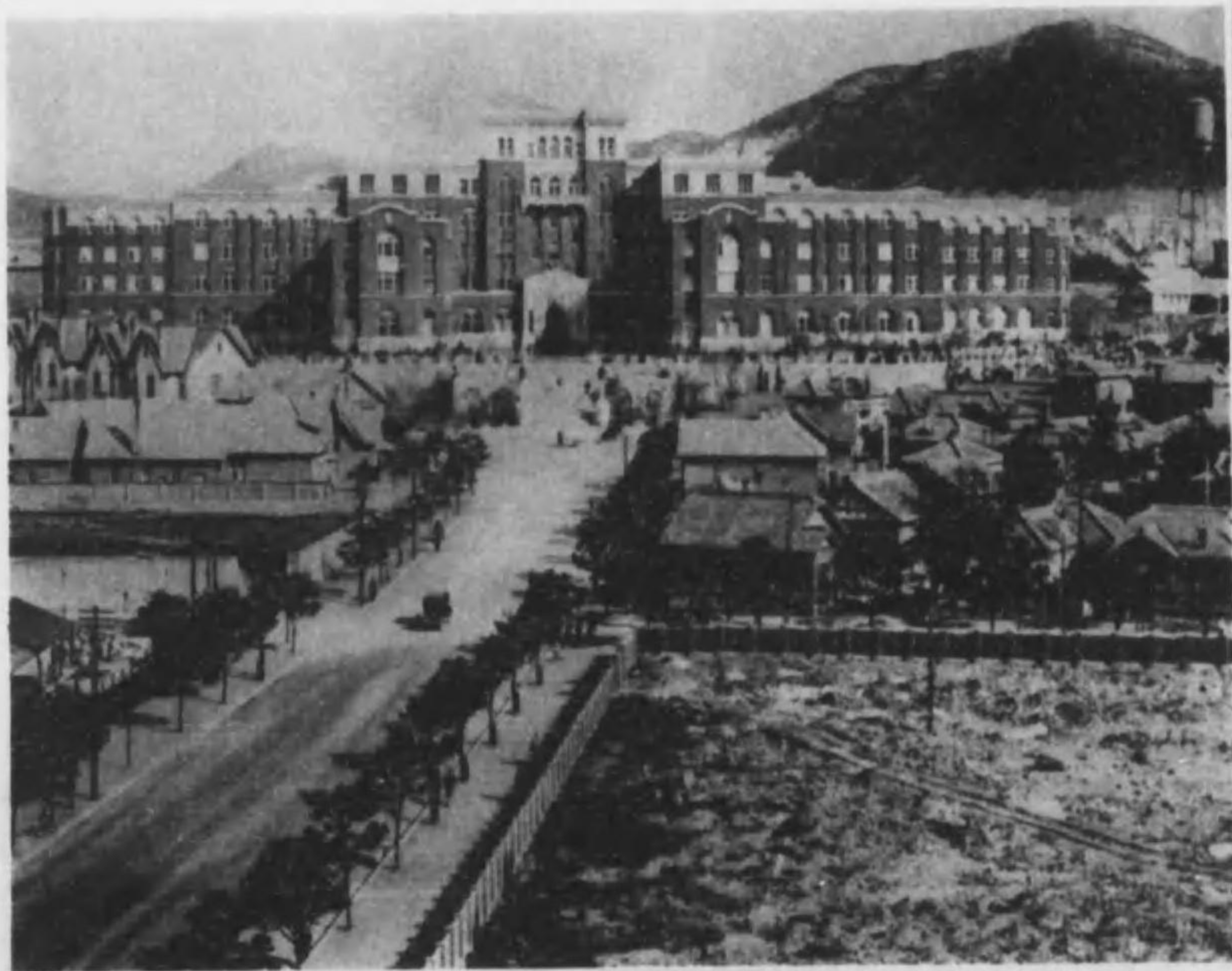


市役所の偉觀

大連市の中心を爲して居る大なる廣場の一角に、一偉觀たる市役所を居るは、大連市の自治都市としての誇りと威風凛々たる所である。

宏壯な大連醫院

滿鐵の經營になる大連醫院は南山を背景として巍然とそびり立つて居る。其の宏壯なる雄姿はロマネスク式の建築様式を發揮し、新たに大連名所に一つを加へた觀がある。因に此の建築に要した總工費は五百六十餘萬圓と註せらる。



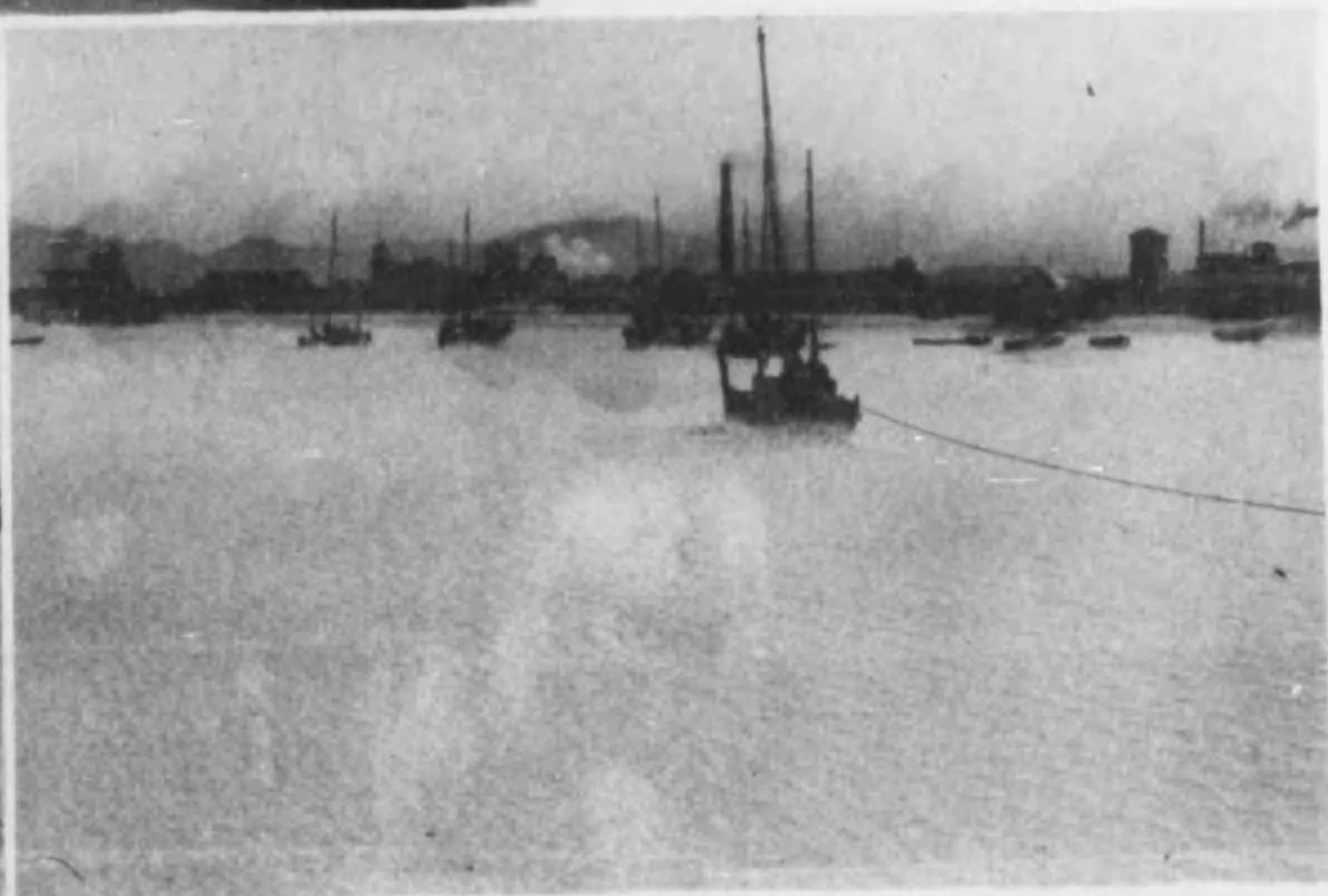
凍結した大連港

胡沙吹く風の刺しい十一月になると、大連には寒いく冬が来る、陸上は山も家も人も皆冬籠りをする、そのうちに益々寒さが襲ふて零下二十度近くにもなると、流石に不凍港と言はれる大連港も偶には凍結するに至る。写真は凍つた海の風景何といふ一種の壯觀ではあるまいか。



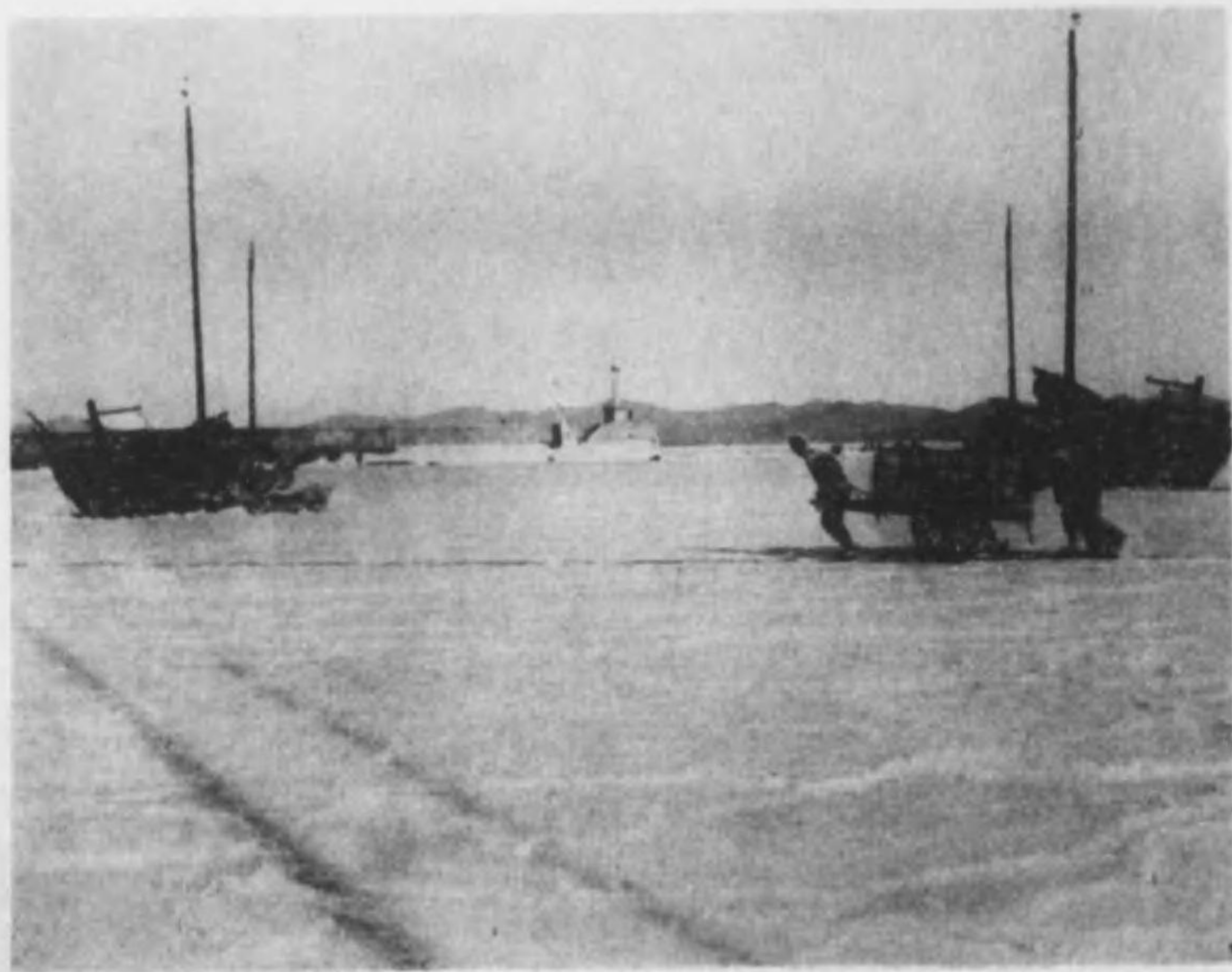
大連港氷上の荷役作業

零下幾十度といふ厳寒猛烈な折などには、珍らしく積に大連港の海面は凍結する事がある。斯ういふ場合には水深幾尺の氷上に荷車利用の荷役が開始される。また是れ凍結するにあらざれば見られぬ光景である写真は即ち斯う際の大連港町沖に於ける荷役作業である。



船泊碇の上氷結凍

く全り限す渡見てし結凍は面海全の港連大に間の夜一にか速てし來襲が氣寒な烈激な宛てふ速に結凍の此、は船たつ居てし泊碇に沖際此、るなにく如ためつき敷を瑠璃。るあでのるす呈を觀奇一いし美てれら見にく如、のもたれき置配に上盤銀大一らが





西崗子の天齋廟

支那民衆の最も古き信仰の一つに天齋廟がある。この信仰は道教と結びつけられて後世道教の一種として取扱はれて居るとの事であるが、今では是れに佛教をも取り入れて最も普遍的な支那宗教の一つとして相當の信者を有して居ると言ふ。
寫眞は大連西崗子に在る天齋廟の外観である。



埠頭に野積された

特産物

大連埠頭に殺到し來る特産物は之れを埠頭倉庫内に收容されるのであるが、奥地から南下する特産物の出廻りの最も旺盛時には幾十萬噸といふ大量の爲めに、之を悉く倉庫内に收容しきれず、野積として埠頭構内の露天に置かるゝのである。此の野積貨物に往々火災を起すこともあるといふ。
寫眞は出廻り最盛期に於ける特産物野積の光景である。

小崗子の支那人市場

小崗子は大連の西南に所在し人口拾貳萬を有する支那人市場である。街路横く曲折した街の西側に、支那一流の業々しきあくどい金看板など掲げ、支那的氣分を漲らして居る。此街は盜難品が出る事があるので、俗に「小兒盜市場」と呼ばれて居る。下層支那人の爲めに設けられたる一大市場である。





奇巖絶景の石碓屯

大連の南方、灣を擁して小村街を成して居る老虎灘の海洋横き其の南に當る海中の高巖は、或は吠ふが如く、或は怒るが如きは石碓屯の海原である。岩根を包む紺碧の海水は、奇巖怪石と相調和し、相配彩して風景絶勝を極む。夏期は銷夏の地として茲に遊ぶものが多い。大連附近に於ける有數な海洋風景地である。



石碓屯の風景

海洋にかこまれて潮風と緑の香に充ちた石碓屯は、夏期に於ける避暑銷夏の好適地であるばかりでなく、此邊また一竿の垂輪は大公堂をさめる釣客には絶好の地と言はれて居る因に、程遠からぬ老虎灘、傅家庄、星ヶ浦天の川、黒石礁等一帯の海岸は、概して怪巖奇石多く、且水清く水泳に適し夏季の行樂地として喜ばれて居る。



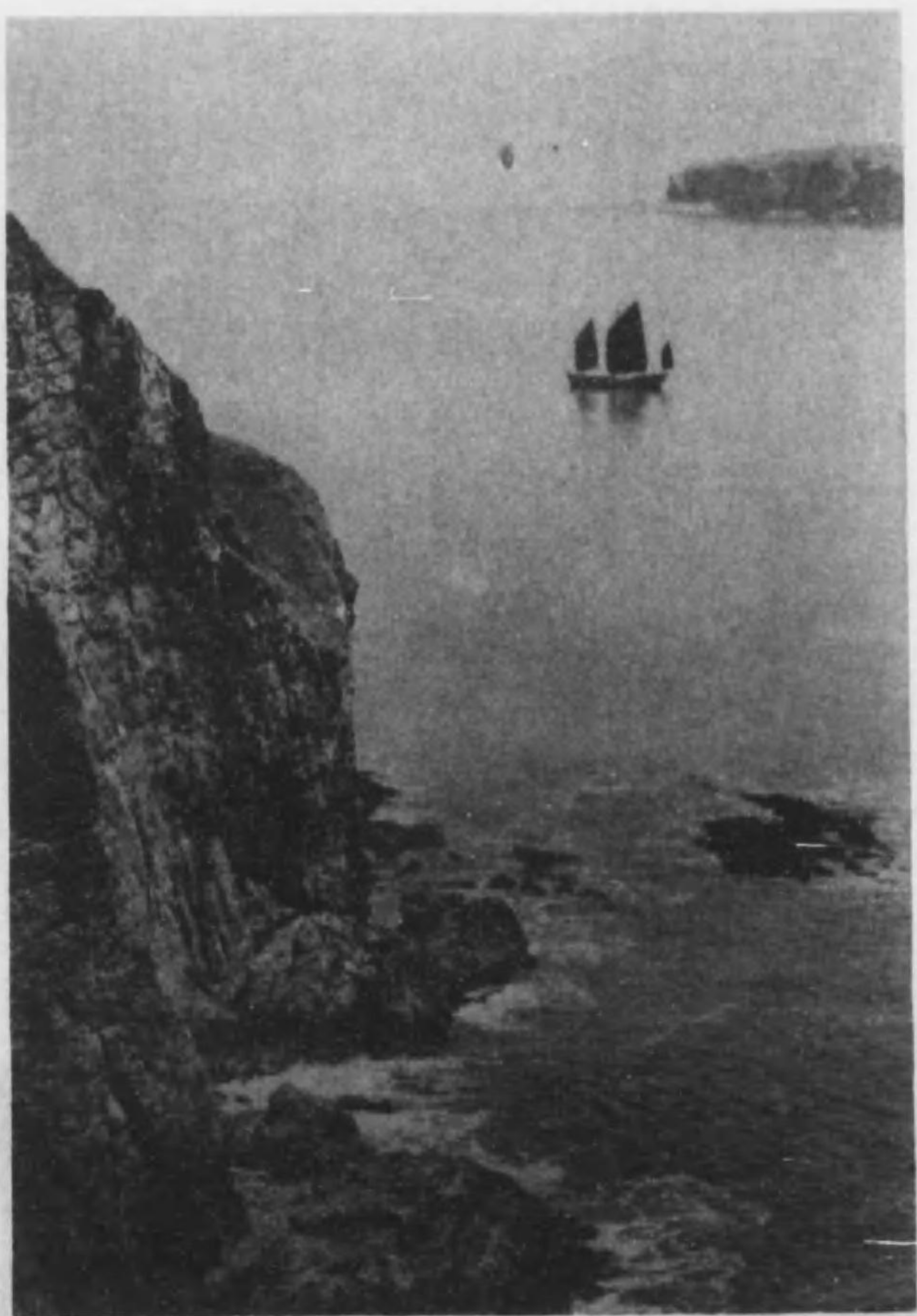
完全豪華な旅大道路

旅順と大連との連絡は鐵道に依るのみでは尙充分でなく、不便を感じしめるといふので、大正十三年に黄海々岸に沿ふて旅順と大連とを結んで、延長八里三十二町の海岸道路を、關東廳が百三十五萬圓の巨費を以て三ヶ年の歳月を要して完成したのが旅大道路である。

路幅五間乃至六間、路面はマガタチ式の碎石道で、自動車道荷馬車道とに分ちて通行に便し、途中には白銀山及び老座山の二陸道があり、玉の浦、大龍王の二大橋を架し、沿道の風景明媚、自動車を驅れば一時間で踏破し得る實に愉快な豪華的感ぜを與へる。

陸繋ぎの小平島

旅大八景の一つとして開えて居る小平島は、島と稱されて居るが連繋砂洲で陸地繋ぎになつて居る。けれども五六十年以前は四面海を周らした獨立の島であつたと云ふ長さ十町餘の砂洲の上に港町がある。この港は山東との通路に方り、營口や大連が繁營になる以後は遼東半島の要津として榮へてゐたが、今は其當時の面影はない。其の東灣は戎克の碇泊に適し西灣は漁撈に適して居る。南端には五峰が並び立ち、其最西方にある玉皇頂には高麗城址が残つて居る又大洋に面する側は海崖絶壁を爲して風光頗る佳い。此邊の奇勝と港の風景とは大連近郊諸勝中最も優秀である。





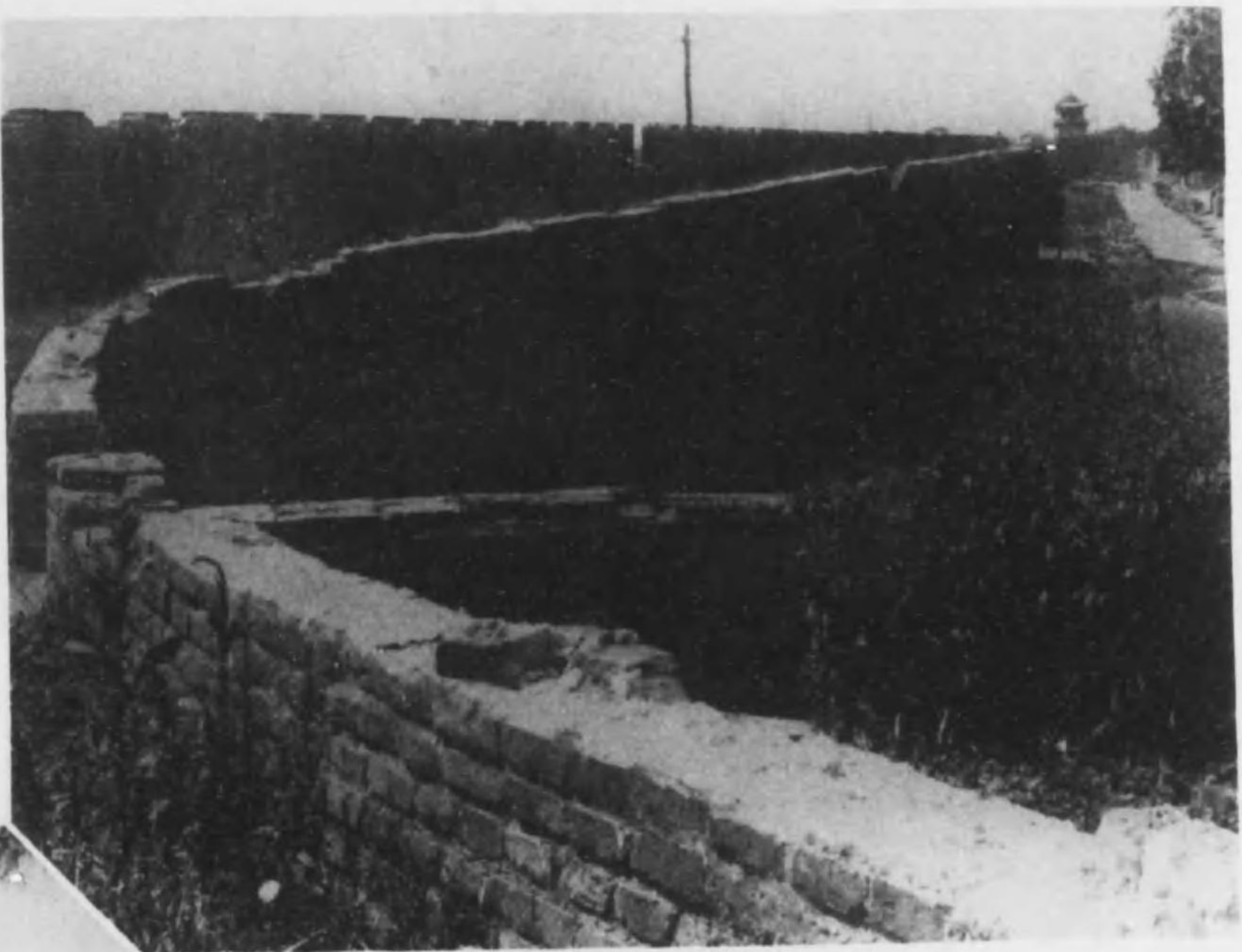
金州の龍王廟

金州の北大河を渡つて西北に進むと暫くにして釣魚臺といふ巨巖に達する。尙少し進んだ處に小丘がある。此小丘は獨立したもので、その巔屋の下は夜克が碇泊して居る。小丘の頂上には龍王廟があつて龍王、雷公、電母、風伯、雨師、魚浪神、海夜叉等の塑像が安置し祀られてあつて、旱魃の際には郷民は茲に來つて雨を禱ると忽ち靈驗があると傳へられて居る。

城下町の菓子屋

金州は古い歴史を有する土地だけに、其の城下町には古い趣きが漂つてゐる、商賈の店構へなども陰翳である。寫眞は「點心」を賣る店である。點心とは茶菓子の子の事で、即ち菓子屋である。此種の家には「官禮茶食」、「京式八件」など、記された看板が掲げられてある。因に、點心の點は、點茶の點と同じ義であると「剪燈新話」の註に記されてある、又「輟耕錄」には早飯前及び午前後小食を以て點心を爲すとある點心とは間食を意味するものである。





金州の城壁

金州は其の地形として旅順、大連の腰を扼してゐるので古來軍事上、政治上頗る重要な地位を占めてゐる。そして其の必要上より築造された城は古く元時代から存したもので明時代にも土築のものであつたが洪武十年修築して甌城に改めた、當時の城壁は周圍六支里、高さ三丈五尺、外濠の深さ一丈七尺濶さ六丈五尺で城は亞字形を成してゐた。現存の城は清朝の乾隆四十五年の修築で東西四百三十六間、南北五百十五間、周圍三十一町四十二間、城内の面積二十二萬四千五百坪、樓門は四つありて東は春和、西は甯海、南は承恩、北は永安と稱し東南角には魁星樓がある。城壁の上には明代から大砲が据付けられてゐるが其新舊を合すると三十三門に達してゐる。寫眞はその城壁で周圍約一里野原に古典的建築の面影を留めてゐる。

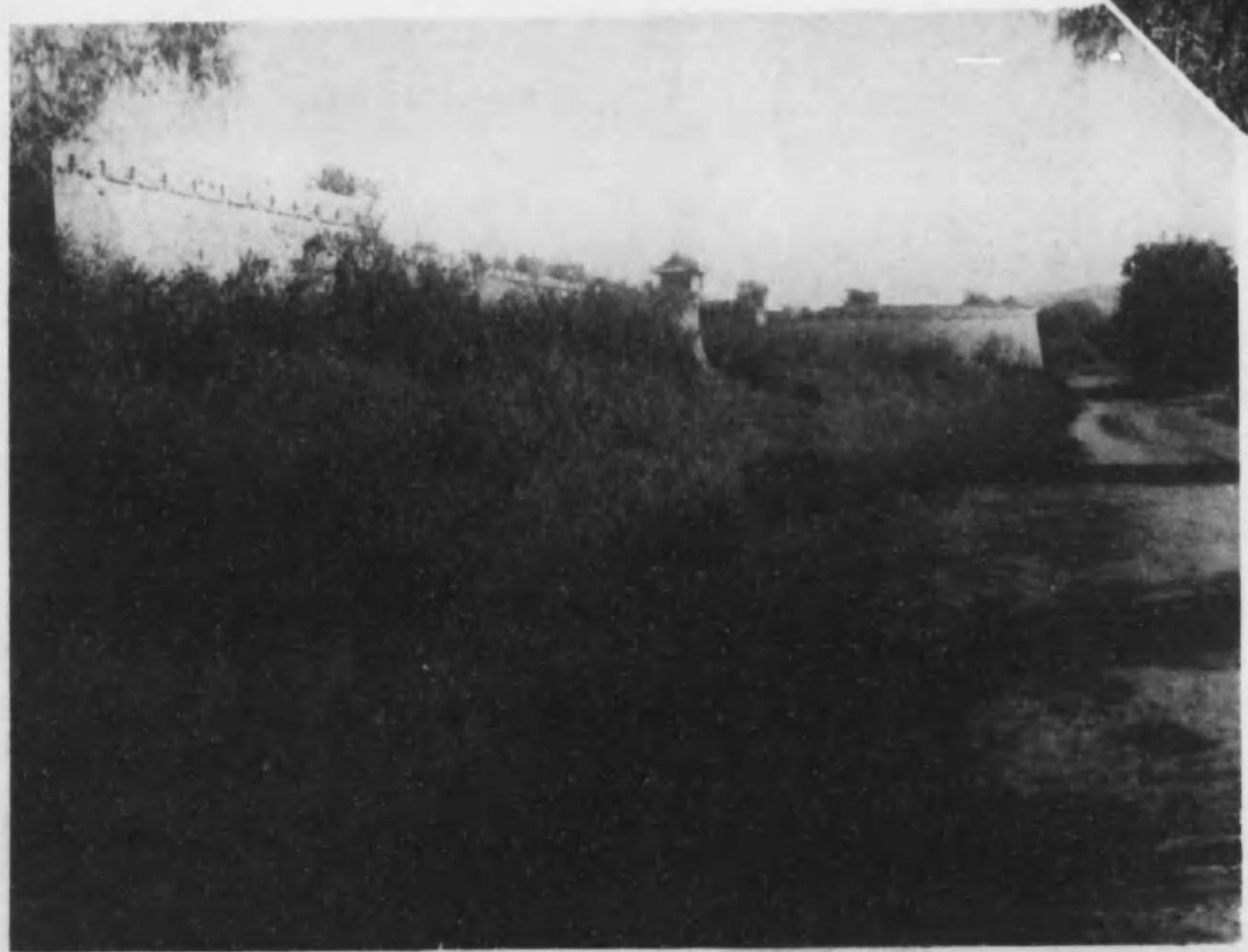
秋趣豊かな金州城外

金州は日清、日露の兩戦役の古跡が跡からず在りて到るところに目のあたりに當時の歴史を物語つており茲に来る日本人には殊に感慨深いものがある。城内は昔ながらの平和気分が漂つてゐるが、城外は廣々とした蒼空を仰ぎて灰色の城壁を背景とした野趣、わけても秋季に於ける風色、自然の景趣は又格別である。日露戦役の際、乃木將軍の吟ぜられた

「山川草木轉た荒涼、十里風は腥し新戰場、

征馬前まず人語らず、金州城外斜陽に立つ」

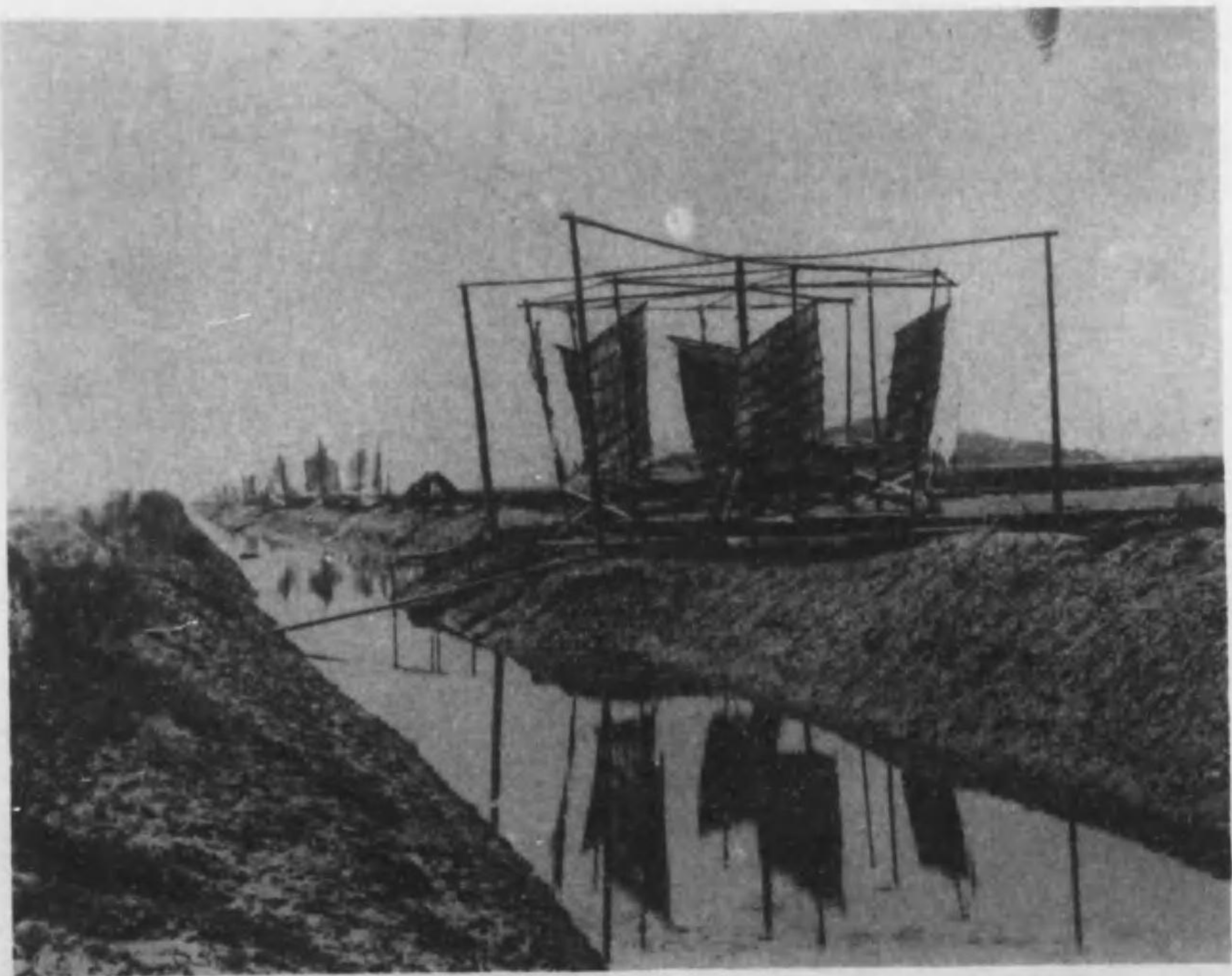
の詩句も漫ろに思ひ出さるゝのである。



瀋 吸 用 の 風 草

滿洲に於ける經濟資源として農産、鑛産、林産、畜産等種々あるが、水産の一部としての鹽も亦見逃すことの出来ぬ資源である。滿洲の鹽産地としては關東洲が最も有數な地位を占めて居る。専門學者の調査によると、關東洲の鹽田は、本邦人及中華民國の經營で、面積及生産高は漸増してゐる。現在の鹽田七千町歩、此の産額は二十五萬噸を超へてゐるが、鹽田見込地が約七千五百町歩あるから需要に應じ産額を現在の倍額にすることが出来ると云はれて居る。普商店鹽田に於けるのみにても製鹽高は一ヶ年四萬餘石に及ぶとの事である。

寫眞は鹽田湖波用の風車であつてジャツクの帆からヒントを得て、自然力を巧みに利用した支那人の考案に係るものである。



豆粕の積み卸し

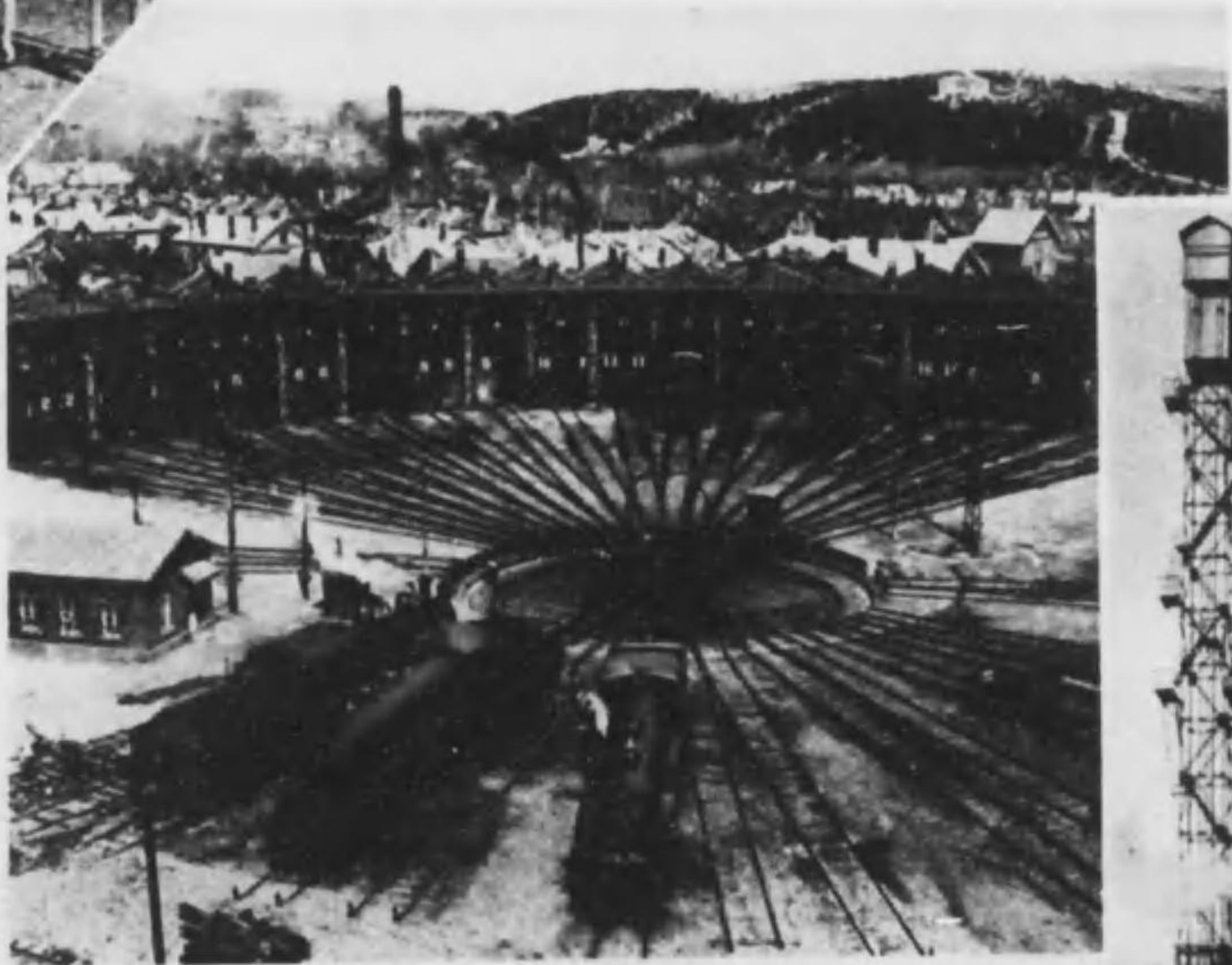
油房の經營は滿洲に於ける我經濟資源の一つとして大なる事業の一つであるが、其事業は決して單なる容易なものでは無い。特産の滿洲大豆を應用して大豆油と豆粕とを製産する額は莫大な數に達する。

寫眞は豆粕の荷の積み卸し作業の一部を示す情景である。豆粕積卸し作業は一種の技術を要することとは言ふまでもない。聽くところによると貨車から豆粕荷を卸すには二枚づゝ取扱ふのが普通の原則であると云はれて居る。



列車組成驛たる瓦房店

以前は公主嶺、遼陽と共に、東海鐵道南部線の三大驛として知られた地で、機關庫、兵營などの設備が大規模に經營されたところである。現在でも我が滿鐵の列車組成驛として重要視されて居る。且つ此地は復縣の中央部に當り交通の便多きため民國十四年に復縣公署を始めとし從來復州にあつた諸官衙は悉く此地に遷され之に伴ふて支那市街が計畫成立されたので瓦房店は一層重要な都邑となつたのである。瓦房店の町は四周山にかこまれた盆地の中に立つて居て、其建物は露治時代の遺物が多くあるを以て、往年露國が此地の經營に力を注いだ事が察知される。寫眞は瓦房店の堂々たる機關庫と、コーリング、ステーションである。



高脚踊りの風俗

一般に高き足駄を穿き、各自思ひ／＼に裝飾を凝らした服裝を爲し、各所屬部署の旗幟であらうとも思はるゝ旗を手にして整列して居る、此の寫眞は蒙古の風俗の一つとして傳へられて居る所謂高脚踊りの光景である。

凡そ一國、一都邑の特殊の風俗にも、それ／＼傳統的、慣習的に尊重されて居る意味深きものあるは取りも直さず其郷土の一種の誇りとして保存され尊重さるゝものである。蒙古の高脚踊りの如きも亦特殊の興味深き郷土的藝術の一つであらう。



往時を偲ぶ古風な遺物

海城は古い歴史を有する土地だけあつて、城内には興味ある往時の遺物が残存して居る。馬を繋ぐ「挽馬標」、又は乗馬の踏臺用の「上馬石」の如きは頗る古趣味豊かなものである。そうして是等の遺物が、屋敷町の旗人の舊邸と對照して封建的情調を覺へしめて居る。

因に、清朝時代には、此の上馬石に格式階級があつて三品以上の家では三段の上馬石が置かれ、それ以下、又は平人にあつては二段のものを使用したと云ふ事である

海城々外の殷賑

海城はその文字の示す如く往時は海に臨んだ土地であつたが、遼河の沖積作用の爲め現今の如く海岸から遠隔するに至つたのである。今より約八百年前の遼時代には海州と呼ばれ古くからその名を知られて居る。故から牛莊城へは西方七里、柞木城へは東南五里二十五町、岫巖へは三十里で達する朝鮮官道上咽喉の要地である。

海城の城壁は高さ三丈の磚築で壁内は硃石を積んで改修された部分が尠くない廻周一里餘、東西南北の四門の外に小南門をも開かれて居る。城外の商店は樓閣、城壁などにさしかけた店舗で、その建築は甚だ不統一であるが、何れも相當に繁昌し、南門外などは平俗な觀ではあるが最も殷賑を極めて居る。

